今夜町に宇宙生命体がふってきたそうです

ワシワシ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
今夜町に宇宙生命体がふってきたそうです

【Ｎコード】
Ｎ３８５７Ｕ

【作者名】
ワシワシ

【あらすじ】
平和な町に、宇宙生命体『蟲』がふってきた。でも誰も知らない。閉鎖された町と学園で、主人公達は現状打開に臨むが……無気力中二病がデフォルト主人公、お調子者弟と女王様ですがな姉双子、ケツの穴に爆竹ぶち込みたい爽やかスポーツ少女、眼鏡を光らせるのは仕様ですから委員長、曹洞宗だけどアーメンな影の薄い彼、オラオラ妖精も出てくるよ。でもグロいよパニックだよ元気だよ。大昔の作品をリメイク移植中。昔のことには決して触れないでください。

導入は登場人物がいっぱいだそうです（前書き）

心理描写が、当初（思考）ですが、段々――思考、となります。手直ししきれずすみません。

導入は登場人物がいっぱいだそうです

濃淡のあるチョコレート色の帯が、木々の合間に覗いている。

レプリカ煉瓦を敷き詰めた鎮扇(しずめおうぎ)公園の遊歩道だ。道はオブジェやモニュメントの転がる噴水広場から、公園の東西南北に向かって放射状に延びている。上空からの視点であれば、まるでヨーロッパの円村のミニチュア版にも見えたであろう懐古趣味的に整然と設計された公園だ。

濃紺の空には、茫洋として薄墨色の雲の縁を輝かせるやや欠けた下弦の月が浮ぶ。月光は余す所なくその冷光でもって降り注ぐ。覆い被さる木々の樹幹は、光の雫を受けててらてらと肉厚の葉を光らせている。重なり合う葉の隙間を零れ落ちるようにして銀色の糸が路上に射す。

そのチョコレート・ロードに一つの人影。立ち止まり、ぽつりと乾いた呟きを漏らす。

今日読んだゲーテの戯曲「ファウスト」より、

「ワルプルギスの夜、か」

あるいは真夏の夜の夢。

とても恥ずかしい台詞をはいてしまった、と頭を抱えて地面をごろごろ転がりたい気分になるが、本当にここは言いえて『妙』な場所なのだ。

橋月は頑固に中学生の折から使い続けている古びた学生鞄を持ち

直した。陰影に彩られた彼女の顔はしかめつらになっている。もう夜の八時をとうに回っている。いくら七月とはいえ、日が落ちて夜の帳が下りるには充分すぎる時間帯だ。

彼女としてはもう少し、塾の自習室にいたかったのだが、小規模経営の私塾では八時を回った辺りで電灯がぽつぽつと消され、“カエレ”という無言の圧力をかけてくるのだ。

（でも多分、私が帰ってこなくても誰も気にとめないと思うんだけど）

嘆息した。

途端ざわり、と木々が不穏にざわめく。

（何だか）

気味が悪い、と言ったら、少し言いすぎだろうか。

それでも、この独特の感じは自分に酷く居心地の悪さを覚えさせるのだ。

年に二、三度いつもは何の変哲もない夜の公園が、奇妙な華やぎを帯びる事がある。

別段変わったことはないのだが、何となく幻想的なベールに覆われて、『何か起りそう』とか『起ってもおかしくない』といった雰囲気になるのだ。普段はすました仮面を被っていて普通の公園ですよ、という顔をしているのに、何かの拍子に素顔を覗かせて何も気付いていない自分の事を嘲笑っているような気がする。

（被害妄想どころか電波まっしぐらだよな）

分かってはいるのだけれど。

自分はこの公園が嫌いなのだ。落ち着かないし。妙にそわそわして、胸がざわめく。

通学路だから仕方なく通るのだが、なるべく近付きたくない場所の一つになっている。

幻想的で風情のある、おまけに人通りも少ない好スポットときては、恋人達の溜まり場になっても何らおかしくない。

その割に閑散としているのは、幽霊が出るとか、覗き魔が多いとか言う虚偽の程がはっきりとしない噂のせいなのだ。

誰が流したのかは知らないが、橋月にとってはありがたい噂である。塾帰りに、恋人達の間を平然とした顔をして突っ切るにはやはり度胸がいる。

放っておくとますます眉間に皺の寄りがちな彼女は、何とか顔面の筋肉を弛めるべく心がけながら再び止めた足を動かし始めた。

さわさわと夜の冷気に混じって葉鳴りの音がする。しかし穏やかな夜の一場面も、次の瞬間に荒々しく破られた。

ざ、ん。

「わっ」

橋月は突然傍らを駆け抜けた強い風に慌てて空いた方の手で頭を押さえた。癖のない細い髪質が災いして、髪は風に思う存分翻弄され始末に負えない状態になってしまった。

もともと愛想の良い方ではないが、絶望的に険悪な表情になる。

「くそったれ」

彼女は女子高生に似合わない悪態を吐いた。

毎朝髪型がうまく決まらないと悪戦苦闘するタイプではないが、傍若無人な風に頭を滅茶苦茶にされては誰しも腹が立つと言うものだろう。

「最悪」

――くすくす。

ばっと振り仰いだ。辺りを用心深く見回す。無人だ。煉瓦を模した石畳に延びているのは、自分の影だけ。

（今、笑い声しなかったか？）

自問自答してみるが、答えなどある筈もない。終に馬鹿馬鹿しさが勝って橋月は緊張を解き、自分に脱力した。

（気のせいか。だよな）

この時折まとわりつくような視線を感じるのも全て。

（気のせいか、単なる自意識過剰）

緩く首を振って再度歩き始めた。

それでもと思う。

（やっぱ何かいるよな、この公園は）

＊＊＊

「やーはーりー胸だろ胸。顔も大事なポイントだとは思うが、胸の大きさには変えられんと思うのよ俺」

第一声に、軽蔑の目を向ける女生徒たちの冷たい空気を完全に無視して、彼らは身振り手振りで話し続ける。

「お前巨乳に執着する男ってマザコンの気ありって事なんだぞ。はあはあ、危ない兆候。自重してくださいっ」

「ばっか。男なら誰でもマザコンなんだよ。授乳期の記憶が潜在意識に焼き付いているから、男は皆巨乳が好きなの」

志田耕太郎（しだこうたろう）は眼鏡の銀色のフレームをぎりぎりと握り締めて力説する。久村笙（くむらしょう）は呆れつつも今度は己の見解を述べた。

「俺は胸じゃなくて総合評価だねえ。美醜に関わらず、顔は人の履歴書です。ときて第一印象。話してみてフィーリング。脚線美も大事でしょ、うーんウエストがきゅっとくびれてる子がいーなー。こうぎゅっとした時にだな」

むなしく腕が空中を掻いた。存在しないものは抱きしめられないのだ。

「お前なー、それ逆に欲張りすぎだろ。俺なんか一点にしか拘らんわけだからお前より無欲なわけよ」

「たろーちゃん、自分の事を自分で無欲と言う人は、実は強欲」

志田は容赦なく丸めたノートで久村の後頭部を殴った。たちまち、久村は身をくねらせて、頬を押さえ、しかも小指を立てたままなみだ目に訴える。

「酷いわ！　姉にも殴られた事ないのにっ」

「オカマ言葉はやめてください。あと元ネタわかんないって、ところで久村それなんか違うだろ」

「だって俺の親外国に行ったまんま半ば原住民と化しているしよ。マジ帰化してんじゃねえのって感じだし？　今現在は姉ちゃんが俺の保護者なんだってば」

「たえこさんか……」

志田の表情は複雑に歪む。久村の姉であるたえこは、志田の美的価値基準からすると、堂々のDカップいやもしや着やせしてそれ以上では疑惑という事で充分合格ラインなのだが、いかんせん性格が許容範囲を遥かに上回っていた。

「ああ、そうだ。俺たえこんとこに行ってリーディングのテキストを借りてこなくてはいかんのだった」

突然すぎる久村の台詞だが、彼らは大体におてフィーリングで会話する。

「双子ってこういう時便利だよなー」
「おまけにたえこってば英語の鬼だから」

中学校教育について『最初に習うのがＴｈｉｓ　ｉｓ　ａ　ｐｅｎ．　とかいうレベルの全然実用を無視した授業ってのが許せないのよ！だから日本人は国際的政治の場で通訳なしじゃ話が出来ませんなんて情けない事態に陥るの、日本より経済的事情から教育水準が低い国の代表者の人達だって流れるようにとは言わないまでも国際公用語をきちんと自分の口で話しているのによ！？』と気炎を上げてるような、そういうちょっとどころか大分ずれた女である。双子でなければ、爽やかに「あ、いちばんぼしみーつけた」などといってスルーしたいところである。

久村は席を立って志田にひらひらと手を振った。

「ほんじゃまあ行って来まあす」
「行け行けとっとと行け、二度とかえってくんな」

不義理な友人に向かって、適当に言葉を返して、久村は笑いながら教室を出て行く。

（さーて、我が麗しの姉ちゃんは三組だったよなあ）

一階上の教室だ。四階にはあまり足を踏み入れた事はないのだが、歩けばすぐ誰からも声をかけられる。知り合いもいるし、そうではないのもいて、つまりは久村の顔は異様に売れているのだった。

「よお久村。姉ちゃんとこいくのか？」

友人に。

「あ、久村君！」
「何やってのよー」

女の子とか。

「久村お前部活出ろよー」

お叱りの言葉などもありつつ。
時折ボディタックルなども受けたりなどして、大幅に時間をロスしながら漸く三組の教室に辿り着いた時、久村は愕然と立ち尽くしてしまった。

「空ですやん」

教室は見事に無人だった。見張り台に上った水兵のように額へ手を当て目を凝らしたが、やはり人っ子一人いない。
なにこれ、厄日？　と声に虚ろな響きを帯びるのは致し方ない。

（体育か何かかなあ）

バッドタイミングとはまさにこの事だろう。それでもなお未練がましく人気のない教室を覗き込んでいたら、

「あれ、久村どうしたのー」

やたらめったら明るい呑気な声に、暗い目で久村は振り返った。
ショートカットの健康的女子高生、若葉千尋（わかばちひろ）は、久村の顔を一瞥するなり、本当に厭そうな表情をして、

「うわ、縁起悪そうな顔。こっち来るなしっしっ」

容赦ない言葉を投げつけてきた。なんという情のない女であろう。

しかし久村は、己の利益を取る為には何を言われようが些細なプライドなどそれこそどぶに投げ捨てる心積もりであったので、地獄に仏とばかり早速彼女を拝み倒しにかかった。

「若葉ー、お前リーディングの教科書貸してくれー。今日俺当たり日なんだよー」

「あ、ごめん。あたし今日リーディング持ってないや」

多分、微塵も悪いとは思っていない。あっさり断る若葉に久村は最早本能的な演出で、かつ半ば本気で大袈裟によろけて見せた。

「役に立たん奴め」

無礼な言い草に若葉が怒り出す。

「こら、自分が元々悪いんだろ。でかい口たたくな」

「もういい。もともとお前なんか頼りにするものか。他の奴を頼るぞ俺は」

久村は瞬時に立ち直って辺りを見回した。背後で若葉が「けつの穴に爆竹ぶち込まれてえのかてめえ」と呟いているのは、何も聞こえない。若葉さん、過激派過ぎる。そこに痺れないし憧れもしないから。

（うーん、手頃な奴は）

ふと目を引いた女生徒に、面識はなにも関わらず、久村は深く考えず生来の人懐こさで気付いた時にはにこにこと話しかけていた。

「うわーすんません、いきなりであれなんですけど。リーディングのテキストとか持ってません？」

にこにこと物怖じせず愛想良く尋ねた久村に、声をかけられた女生徒は思考停止したのか、地味な印象の割に、よくみれば意外に整ったその顔を驚きに固まらせて、自分の後ろを振り返った。彼の後方、更に久村を飛び越して向こう側に人はいるにはいたが、五メートル程先で談笑しているきりで、どうやら声をかけられたのは自分なのだと気付いたらしく、不審そうな目つきになった。人差し指で自分を指差して、

「私？」

「うん、そうそう。うわまじでごめん。いきなりで訳分からんよね。教科書忘れて困ってるんだ。持ってたら貸してくれません？」

女生徒は少し首を傾げて、頷いた。

「ああ、持ってるからいいよ。ちょっと待ってて」

すたすたと隣のクラス―五組に入って行くと、右手にテキストを持って再び表れた。

「どうぞ」

「ありがとー！すっごい助かった。あ、授業これから何時間目かにある？」

「いや、もう終わったから。放課後までに返してくれればそれでいいよ」

「えっと、名前は」
「橋月。出席番号二十七番だから」

じゃあ、と言うと無表情になって教室に戻ってしまう。肩透かしを食らうあっさりとした応対だった。

「うーん何か新鮮だね」

自分にしか聞こえないような独り言を呟いた久村は、横で「あっれー」としきりに首を捻っている若葉に気付き、目を瞬かせた。

「どうしたんだよ」
「橋月、橋月さんだよねえ今の」
「はあ？今そう名乗ってたじゃん」
「私五組なんだけど」
「あ、同じクラスか」
「うん、そう。そうなんだけどさあ」

若葉にしては随分と歯切れが悪い。

「何だよ若葉」
「ううん、何ていったらいいのかな、違和感あるんだよねえ」
「何ソレ」
「同じクラスなのに、何か初めて見た気がする」

彼女の言わんとする所がよく分からなくて、久村は生来の無責任楽天家思考からまあどうでもいいやと軽く受け流した。

「ああ、そういうのってあるんじゃないの？　同じクラスでも一言も話さず学年上がる事くらいあるだろ」

自分はあまりそういう体験がないので何とも言えないけれど、中には話し下手な者もいるだろうし、ありえない話ではない。

「違う、だからあ、ああもう！　上手く言えないよー」

ぐしゃぐしゃと頭を掻き毟る若葉に、「これこれ若い女の子が」などと注意するが、彼女の苛々は治まらないようだ。

と、後に人の気配を感じた。

「お、久村と若葉か。異色の組み合わせだな」

話に割り込んできたのは、生徒会副会長の白岡正樹（しらおかまさき）だった。

久村が口を開く前に、若葉が廊下中に響き渡り、他の生徒が何事かと振り返るような大声を出した。

「あああああぁぁあああーいいとこ来たよ白岡ァ！　ねえねえ、あんたも五組だから聞くけどさ。橋月さんってうちらのクラスメイトだよねえ！？」

白岡は突然ふられた質問に目を瞬かせると、急に押し黙って眉根を寄せた。

「……橋月さん？　ああ、いた……よな」

（おんやあ）

久村は意外さにおされ、目を見開く。

白岡がこんなに歯切れの悪いあやふやな返答をするのも相当珍しい。たえこが英語の鬼なら、こいつは本当に人間ですか、別の次元

からきたうちゅうせいめいたいですといってもかまわないのよ？
と突っ込みをいれたくなるような記憶力を持つ男なのだ。
久村は自信のなさそうな白岡に遊び心を大層刺激された。こういう時に苛めないでいつ苛めるというのだ。久村笙、いつもいじられる側だが、いじれる時はいじり倒す。まだ死んでないばっちゃも言ってた。男は倒さねばならぬ時があると。なにを倒すかはフィーリングだ。

「おいおい、イインチョー。お前まで健忘症かー？」

一年の時同じクラスで、白岡が一年間委員長の座を死守した事から（無理矢理他の者が推薦したのだが）、久村は未だに彼の事を委員長と呼ぶ。生徒会副会長に当選してからも、渾名が格上げされないのは久村の単なる嫌がらせだ。
白岡はやはりむっと眉根を寄せた。

「イインチョーと変に語尾を伸ばすな。清く正しい日本語の発音を心がけろ。それにしても、橋月さん？　何か記憶にないんだよなあ。俺仕事柄、一度も話してない奴でもきちんと名前と顔が頭に入っている筈なんだけど」

さりげに凄い事を言う。一歩間違えれば厭味と取られても仕方のない言動であるが、さらりとしているので悪印象を与えない。
同意者を得て、若葉が俄然拳を握り主張した。

「でっしょー！　橋月さんって存在感超薄いよね！　つーか、いくら存在感なくても、同じクラスにいたらとりあえず目に付くじゃん。それで、こんな奴がいる、程度には認識するんだけど、あたし七月になっても橋月さんの顔一回も見なかった感じするんだよね。今、そこで久村が話しかけて初めて顔見た気がするの」

一気に捲くし立てる。久村はあまりにも熱くなる若葉に尋常ならぬものを感じて、何言ってんだよ、と笑ってその場を有耶無耶に取り繕おうと口を開きかけ、止めた。

（なーんかなあ）

白岡までも存外真剣に考え込んでいる様子なのに、もしかして大事？　という気分になって来たのだ。しかし今一彼等の危機感が理解出来なくて、どうしてもふざけた口調になってしまう。

「おーい、イインチョ。お前までホントどうしたの？」

「いや、何だろうな。うーん、ちょっと他の奴には説明しがたい」

二人して難しい顔をする友人達に、久村も訳は分からないながら一緒になって首を捻ったのだった。

＊＊＊

……驚いた。

橋月は椅子を引きながら暴れる心臓を宥めていた。

（人から声をかけられるだなんて、何ヶ月ぶり、いや半年ぶりくらいか？）

比喩でも誇張でもない。全くの他人から、自分の存在を認識され声をかけられる。そんな事はここ半年ほど一度もなかったのだ。

クラスメイトとも殆んど会話をしていない。会話せずとも充分事足りた。それ以上に一人で佇んでいても誰も気に止めなかった。

自分が異常に人から関心を払われない事に気付いたのはいつ頃だったろうか。単に存在感が薄いのだと無理矢理己を納得させていた時期もあった。しかしそれだけでは説明がつかないほど、橋月は人々から完全に無視されていた。

まるで橋月がその場に存在しないかのように、幽霊か空気の一種であるかのように周囲の人々は彼女を完全無視した。

彼らはそこに何か物体があって、避けなければぶつかる、という程度にしか橋月の事を認識していないようだった。

自分はこちらから物理的に働きかけるか、予め(あらかじ)自分を捜そうという明確な意思を持っている人からしか存在を認識されない。

そうしない限りは、存在自体が無効化される。誰も、誰も自分がそこにいる事に気付かない。

愕然とそれを悟った時、橋月は拒絶するでもなくただ受け入れた。

誰にも関心を払われないのなら、それならもう何もしなければいい。考えようによっては、自分は苛めのターゲットからすら逃れているのだから。

このまま淡々と日々が過ぎていくのだと思っていた。だから、彼が話しかけてきた時思った以上に動揺した。顔はその衝撃を隠しきっただろうけれど、胸の内は暴風雨が吹き荒れていたのだ。

(よりにもよって、あの有名人が)

良い意味でも、悪い意味でも有名な人物だった。
校内関係の事には疎い橋月でさえも、彼の名と顔には覚えがあった。自分から一々彼の動向を気にかけていたわけではなく、単純に彼、久村笙は異様なまでに目立っていたのだ。
イベントがあれば、必ず彼がその中核にいたし、賭け事の胴元にも彼の名がまず挙がると来て間違いない。普段の学校生活のうちでも何かと注目を浴びる男だった。嫌でも目につく。その上双子の久村姉弟と言えばもはや命婦(みょうぶ)高校の風物と化していた。

(ああ、何だか面倒臭い奴に教科書貸しちゃったな)

借りたものを返却しに来てくれるのはいいのだが、その時あまり騒々しくして欲しくない。

(さっきも、余計な注目浴びちゃったしなあ)

今まで細心の注意を払って、誰とも接触を避けて来たのに、今更人間関係でごたごたを起こしたくない。
嘆息して、ふと得も言われぬ香を嗅いだ気がした。

(何だ、いい匂い)

視線を落とした先に、机の上に組んだ自分の手。その手の甲にピンク色の花びらが張り付いているのに気付いた。

(桜?　季節はずれな……)

人差し指と親指で摘まんで、西側の窓に向け陽光に透かしてみた。
本人も気付かない内に、口端に笑みが上っている。
それを教室の隅からじっと見つめている人間がいる事に、花びら

に見入っている彼女が気付く筈もなかった。

双子なのどっちなの変態なのでも鬼畜なの

ヴィクトリア調に設えられた調度に取り囲まれた一室に、ふわりとよい香りが漂う。

「うーん、夏はアイスティーに限るわねえ」

硝子張りのセンターテーブルに置かれたグラスには、粒の揃った氷と赤い液体が注がれていた。ブランデーをほんのちょっぴり垂らしたカシスティーである。

「カシスもいいけれど、ティーフロートやキャンブリック、アイスティーロイヤル、セパレートにアイスミントティーも捨てがたいわ」

艶やかな紅い唇からずらずらとアイスティーの名前が並べ立てられる。そこに別の人物が声をかけた。

「たえこは紅茶党だからそれでいいけど、俺はコーヒー党だからなあ。次はそこのミルでごりごり豆挽いてくれると嬉しいんですけど」

カタカタとキーボードを叩きながら久村（弟）が、次回のメニューを改善するよう姉に訴えたわけである。たえこは唇を尖らした。

「あらそう。叔父様はどう思います、叔父様はやっぱり紅茶の方が

よろしいですよね？　それとも玉露の方がお好きかしら？」

京人形のような美少女、というより美女は優雅に振り返り、執務机に噛り付いた人物に話をふった。

四十過ぎといった呈の英国調バーバリースーツを違和感なく着こなした男性は、額に手を当て何かを堪えるように目を閉じた。やがて目を開くと、ゆっくり噛んで含めるように言った。

「君達は、ここがどこだか分かっとるのかね？」

あら、とたえこが口許に手をあてる。綺麗に整えられた形の良い爪だ。

「そんなの一目瞭然じゃありません？　理事長室ですわよ、ここ」

「だよなー」

理事長、久村貴臣は必死に怒りを自制しながらもう一度尋ねた。

「どうしてその理事長室に君ら生徒がおって、その上和やかにお茶会なんぞ開いとるのだね」

「だって」

「俺達叔父さんの甥と姪じゃないですか」

「だからですわ」

にこにこにこ。実に息の合ったテンポである。性別が違うだけで容貌も性格も好みも非常に似通った二人は、絶妙なコンビネーションで自分達の我や要求を押し通す術に大変長けていた。しかしこの時点で理事長はまだ冷静だった。

「いくら君達が私の血縁関係に当たると言っても、理事長室で好き

勝手振舞っていいというわけではないんだよ」
「ええ、どうしてですか。せっかく伝手があるのなら使わなきゃ損ですよ」
「そうそう、私達単に自分達の特権を行使しているだけですわ」
何を言っても無駄だとは思ったが、言わずにおれなかった。彼の立場上。
「……だから、他の生徒に示しがつかんだろう。身内に甘くていいという法はないんだよ」
「やだなー叔父さん、俺達にもそうした配慮はありますよ」
「だから私達、友人おろか、その他一切うちの生徒は絶対ここに連れて来ないじゃないですか」
「気を使ってるんですよーこれでも」
「ねー」
ねー、と言ってお互い顔を合わせる。久村理事長は自分の洗練された大人の男というイメージを守るか、それともここで一気に堪忍袋の緒をたたき切るか、究極の選択に面して激しく懊悩(おうのう)した。
「…そもそも、ここは理事長室なんだ」
「分かってますよ」
理事長はついに、固く守り続けてきたスタイルを投げ捨てることに決めた。だん！　と机に拳を激しく打ち付けるや椅子をも転ばす勢いで立ち上がると、
「それがどうして君達の私室みたいになっとるんだね、ええ！！？」
びしいっ、とある一点を指差したのだ。

久村理事長が示した先には、彼が激昂しても仕方のない惨状があった。
いつの間にか運び込まれていた彼のコーディネート外のキャビネットには、ミルにドリップ、コーヒーメーカー、サーバーにペーパーフィルター、カップ、ソーサーが整然と並べられていたのだ。無論彼の許可なく。
他にティーカップやポット、ストレーナー（茶漉し）やティーメジャースプーン、トレーに砂時計なども我が物顔で室内を占拠している。
もちろん道具だけではなく、彼らのお気に入りの茶葉や豆、粉のブランド製品も常時ストックされていた。
茶葉ならロイヤルコペンハーゲンにメルローズ、トワイニングにウエッジウッドなど、コーヒーもキャラバンからシンフォンシリーズ、英国ＤＲＵＲＹ社、モンカフェ、Ｎ・Ｉ・オリエントエクスプレス、マキシム、ネスカフェ等々、品揃えには余念がない。
中にはハーブティーや日本茶、その茶器などもある。
更にこれまた久村理事長には見覚えのない白く四角い箱が存在感を主張していた。
冷蔵庫、である。明らかに冷蔵庫であった。
彼の教育理念は、彼自身の血縁関係者の手によって粉々に打ち砕かれようとしていた。

「だーかーらー、叔父さんが理事長室だなんてとーっても素敵な場所を持っているから、ちょっとシェアさせて貰おうと思っただけなんですってば」
「暖房冷房完備、高級ソファにテーブル、おまけに気心の知れた叔父様、人は来ないし」
「もう使わない手はないよねー、大体身内に甘いのは人の世の常ですよ」
「本当、それに理事長室に出入りしているくらいばれたって、裏口

入学させて頂いた事に比べれば大した問題になりませんわ」
「だーっっ」
久村理事長は叫んだ。
「誰も裏口入学なんてさせとらーん！！　滅相もない事言うなっ人に聞かれて本気にされたらどうするんだ！」
「あら、そうでしたの。私てっきり高校入学の際ちょっとした配慮？　みたいなものをして頂いたのだとばかり」
理事長は不本意ながらもある事を認めて低い声を出した。
「下手な小細工せんでも君達は成績だけは優秀だ」
「ですって、笙（しょう）」
「いやー叔父さんに誉められると身内の欲目とは分かっててもいね」
「そうね」
久村理事長は最早沈黙した。疲労したからである。疲労困憊（ひろうこんぱい）であった。
「ところで笙、貴方さっきから何やってるわけ？」
たえこが久村（以下笙の事）の手元にあるノートパソコンを覗き込んで尋ねた。
「んー、うちの高校のデータベース閲覧」
理事長が顔色を変える。

「笙！」

「大丈夫大丈夫、外に情報漏らしたりしませんから」

「そういう問題じゃない！　生徒の個人情報はまさにプライベートそのものだ、関係者以外見ちゃいかん！！」

「あ、その点はご心配なく。俺関係者ですから」

さらりと受け流して、絶句する理事長を尻目に画面をスクロールダウンする。

「あ。あった」

「あら」

たえこが感心したように息を呑んだ。

「掘り出し物じゃない」

「でっしょー」

何故か嬉しげに久村が合槌を打った。

「でもおっかしいわねー。この子うちの生徒でしょ？　ええと五組？　副会長のいるクラス、私の隣の組じゃない」

久村は得たり、とばかりにやついた。

たえこはますます不可解そうな顔をする。

「私この手の顔の人は絶対チェックしてる筈なんだけどなあ。記憶にないのよね。彼女、転入生？」

「うんにゃ、入学当時からいる奴。それがおもしろいんだよねー、

イインチョーも若葉もたえこと似たような事言ってんだわ。性格と頭のかあるい若葉は仕方ないとして、イインチョの記憶力には重きを置いてんだよね、俺。それがかの優秀なる御仁の言によると現在七月にはいっても、顔と名前が頭に入ってないそうで」
「どういう事？」
「それが知りたくて今調べてんの」

ふうん、と漏らすとたえこは嫌な感じの笑みを浮かべた。

「楽しそうねえ」
「楽しいですよ」
「うふふふふふ」
「ふへへへへへへ」

理事長は和やかに談笑する姪と甥を見て、一人冷や汗をかいていた。

＊＊＊

久村がそろそろチャイムが鳴るから、と言って理事長室を出て行った後、たえこは用事があるとしてその場に残っていた。
久村理事長が気まずそうに口を開く。
「あのう、たえこ……様？」
いきなり様付けで及び腰であった。対するたえこの態度も先程は

からかいつつも敬語であったのが、高飛車な態度となる。

「それ止めなさいって言ってるでしょ！　あんた呼び方きちんと使い分けられるの？　出来ないでしょ。ぼろが出ると困るから普通にたえこと呼びなさいと以前から何度も命令したじゃないの」

分からない男ねえ、と言い方も散々だ。しかし理事長はそれでも臆するらしく、はあとしどろもどろに受け答えするだけだ。

たえこはそんな理事長の様子なんかもうどうでもよいらしく、苛々と形のよい爪を噛んでいた。その姿もまだ十七そこらの女子高生には絶対醸し出せないような色香を匂わせている不思議だ。

「全く、橋月眞己（はしづきまさみ）？　知らないわよ何者よこれ。笙が言わなきゃ卒業まで、卒業しても気付かなかった筈よ。よりによって私のテリトリー内でよ！」

「は、はあ」

「注意がいるわ、それも半端でなくいるわ。正体が分かんない内は、あの子に近付かせるわけにはいかないもの。あの大間抜けの馬鹿が自分の身を自分で守れない内は、ね」

身体を小さく縮込ませる久村理事長に、たえこは足継ぎ早に命令した。

「とにかく身元調査しなさい。相手も相当用心しているから難しいかもしれないけれど、もしかしたら何か出てくるかもしれないわ。分かったわね！　返事は？」

「は、はい！！」

ほとんど、「はひいいいい」という勢いで、情けなくも理事長は一回り以上も年下の少女に一喝されて、しゃきんと背筋を伸ばした

のだった。

＊＊＊

「さて、と」

理事長室の扉を閉めるや、久村の表情はどこか人を食ったようなそれに変わる。口許には笑みを浮かべたまま、しかし目の奥が笑っていない。

「姉ちゃんもねえ、何か俺に隠してるよなあ。叔父さんぐるみでさ」

廊下を歩き出す。

（何隠してるかまでは分かんないけど）

とりあえずは。

（自分のお楽しみ優先と言う事で）

にまにまと笑みながら、どうやってあいつとお近づきになろうかなあ、と画策する。

（そだそだ。いい口実が手元にあるじゃん。ラッキー）

緑の山を背景に窓に映る己の顔が、思う以上ににやけているのに

気付いて、少し意識的に引き締めた。
当分退屈しのぎになりそうな人材の発見に、久村の心は我知らず踊っていた。
たえこもその弟である久村も、基本自分の楽しみを優先する。
己にとっての基本は外さない二人なのである。

＊＊＊

チャイムが鳴っても授業は五分程延長していた。もはや時間的には放課後である。しかし教師がばたんとテキストを閉じた途端、絶妙のタイミングで委員長の白岡（副生徒会長でもある）が号令をかけた。

「起立」

がたがたと生徒が席を立つ。

「礼」

一斉に頭を下げるのに倣いながら、橋月は妙に感心していた。不思議と白岡の声はよく通る。大きな声を出しているわけでもないのに。

（格の違い、かな）

着席しながらそんな事を思った。まだ社会に出ていない学生の身分でも、すでにその才能の片鱗、頭角を現し始めている者はいる。おそらくこいつは大成するだろうな、と周囲の人間に思わせてしまうような力を持った者が。

（私はまず無理だよなあ）

くやしい、と思うほどの覇気もなかった。中にはそれが嫉妬から始まったものでも、追いつきた一心で自分を開花させる者もいるだろうに。自分はその範疇にすら入らない。

すでに中身が悪い意味で枯れているのかもしれない。老成しているのではなく、若者らしい色んな情熱に欠けている。惰性でたらたらと生きている、それだけだ。

時折十年後の自分、二十年後の自分、ずっと先の年老いた自分、などというものを想像してぞっとする事がある。何もないからっぽの自分が、からっぽなまま生き続けている。その姿は考えるだけで血を凍らせた。

誰にも関心を払われず過ごすだなんて、本当にできる事なのだろうか。

（どんなに孤独が好きな人間でも、全く人との会話が皆無だと、物凄いストレスを感じる、って何かの本に書いてたっけ）

そうだろうか。分からない。下手をすると一週間誰とも口を聞かない事もあるが、それを耐えられない苦痛と感じた事はない。しかも口を聞く、と言っても家族に必要事項を伝えるのだけが会話とも呼べないが、唯一彼女にとっての日常会話であった。

孤独を完全に克服することはできないが、慣れることは可能なようだ。

橋月は眉間に皺を寄せてぼんやり考え込んでいた。窓の外の景色

を映し出した瞳を雲が通過する。
と、突然目の前に影が落ちた。不審に思って見上げた先に、思いがけない顔を見つけて表情が強張る。傍目にはあまり変化したようには思われないだろうけれど、橋月は充分驚いていた。それが外に出ないだけで。

「よおっす」

わざわざ屈んで人の顔を覗き込みながら、某有名人久村笙がにこにこと挨拶を寄越してきたのだ。
内心びびりつつ、漸く彼の訪問の理由に思い当たる。

（ああ、本返しに来たんだ）

何か言おうとする前に、久村が口を開いた。

「どうもありがとね！　すんごい助かった」
「ああ、それはどうも」

一々言動がオーバーな奴だと内心鼻白んだが、それは億尾にも出さず、要件はこれで終わりとばかり、手を出して久村から本を受け取ろうとした、が果たせなかった。

「？」

久村は手に持った教科書を後に引いて、代わりに自分の顔をずいと近づけて来たのだ。

（な…何だよこいつ）

「いやねー、俺んとこの教育方針で受けた恩は倍返しせないかん事になっとるわけよ」
「はあ？」
「というわけで何か奢るからさ、今からご一緒しませんか？」
「……ご一緒って？」

警戒交じりにやや剣呑な睛で見上げた橋月に、久村は非常に愛想よく答えた。

「どっかで何か食べる」
「……いや、そこまでしてもらう謂れはないよ。ただテキスト貸しただけだし」

文面は丁寧だが、はっきり断りの姿勢を見せる。何より久村出現のせいで、先程からクラスメイトの視線を集めている事が気にかかっていた。
橋月一人ならば一切無視されるが、同伴者の存在自体までその影響が及ぶわけでもない。久村が宙を相手に一人で喋っているわけはないから、自然橋月も認識されてしまうのだ。

（とっととどこか行け！）

「えー、じゃあお返しじゃなくて、お友達になりました記念という事で奢るからさ」
「……」

（何なんだこいつは！！）

これほどはっきり言葉と態度の両方で辞退していると言うのに、ニュアンスが伝わらないのだろうか。頭が悪いなのだろうか。

それとも故意にやっているのか。だったらこちらも考えがある。
実の所、橋月は大変気が短かった。

「悪いけど、今日は用事があるんだ」
「じゃ、明日」
「明日も都合が悪い」
「んじゃその次の日」
「明日も明後日もその次も都合が悪い」

ほとんどキレかけていた橋月は売り言葉に買い言葉的気分で気付くとそう返していた。

（わ、私ってこんなに短気だったけ？）

これまで他人とのコミュニケーション不足から、橋月は自身が気の短い性格である事に気付く機会に全く恵まれないまま現在に至っていた。その為今更ながらそれを自覚するに及んだのだった。無論多大なる困惑を伴って。
ここまで橋月に断固として拒否されながら、しかし相手も然るものだった。

「それじゃあこうしよう。明日の昼時ね。放課後じゃないからオッケー」

（オッケーじゃない！）

抗議する前に久村がぽむ、とテキストを机の上に置いた。思わず気勢が削がれて口を噤む。その上久村は一瞬の油断に付け込んで、にっこり尋ねてきた。

「ひょっとして俺嫌われた？」

あまりに軽い口調で聞かれたので、橋月は一瞬言葉に詰まってしまった。

おまけにここで下手な返答をすると、今現在教室中の注目を浴びている以上まずい事になるに決まっていた。

（この、確信犯！）

「嫌いのどうこう言う以前に貴方の事知らないでしょう」

何とか無難な答えを搾り出すと、久村がにやと笑った。

（しまった、引っ掛け……！）

気付いた瞬間にはもう遅かった。

「だよなー、やっぱまずお互いの事知ろうとしなきゃ駄目だよな。じゃあ明日の了解は取り付けたという事でよろしく」

瞬間的に頭にまで血が上るが、橋月はそれを必死の自制心で堪えた。

鞄を手に取ると、

「私用事あるから」

久村には目もくれずに教室を出て行く。精一杯の仕返しだった。

無論、用事などあるはずもない。

放課後を一緒に潰す友達だっていない。

家族だって自分のことは無視する。

今日は塾もない。

（あの野郎、ふざけやがって！）

恩を仇で返すとはまさにこの事だ。

ぶっ殺してやる！　とまでは思わなかったが、それに近い物騒な考えが橋月の頭を猛速度で駆け巡っていた。

＊＊＊

すすす、と自分に近寄って来る気配に久村はしっかり気付いていた。

「く～む～ら～」

「な・あ・に若葉ちゃん！」

てめーと唸りながら若葉はおんぶお化けのごとく久村にお覆い被さって、その首を締めにかかった。

「手が早いんだよおめーはよー」

「若葉、お前こそ口わりーぞ、うぐっ苦しいー」

若葉に渾身の力で絞殺されかけながら久村は結構本気でうめく。

「おい、久村に若葉」
「白岡ァ」
若葉がぱっと手を放した。何だろう、この待遇の差は？
「ちょっと見たかよ、こいつすっごい手え早いんだから。あたしが先に目をつけたんだぞ」
「俺が最初に声かけたんだろーが」
「黙れ久村！」
若葉の拳がストレートで久村の腹に決まる。久村は今度こそ本気で悶絶した。
「若葉、お前手加減しろ……」
うっすら嫌な冷や汗をかいている久村を無視して、若葉が白岡に訴えた。
「やっぱさ変だよ絶対変！　あたし橋月さんの事おかしいな、と思ってから注意してようと目を皿みたいにして見張ってたのに、それでも時々見失っちゃうんだってば、ていうか頻繁に！」
白岡も存外素直に同意を示す。
「俺も、気になって注視してたんだよな。どんなに目を凝らしていても、目の前にいてもふっと意識から消える事があって、かなり驚いたというか」
若葉はぶんぶんと首を縦に振る。

「存在感いくら薄いつっても、異常だってばあれ」
「だよなあ、久村の一件がなかったら俺橋月さんの顔一回も意識に上らせなかったかもしれない。何ていうか、作為的な感じするよな。あそこまで存在感ゼロだと」

しかし、と白岡が久村を振り向く。

「お前よく橋月さんに気が付いたな。俺らでさえこんな有様なのにさ」

「つーか、あいつ何で目立たんのだ。ビジュアル的には」
「あたしの好みなの！　ストレート一発！！！」

若葉が吠えた。久村はなにこの女の子同士のわけのわからない特有の囲い込みって、と落ち込んだ。
時に女は女同士の友情を優先する。その成立を神聖なるものとする。そして、モブな男を大変ないがしろにする。だしにする。
ただしイケメンをのぞく。
俺だっていい男なのに、と思ったが口には出さず、若葉の言葉に続く形で付け足した。

「だ、そうだが。とにかくな、今まで気付かんかった自分のほうが不思議だぞ。たえこもチェック外だったとか言ってたし。姉ちゃんの超厳しい合格ライン絶対余裕でクリアなのにだぜ」

そしてたえこも若葉以上に女生徒の囲い込みをする。双子の姉ながら、その内ハーレム作りそうでとても怖い。

「たえこさんもか」

白岡が驚いたように呟いた。

「あの人のチェックリストにも入ってないとなると、まさに異常な存在感の薄さだな」

「変〜絶対変〜」

若葉が一生懸命主張している。

「んー、それにさ、性格も案外はっきりしているんだよな。何かもっとこう、人に流されるタイプかと思ったんだけど、自分の嫌な事ははっきり主張するしさ」

「あ、あたしも聞いたよ。久村こてんぱんにやられてやんの。玉砕じゃん、だっさー」

「若葉、お前には人の心を思いやるという、日本人の超絶得意な本能的それがなぜ俺相手に発揮されないのかね」

「久村を思いやってどうすんの？」

真顔で若葉が聞き返す。若葉にとって久村は男の区分に入っていなかった。へたすると、人の範疇にも。

「……もういいです」

白岡が横で首を捻った。

「久村に平気で噛み付けるって事は、内気でもないよな。まあ内気なのと社交性とは直結しないかもしれんが。というか久村タイプの奴と個性で渡り合うには相当踏ん張りがいるし、その点においても勝手に注目浴びててもいいと思うんだがなあ」

久村が挙手する。はいどうぞ、と白岡が発言を許した。

「今のどういう意味ですか」
「気にするな、額面通りの意味だ」
「……五組には俺の天敵ばかり生息している気がする」
「気のせい気のせい」
「ねえねえ久村」
「何若葉」
「これからもアタックするの？」
「当たり前だろう。だって俺あいつ気に入っちゃったもん」

この際、気に入った、というのはけっしてよい意味ではない。それは当人どころか、他の二人も察したらしい。
うわ、と若葉が顔をしかめた。白岡にこっそりと囁く。

「橋月さんも災難だね」
「うむ。久村はスッポンよりしつこい」
「スッポンてナニ？」
「……」

若葉千尋、校内成績四百人中三百七十三番は、学年トップクラスの秀才をたった一言で黙らせたのだった。
何よりも、彼女より成績が下のものが二十七人も存在するという脅威の教育事情をもって。

やっぱり何かいたの

鎮扇公園のチョコレート・ロード。てくてくと歩く人影は、セーラー服姿の橋月眞己だ。

苛立ちが高じて、思わず、しゅっと乱暴に赤のリボンを引き抜く。

（っとに何なんだ、あの男は！）

あれ以来―久村は間断なく橋月にまとわりつくようになった。おかげで事態は坂を転げ落ちるように悪化していた。

久村ははっきり言って目立つ。目立ちすぎるほどに目立つ男だった。

久村が自分の方に寄って来ると、自然人々の視線も集めてしまう。これまでの苦労が水の泡、橋月はクラスメイトに印象を与えてしまっていた。ただでさえ自分は人付き合いが苦手だというのに、久村経由で他人と接触する機会が大幅に増加し、それに伴って橋月の負荷は日に日に大きくなっていった。

その上久村はああ言えばこう言うの典型で、橋月がどんなに迷惑だと意思表示しても、何だかんだと屁理屈を捏ねて人を煙にまいてしまうのだ。あのふざけた態度も全然改める気配はなく、今や橋月のストレスは限界まで達していた。

（私、本気で久村の事ぶすっと刺しちゃうかも）

その瞬間を想像して、どんなにすっきり胸のすく事だろうと、思わずうっとりしてしまった。

洒落にならない事を真剣に検討しだすほどに、橋月は精神的に追

い詰められていた。
実際彼女はこれまで感じた事のない種類の重圧によってかなりキテいた。キテいたが故に、普段からは考えられない突飛な行動に出た。

「だあああぁぁあああ！！」

雄叫びと共に、いきなり学生鞄を振り上げると何もない空中に向かって横薙ぎに払ったのである。
人間崖っぷちまで精神が行ってしまうと、何をするか分からないものらしい。本人すら分からないのだから、第三者にはますますもって予想しがたい。
この時鬱屈していたものを外に向かって解放した橋月の爽快感と引き換えに、多大な被害を被ったのは公園に潜んでいたある生物だった。

ごきいぃっ

鈍い音とその手応えに橋月は思考を停止させた。
空中で鞄が何か物体と接触したのだ。

「え？」

鞄が勢いのまま宙に綺麗な孤を描いて振り下ろされると、彼女は奇妙な手応えを感じた事に混乱を覚えた。きょろきょろと辺りを見回す。

（な……んもないよな。ないよね）

大体空中には何もなかった筈だ。それなのに何故？　妙な焦燥感

が湧いてくる。

（とりあえず、何かにぶつかったらしいし）

訳が分からぬながらも、加害者としての罪悪感から使命感にかられてぶつかった物がどこに落ちたのか、大体飛ばされたであろう方向に見当をつけて捜し始めた。

（ええと、こっちの茂みの方かな？）

程なくそれは路上から少し外れた所に見つかった。見つかったが、余計に橋月は混乱した。

「……人形？」

だよな、と心の中で付け加えた。

「どっから降って来たんだろ？」

（ていうか湧いて来たんだ？）

物凄く不審に思いながら、木の根元の濡れた黒土と草に埋もれた人形を凝視する。

（……妖精？）

の、人形に見えた。背中に蜻蛉（かげろう）のような薄くきらきらと闇に浮ぶ脆美（ぜいび）な二枚の翅（はね）が生えている。

手を伸ばしかけ、思わず触れる寸前に指を引っ込める。その繊細な造りに、何となく無造作につかむのは憚（はばか）られたのだ。

ごくりと唾を呑んで、細心の注意を払い、翅を傷つけぬよう人形の胴をそっとつかんだ。瞬間、彼女はあり得ぬ感触に絶句した。

「げっ」

咄嗟に触れた指を引っ込めた。

乱暴に放り出さなかったのは自分でも偉かったと思う。

（な、生温かい）

気持ち悪い事に、その人形はまるで体温を備えているかのように生温かったのだ。おまけにふにゃりとした感じは人肌そのものだ。

（きっ気色悪ぅ……でも、手にとってみないと）

気持ち悪さを堪えて、橋月は再び人形をつかんだ。

（柔らかいし、最近の人形はリアルだなあ）

乾いた笑いを漏らす。漏らすしかなかった。

嫌な考えを忘れるように頭を振って、改めて人形をまじまじと観察してみた。

「へえ」

先程感じた気持ち悪さを忘れて、感嘆の吐息が零れる。

実に精密な作りだった。全体的にほっそりとした身長十二、三センチメートルくらいの少年の妖精で、弥生時代か飛鳥・奈良時代の衣装に少々アレンジを加えた感じの民族衣装を着込んでいた。

艶やかな黒髪に、ふっくらとした頬にはやや赤みが差している。

唇は少し開いていて、その小さな口腔にはしっかりと小粒の真珠のような歯が一列に並ぶ。犬歯もあるから驚きだ。その奥にピンク色の舌もある。
指の先に桜貝に似た爪があるのを見つけて更に驚かされた。
長い睫毛に縁取られた目が、今にもぱっちりと開いて、その唇が動き出さないのが不思議なほど実に生き生きとした、信じられないくらい精巧な人形だったのだ。
しかし橋月の第一声はほとほと情けないものだった。

「すっごい高そう」

人形に関心のない橋月ですらこれほど感嘆したくらいだ。
マニアならいくら金を出しても手に入れたい、コレクションに加えたいと思うのではないのだろうか。
その時。

「ん……」

橋月はぎくりと身を竦ませた。

(な、何か今声がしたんですけど)

しかも人形が少し動いたような。

「んん」

今度こそはっきりと気付いた。橋月の握り締めた人形が身じろぎしたのである。再び彼の頭は真っ白になった。
これが生きているだなんて、橋月はそんな恐ろしい事を考えたくなかったのだ。

しかし人形は橋月の望みも空しく、突然パッチリと目を見開き、口を驚きの形に開けた。

「あ」

「あ」

二人はお互いにじっと見つめ合った。互いにとって、生涯で最も嫌な瞬間ベスト１０に入る出来事だっただろう。

人形は何とか友好関係を築こうとしたのか、おそるおそる挨拶した。

「や、やあ」

大変引きつった笑い。そして。

橋月はものも言わずに人形じゃなかった得体の知れぬ物体を、ぶんと勢いよく宙に放り投げていた。

「ぎゃあ！」

人形は凄まじい悲鳴を残して茂みに突っ込んでいった。橋月は肩を怒らせて荒い息を吐いた。

（私は、何も、見なかった！）

恐ろしい形相で己にそう言い聞かせると、大股でずかずかとチョコレート・ロードを歩き出す。駆け足に近い早歩きだった。

（何も見てない。見てないったら見てない！）

ところが。

「ちょっと待てぇえええ！！」

妖精の人形が後方から追いすがってきたのである。半分ホラーであった。

（ひいいいぃいいいい！）

額から脂汗が流れ出す。

（あれは幻聴だ！）

橋月は恐怖と恐慌の二種の感情に支配されて更に早歩きになったが、妖精は猛スピードで飛行して来ると、ついに彼女の前に回ってぴたりと停止した。この自分よりずっと小さな生き物に、橋月は現時点で完全に気圧されていた。身動き一つできずに顔面を強張らせる。

（誰かっ）

何が起るのか予想もつかず橋月は声にならない悲鳴を上げた。

妖精はこの体格差にも関わらず、橋月が混乱を来たして、自分の方に主導権がある事に小賢しくも気付いたのか、警戒を解き余裕の表情で腰に手を当てた。しかし怒りの方は忘れていないらしく、抗議口調で罵声を飛ばした。

「こらあっ　どういうつもりじゃワレェッ！　人の事殴って脳震盪（のうしんとう）起こさせて、一言も詫びなしかい！」

橋月は表情を凍りつかせて空中に不自然に停止する妖精を食い入るように見つめた。

（よ、妖精がヤクザ口調…！？）

かつてなかったほど必死で頭をフル回転させた。結果導き出した答えは。

（これは夢だ）

あっさり現実逃避に走った。

夢に違いない。だとしたら、

（どこから夢なんだ。塾出た所からか？　それとも放課後か？　いや、学校に来る前？　それとも昨日の夜から？　いつからなの！？）

妖精は橋月が考えている事に察しがついたのか、やれやれとばかりに腕を組み、人間臭い溜息を吐いた。

「おいこら人間。これは夢じゃねーぞ。現実だ。逃避しても無駄だ」

「……」

橋月は恐慌状態から脱して、というよりもむしろ混乱の頂点を来たして、ゆっくりと顔を上げた。

「……あんた何？」

こんなわけのわからないものに、質問するなんて、私はとうとう頭がおかしくなったのかもしれない。そう思っての決死の言葉であった。

だが、妖精は信じられないといった具合に、口をあんぐりと開ける。実に表情豊かな妖精であった。

「あほかーっ　一目瞭然だろ！　おりゃ妖精だよ妖精！　日本定住型フェアリアだっつーの。このサイズに翅が生えてたら丸分かりだろーがよ！　てめーその頭の中身は空っぽか！　え、脳味噌ちゃんと入ってんのか」

現実として認めたくはないが、橋月は相手の暴言に一部理性を取り戻した。つまりここまで罵られて、キレやすい彼女はものの見事に堪忍袋の緒をすっぱり潔くぶち切ったのである。

「おいこら」

そう言うや否や、橋月はかなり素早い動きで空中に浮ぶ妖精を右手で捕らえた。妖精もまさか橋月がそのような思い切った行動に出るとは思わなかったのか、反応が遅れ捕獲されてしまい、呆然と己を捕らえた人間を見上げた。しかし一瞬の後に妖精は正気を取り戻し、顔を真っ赤にしてぎゃあぎゃあ叫んだ。

「何すんじゃワレ！　放さんかい！」

「誰に口きいてるの」

自分でも驚くほど底冷えした声が滑り出る。

「うっ」

妖精は本能的に身の危険を感じたらしく、口を噤んだ。

「言っとくけど」

橋月は自分でも気付かぬ内に冷静さを取り戻し、というか完全にイってしまった為理性のヒューズがはじけ飛んで、実に凶悪な笑みを浮かべていた。

「お前の命は今私の手中にあるから、そこんとこ……念頭に入れとけよ」

「なっ」

妖精が驚愕に息を呑む。

「なんじゃそれーっ　お前それでも人間か、鬼、悪魔！　フェアリアは世界でも貴重な種なんだぞ！　虐待反対！」

妖精もどきがぎゃあぎゃあ何かわめいているが、橋月は頓着しなかった。すでにこれは夢だと思い込んでいた、思わずにいられなかったのだ。

「るっさい！」

一喝する。

「お前の命運は私が握ってるんだよ！　自覚しろこの詐欺妖精！　お前みたいな口の悪い三流ヤクザみたいな粗悪品、誰が保護すんの！　愛好家でも妖精のイメージぶち壊しのお前を見たら、ものも言わずに撲殺、瞬殺だ！」

「ひどっお前おとなしそうな顔と言動が激しく一致してねーぞ！　虫も殺さぬ顔して由緒正しきフェアリアを撲殺たあどういう言い草だよ。大体詐欺妖精だの、お前呼ばわりだのして、俺の人権を蹂躙（じゅうりん）するんじゃねえ！」

正確には人権ではない。妖精権？

「お前立場分かってない？　私はこのままお前を握りつぶしてもいいし、翅毟っちゃってもいいんだけど？」

妖精は瞬時にしてころりと態度を変えしおらしく謝罪した。

「……ごめんなさい」

「よろしい」

橋月は満足げに頷き、はたと我にかえった。

「…」

「…」

一瞬の間。

それから何となく互いに黙り込んでしまう。

橋月は沈黙の中少し考え込んでふっと嘆息した。

その一瞬の間、手の中の妖精が身を強張らせたのがダイレクトに伝わってきた。

（何か……）

後味の悪さが込み上げて来る。ちょっと頭のネジが一本飛んでしまっていたとはいえ、この言動、正直ないわ。と彼女は顔面を覆いたくなった。

橋月は何の前触れもなく突然手を放した。妖精は一瞬何が起きた

か分からなかったのだろう、捕らえられたままの姿勢で固まっていたが、すぐさまその逡巡を放り捨てたようだ。
この好機を逃さず一目散に橋月の側から離れ、手の届かぬ空中へと逃れたのだ。

（おーおー物凄い勢い。って命かかってるもんなあ、当然か）

無言で見送って、道の上に落ちた鞄を拾うと再び歩き始めた。まるで何事もなかったかのようにだ。
一方妖精は空中に留まって、遠巻きに様子を伺っていたものの、落ち着かなげにじぐざぐと飛び回り、ついに決心したのかある程度距離をおいて橋月に近付いて来た。警戒を込めつつも、疑問符だらけの口調で、

「な、なんで急に開放したんだよ。俺を脅して願いを叶えさせるとか、捕まえて売るとか色々出来たんだぞ？」

橋月は路上にふと立ち止まって振り返った。

「ああ、そういう事も出来たんだ」

ぴしり、と妖精は顔を引きつらせ、速攻で空高くに逃げ込む。橋月はその素早さにぶっと噴出した。

「ばーか、冗談だって。あほらし。用がないなら私もう帰るから」

別に誰も待っていないけれど、とそれは胸中に呟く。

「ま、待って」

妖精は急降下してくるなり、警戒するのも忘れて橋月の目の前に停止した。さっきと同じ状態になってもおかしくない至近距離である。しかしそんな考えも妖精の頭には一切浮ばないようだった。

「ちゃんと答えろよ！」

橋月は変に一生懸命な様子がおかしくて、やはり笑いながら答えた。

「だって私まるで悪者じゃない」

妖精はぽかんと間抜け面を晒す。

「何か自分で言ってて、どう考えても傍目には私の方が悪者に映るなあ、と思って」

「……変なの」

「もういいでしょ、じゃあね」

「ま、待てってば！」

何、とこれで最後だぞという気持ちを込めて聞き返す。妖精にもそれは伝わったらしく、彼は身長に言葉を選ぶようにして言った。

「あ、あのな、俺の名前トモエ、巴だからな！覚えとけよ！」

橋月は妖精、巴の思いもよらぬ言葉にびっくりして、次にげらげらと笑い出した。

「覚えとくよ！　私は橋月眞己。覚えとけよ妖精！」

「巴だってば！眞己、明日も、明日も来いよ！」

「言われなくてもここ塾の帰り道だし。じゃあね！」

橋月は別れの言葉を告げると後は振り返らず帰路についた。

（変なの、話すのにあんまり苦痛じゃなかったや。やっぱり相手が人間じゃないからかなあ）

自分が妖精などという正体不明の生き物の存在をいつのまにか受け入れている事にも気付かず、彼女は妙にすっきりした気分で家に辿り着いた。

さいていかも?

センターテーブルの上に、たえこは角ニ型封筒から調書を取り出し扇状にばらけさせた。

「へえ、何コレ」
「うふふ、見れば分かるでしょ」
「おやあ、これは僕の親友橋月さんの個人調査書ではありませんか」
「ほほほ、私に手抜かりはないわ！　興信所に依頼して調査してもらったのよ！」
「わーい、さっすがたえこだね！」

ぱちぱちと久村（弟）は姉に向かって惜しみない拍手を送った。
その麗しいのか麗しくないのか判定に悩む光景を、苦々しく見守っている中年男性の姿があった。彼らの叔父、久村理事長である。
自分の姪と甥が、自校の生徒の個人的情報を好奇心で引き出す事に、全く罪悪感を覚ないまま行為に及んでいるというのは、教育者としてより彼の保護者としての立場から非常に頭痛を催すところであった。

「君達……」

彼は最早無駄とは知りながらも、声をかけずにおれなかった。

（ああ、胃潰瘍になりそう）

「何ですか叔父さん」
「あのな、つまり人のプライバシーを侵害してはいかんのだよ」

正論を言っているのに、何故か語気が弱々しい。たえこが心外だとばかりにその仁侠形の切れ長な目を見開いた。

「嫌ですわ、私達彼女、橋月さんともっと仲良くなりたい一心で互いの事をよく知る為にこういう行為に出ているだけですもの。それを責められるなんて」

「橋月はガードが固いですからね、外堀から埋めなくてはいかんのですよ。こう、じわじわっとね」

「目的の為には手段など選んでいられないのが当然じゃありません？　そこのところは臨機応変にやり遂げるのが、我々の尽くす最善というものですわ」

一言ものを言えば、十倍になって返ってくる。久村理事長はすでに投了していた。

「もう、いい」

「あらそうですか」

「いやあ、理解して頂けて良かったなあ」

「……」

沈黙する理事長を無視して、二人は調書に目を通し始める。たえこが一枚を手にした。

「笙、結構面白い事が分かったのよ。彼女、六歳の時に海で溺れて死にかけてるの」

久村もおや、というように乗ってくる。

「へえ、臨死体験して復活したわけ？」

「さあ、とりあえずマウス・トゥ・マウスに心肺蘇生法を試みても息を吹き返さなかったみたいよ。絶望的な所に救急車が来て病院に搬送されたのね。
この時どうやら家族全員で海水浴に出掛けていたみたい。近所の家族も同行しているわ。母親同士がおしゃべりに夢中になって、父親はビーチに寝そべってたのね。橋月さんは浜の近くで遊ぶ子供たちの群から離れて、一人遠くまで泳ぎに行ったらしいわ。結果的に沖の方に流されたようね。気付いた時には溺れてかなり時間が経ってたってわけ」

意外や意外、久村は存外真剣に聞き入る。

「で、病院で急に意識が戻ったのか？」

「そう、もう絶対助からないって状況だったのに、約三時間後に突然息を吹き返したの。ここからが面白い所なんだけど」

不謹慎に面白いなどと言ってたえこが声を潜める。ここでは誰に聞かれるという事もないのだが、雰囲気を愉しむ為での演出効果だ。

「一時的に記憶喪失になってるの」
「ほお」
「えっと一日で記憶は回復したんだそうだけど、その後から母親が私の子じゃないって言い出したのね」
「……どういう事？」
「原因は分からないの。我が子を溺死寸前にまで追い詰めてしまった自責が変に歪んだのかしら？それが当人に向かうっていうのも変な話だけれど」
「ふうん結局原因不明なんだ」
「そうね、ともかく当時は母親が錯乱状態に陥って、親子ともども

心療クリニックのお世話になってるわ。それからね、家族中がぎくしゃくし出したのは。
どうも一歳年下の弟の方は溺愛されているらしいんだけど、姉である橋月さんは家族の内でも浮いちゃってるみたい。
多分例の現象が絡んでいるんだと思うんだけど」
「ああ、存在感ないない病」
「うん、ていうかその兆候が現れたのが、この事故の直後なのよ。それまでは普通に生活してたみたいよ。当時の関係者の証言よ。これってどういう事かしらねえ」
「ホントどういう事だろうねえ。やっぱり本人に聞いてみるのが一番だよな！」
「でしょうね。でも貴方彼女には嫌われているようだけど。全敗なんでしょ？」
「そこを何とかするのが男の甲斐性です」
「頑張って頂戴。私は影から応援しているわ。後方支援は任せて」
「よろしくう」

二人はそこで一息つくと、次にお茶菓子へと手を伸ばした。前回の教訓を生かしてか、笙の為にブルーマウンテンが用意されていたので、嬉々としてカップを手に取る。
たえこはミルフィーユにさくりと銀色のフォークを入れながら、弟の顔を盗み見た。久村はコーヒーの香りを満喫している様子だ。
調書に目を戻す。橋月の溺れたという海岸の名前に柳眉を僅かに顰(ひそ)めた。
（紅入(いろいり)海岸）
その名を目にした時、たえこの胸中に広がったのは言い知れぬ不安だ。

（因縁かしら）

誰かが定めたシナリオに沿って事態が進んでいる気がする。糸を紡いでいるのは誰だ？

（何か悪い事が起きなければいいのだけれど）

久村が遊び心で橋月に関心を示しているのを、たえこが止める事はできない。それは久村たえこの行動ではない。久村の信じるたえことしての振る舞いを彼女は為さねばならないのだ。

（こういう時不便ねえ）

今のスタンスを守る為には仕方がないのだけれど。自分が選択した久村たえこの像をちらりと後悔しないでもなかった。

＊＊＊

橋月はここの所校内中を逃げ回っていた。久村が追ってくるからである。自分一人でいる時は、誰にも関心を払われないので問題ないのだが、久村が登場した途端に橋月の存在感ゼロ効果は全く意味をなくしてしまうのだ。

彼はまるで闇に浮ぶ電灯のように、わらわらわらわら人を引き寄せるので、橋月は多大なる迷惑と心労を被っていた。

第二理科講義室に逃げ込んだ橋月は、廊下に誰もいない事を確かめて、講義机の間に身を潜めると漸く緊張を解いた。

（久村のやろ〜）

どこに行ってもどこに行っても、犬並みの嗅覚を備えているのか、あの男はすぐ橋月を見つけ出してしまう。その神出鬼没ぶりには最早苛立ちの域を通り越して、惜しみない賞賛を贈りたくなってくる。

（ストーカーかよ、あいつは！）

自分を追いかけ回して何が楽しいのか全く分からない。

（逃げるぞ私は。とことん逃げてやる）

決意も新たに、めらめらと闘志を燃やす橋月に、頭上からのんびりとした声がかけられた。

「やっほー」

たっぷり十秒間無言で顔を合わせる。橋月はがたんと机にぶつかりながら立ち上がった。

「何でお前がここにいるんだ！」

もはや久村相手に口調を取り繕う気は微塵もない。

いつの間にか背後に控えて橋月を上から覗き込んでいた久村は、後ろから回ってつつと橋月の横に並ぶと朗らかに答えた。

「愛の力」

口より先に手が出た。

「死ね！」

呪詛の言葉と共に肘を打ち込む。

久村は盛大に痛がってみせるものの、顔が笑っているので余計に橋月の神経をばりばり掻き毟るだけであった。その上彼はいくら罵倒されようが、素気無くされようが、少しも挫けない。

「酷いなー、俺これでも真面目なのに」

「真面目？　お前がかつて真面目に、誠意を持って私に接した事が一度でもあったのか？」

「いつも誠意に溢れているよ俺は」

いけしゃあしゃあと述べる久村に、橋月は冷淡な口調で退場の合図を示した。

「誠意の意味を辞書で調べ直して来い」

久村はそれを受けてにこにことのたまう。

「いや嬉しいなあ」

「何が！」

「橋月も大分打ち解けてくれたと思ってねえ」

「どこを！　どう！　曲解したらそうなるんだ！！」

「だってフレンドだから」

（もう嫌だ）

巴という第三者に愚痴の捌け口になってもらえなければ、橋月は早々に犯罪に走っていたかもしれなかった。

かのフェアリアとは軋轢の生じる事もなく、現在かなり親しくなっていたのだ。
だがこの男だけはどうしても駄目だった。根本的に反りが合わないというか、前世では敵同士ではなかったのだろうかと思うほど受け付けない。久村の方は橋月とは全く異なった見解を持っているようだが。

「とにかく！　今後一切私に近付くな！」
「それは嫌だ」

久村は真顔で即答する。橋月は怒髪天を衝きそうになりながら、寸での所で堪えて、

「前から一遍聞こうとは思ってたんだけど、あんたって何で私なんかにつきまとうわけ？　他に友達たくさんいるでしょう」

これまで疑問に思って、しかし微かな怯えとプライドの為に訊けなかった言葉を思い切って口にした。
本当はこんな事訊きたくなかった。尋ねた途端、自分がいかに閉鎖的で社交性皆無なのか、再確認させられてしまうからだ。久村が陽性で、自分が陰性である事を誰がわざわざ自白したいものか。

（こんな劣等感、最悪）

言わせた久村を恨みたくなってくる。このくらいは許される筈だと思った。

久村は首を捻った。子供がお前はどうして菓子が好きなのかと、当人にとって自明の理である事をわざわざ尋ねられて、答えようが

なく困っているような、そんな感じの捻り方だった。

「何かこう、いきなり目の前に飛び込んできたんだよなあ」

「はあ？」

声が引っ繰り返る。久村が始めて自分に声をかけてきた時の事を言っているのだと察しはついたが、次の台詞で体温が一気に下がった。

「俺何で橋月に今まで気付かなかったんだろうって不思議で。こんなに友達になりたいって思える奴に、どうして一年半以上も気付かないままだったのか、凄く変に思ったんだ」

心臓がばくばくと波打ち始める。ずばり確信に迫られた心地がして、橋月は自分の問いを悔やんだ。一番触れられたくない話題を自ら持ち出してしまったのだ、間接的にでも。

「だから、理由を知るついでに友達にもなって一石二鳥作戦を展開しようと思ってさ」

そう締め括る久村に、橋月は素の口調で何とか厭味を言ってみせた。

「二兎を追うものは一兎も得ずって諺を知らないのかよ」

「あ、でも俺欲しい物は全部手に入れる主義だから」

さらっと何でもない事のように言ってのける彼の自信が、橋月には眩しくて、殆んど憧憬を覚えさせた。だがそれは橋月がこれまで抱いた事のなかった妬心にも火をつけたのだった。

（ずるい）

ずるい、と思った自分にぎょっとする。

（私、今何て）

ああ、自分はこれを恐れていたのだと漸く理解した。今まで諦めて、達観したつもりになっていたものを、それは全部つもりで本当はそうじゃなかったのだと突きつけられた気がした。

多分久村のような人種に対峙した時に、普段は押さえられている他人への嫉妬や羨望がそれと分かるほど大きく膨れ上がり、同時に彼らと親しくありたいという浅ましい気持ちが己の中に湧き起こって来るのを、ずっと予測して恐れてきたのだ。

一度自覚したら、止められないどころか膨張し続け、叶わぬ事にいっそう惨めになるに違いない事を知っていたから。そして自分が一生『特異体質』を引きずって生きていく事の恐怖にも、もう一秒だって耐えられなくなってしまうだろうと分かっていたから。

事実、そうなりつつある。外界と接触を断つ事でかろうじて保たれてきた自己完結の世界は、久村の登場によって小さな穴を生じ、ダムに開けられたそれの如く内部の水圧で勝手に崩壊しようとしていた。

元々そんなに強固なものでもなかったのだ。

（やっぱり駄目だ、私）

橋月は知らず泣き笑いに顔を歪めていた。世の中には自ら光り輝く恒星のような連中がいて、自分は図らずしもそうではない。おまけに自分はその他大勢にすらなれない。存在自体が誰にも感知されないその他大勢以下なのだ。

妬ましい、羨ましい、とても眩しい。かつてあった世界、今自分

がいることができたかもしれない世界。そして今の自分にはけして手の届かぬ世界。
いつもはフリだけでも、全て諦めたフリをしていられる。でも彼ら恒星のような人々と交わる時、己がそうありたかったと望む姿をまざまざと見せつけられる時、傷が痛むのだ。
本当は、傷はぱっくり裂けたままでどくどく血を流している事に、騙し騙しして来た痛みが一気にぶり返して否応もなく思い知らされてしまうのだ。
自分も一人は嫌だ、と。妬ましくて妬ましくて、その妬み嫉みの炎で身を焦がしそうだと。その天賦の気質の違いに。
ならば近付かないのが得策だと、本能で自分は知っていたのだろうか。久村を忌避し続けて来たのは、自己防衛の為せる技だったのだろうか。
橋月は光加減で己の顔が久村から見えぬよう微妙に俯いた。
「本当にもう、私に関わらないでくれ……関わらないで。迷惑だ」
他人行儀に言い直して、口を挟む事を許さぬ固い声でそう告げると、くるりと踵を返し講義室を急いで出て行った。

＊＊＊

久村は何故か声が出ず、呆然と橋月が去るのを見送った。暫く沈黙したまま、やがて、
「どうしよう」

本人も知らぬ間に掠れた呟きが零れ落ちる。
頭をくしゃくしゃと掻き回した。

「俺、色々考え無しだったかも」

唇を尖らせ、同時に色々なことを理解してしまった。
久村は単なる好奇心で橋月を追い詰めた事に、今始めて気付き、大いに衝撃を受けていた。
彼はこれまで万事自分に照らし合わせて物事を考えていた為、橋月のような己と対照的な人物の心中を真に思いやる事ができずにいた。彼の周囲がタフで久村と似たり寄ったりの連中で占められていた事もある。彼らには通じても、橋月には堪らぬ所まで手出しし過ぎていたのだろう。
自分が楽しいから、相手も楽しいだろうというのは相互の見解の相違に端を発するとはいえ、充分苛めの域だったと改めて思い知った。橋月は本当に嫌がっていたのだ。己のような人種ばかりではない事に、遅まきながら彼は気が付いたのである。
自分がかなり動揺していると知って、久村は更に驚きを味わっていた。
光の見せた幻影かもしれないが、多分橋月は泣いていたのだと思う。
自己嫌悪を初めて彼は感じていた。あーあ、と天井を仰ぐ。

「結構最低かも、俺って」

人のプライベートな事を勝手に調査し、罪悪感なく調書に目を通すあたり、結構どころかかなり最低であったのだが、その事にまで現在の久村は気が回らなかった。
しかし本来素直な性質の彼は、反省すると一つの決心を固めた。

（明日、真面目にきちんと謝罪するか）

そこからもう一度スタートしよう。

それは悪くない考えに思われた。

その夜、来須町一帯を予期せぬ流星群が襲った。だがそれは常人の目には映らない特殊な光の帯であり、数人の子供が空を見上げて興奮した声を上げても、大人は全く相手にしなかった。

ついでドーム状に町全体を見えない壁が覆い、外界と遮断した事も余人には計り知れぬ所であった。

蟲の饗宴

ゆらゆらと銀色が遥か上空で踊っていた。

水面だ。太陽光線は水面を貫き、海中にまで差す。しかし水面で反射されて、下からは一面銀色に見えるのだった。

少女は手を伸ばした。苦しかった。とても苦しかった。頭部がぱんぱんに膨れ上がって爆発しそうだった。酸素を求めてか細い四肢がびくびくと痙攣（けいれん）する。最初に滅茶苦茶にもがいたせいで浮上するどころかますます深くに沈んでしまっていた。

がぼっ

泡が大量に海中へと吐き出され、同時に口から鼻から海水が浸入してきた。

苦痛の余り、少女の形相は凄まじいのもになっていた。体中血がたぎり、究極の苦しみの後、彼女は漸く意識を手放した。

＊

――は、急いでいた。己を呼ぶ声を聞いたからだ。それは必死に呼びかけていた。またそれは―を呑み込む底なしの闇であった。

『誰か我を呼ぶのは』

――は急いていた。

『間に合わぬかもしれぬ』

焦燥感に―は辺りに全く注意を払わず、ひたすら急いだ。野を、山を、川を、町を越え、障害物は全て無視して。例え何にぶつかろうと、―は留意しなかった。

風は悲鳴を上げ、鳥はでたらめにのたうち回った。放電が起り、また天候に影響を与えた。

やがて海に至った。途中何かの悲鳴を聞いた気もしたが、――の意識にそれが上ったのはほんの一瞬の事だった。

浜辺に蠢(うごめ)く肉の群れをも通り過ぎて、太洋に出る。沖の方に呼び声の主を感じた。

『ああ』

――は悲痛な、そして歓喜の溜息を落とした。

『手遅れであったか』

なれば、と思う。

『私が貰い受けようぞ』

＊

場面が切り替わる。

はらはらと空中に乱舞する花びら。桜だ。一面に桜が咲き誇り、――の前で風に散って行く。滅び行くが故に心打つ、泣きたくなるほどの清冽な滅び行くものの美。

『お母様』

自分によく似た娘達が風花のような花びらに合わせて舞いながら、陶酔しさえずった。羽のように軽い少女達の素足が花の屍骸（むくろ）を踏みしだいて芳香を立ち上らせる。

『何と美しい事でしょう。この秋津島の四季は真に見事でございます』

別の娘がまた謳う。桜桃色の唇を綻ばせて。

『私は春が一番好き。山を覆い尽くす桜が好き』

『狂い咲きの桜もまた一興。花の魁（さきがけ）たる梅もまた優美でございます』

他の娘達も満開の枝垂桜の下で語らい、蝶の如く踊っている。――は娘達に囲まれて、この幽玄の情景の中に己がある事を無上の喜びとした。

その中に景色とそぐわぬ、――の血統でもない者の姿が混じる。だぶだぶの民族衣装に身を包んだ小柄な人物である。右手に自分の身長より長い杖を携えていた。彼は―達を全ての天敵から守る者、

その一族を束ねる長だった。

『気に入ったか』

ぞんざいな口調だが、――は腹を立てるどころかころころと銀鈴のような笑い声を上げた。

『気に入りましたとも。どれほどお礼を申し上げたら良いのやら。娘達も大変気に入った様子。

できるならば、一周期ごとにこの八州国（やしまぐに）を訪ねて下さりませ』

守護者の長は頷いた。

『承知した。我らは相利共生関係にある。お前達が喜ぶならば、そのように取り図ろう』

『重ねて御礼申し上げます。ああ、それにしても何と美しい。言葉がございません』

――は魅入られたように視界を覆う枝垂桜を見上げた。

満ち足りて、この上ない幸福とともに。

気付くと、頬を涙が濡らしていた。

（何か、とても幸福な夢を見た気がするのだけれど）

忘れてしまった。素晴らしい夢だったのに。

夢の余韻が惜しくて、暫く布団の中でぼんやりとしていたが、橋月は枕元の時計に目をやり仰天した。

九時ジャスト。

完全な朝寝坊だった。跳ね起きて、殆んど蹴飛ばすようにして布団を押しやり、クローゼットから制服を取り出すや慌てて着替えた。焦る余り、ボタンを掛け違えるなどという、幼稚園児と同レベルの初歩的ミスを犯して、大幅に時間をロスしてしまった。

（何やってんだろ私！）

着替え終わって一息つくと、彼女は異変に気がついた。

（あれ？）

ブリリアント・グリーンのカーテンを透かして室内に落ちる光は、随分と頼りないものだった。

カーテンをシャッと音をたてて引く。淀んだ生温い風が頬を撫ぜた。

「酷い天気だな」

思わず愕然とした声が漏れる。

空には鈍重な雲が垂れ込めていた。薄墨を流したようなその色合いは、無条件に橋月の気を滅入らせた。

（まるで朝の三時みたいじゃんか）

たまに早起きすると、世界が永遠の薄闇に閉ざされたような、群青色に染め上げられているのを目にする。それによく似た空気だった。

おまけに視界が随分と悪いのは、多分霧が立ち込めているせいだ。

「週間天気予報では晴れだった気がするんだけどなあ」

ぶつぶつと呟いて、ふと新聞の月齢の欄を思い出した。

「確か今日は――満月」

思ったよりそれは意味深に響いた。そのことに逆にぎょっとする。

（どうでもいいよ、そんなこと）

慌てて取り繕うに自分に言い聞かせた。

そこで時間に思い当たり、頭を激しくふる。

（やばい、こんな事考えてる場合じゃない！）

鞄を手にとって部屋を出ると、急いで階段を駆け下りる。橋月の体重に踏み面がぎしぎしと悲鳴を上げた。

階下に足を降ろした時、ありえない静寂に首を傾げた。

しん、と水を打ったような静けさ。

父親や弟はもういない時間だとして、母親が動き回る気配もないのはどういう事だろう。

「どうし……」

たんだろう、とは続かす、彼女の唇はそこで凍りついた。

視線は、ダイニングにつながる廊下の先に佇む人影へと、釘付けになった。

廊下の奥に母が突っ立っていた。

「母さ……」

呼びかけはそこで止まる。本能的に異変を感じ取っていた。刺激してはいけない。橋月は母を凝視した。

（何だ、これ……）

置物と変わらぬ無造作で、全く生気を欠いた立ち姿。それなのに奇妙な圧迫感がある。

生唾を飲み込んだ。喉がカラカラで、声が出なかった。何か一言でも発したら、この均衡が崩れるという変な危機感もあった。

母がゆっくりと首を巡らした。毛穴という毛穴からどっと冷や汗が噴出す。

悪寒。自動人形の関節と歯車が軋みを上げてギギギ……と耳障りな音を漏らしたような、そんな錯覚を覚えた。

白い能面じみた顔がわだかまった闇に浮ぶ。

眼球が飛び出すまいかと危惧するほど目を見開いて、母の唇が『

あ』の形に開いた。続いて『う』『え』え』。

橋月はそれが母音だと気付いた。という事は？

『たすけて』

「助けて？」

彼女がその意を汲み取った瞬間、母の顔が大きく歪んだ。動くはずのない場所の顔の筋肉が引きつった。それは見る者にちぐはぐな印象を与える。

最後に母の表情に浮んだ人間らしい感情は、いわゆる恐怖に属するものだった。

（母さ……）

後に起った出来事は筆舌尽くしがたい。始め、母の顔の中心に小型のブラックホールでも生じたのかと思った。顔面が一点に吸い込まれたかと思うと爆発的に膨れ上がったのである。そしてその頭部はぐにぐにとうねり蠢きだした。大きな見えない手が母の頭部を粘土に見立てて捏ね繰り回しているかのように。

橋月は自分が悲鳴を上げたのか、上げなかったのかも分からなかった。

その身体は細い手首や裸足の踝がのぞくパジャマ姿のままで、直立不動の姿勢を保っている。ただ首から上だけが。アンバランスで、シュールで、どこか出来の悪いC級ホラー映画でも見ているような気がした。

夢の続きなのだろうか。しかし本能では分かっていた。

（これは、現実だ）

紛れもなく現実の臭いがした。巴と出会って、知らず知らずの内に受け入れ態勢が整っていたのかもしれない。

膨張・収縮を繰り返して頭部は新たな形を為していく。元の形とはかけ離れた奇形に。異形のものへと。

――虫だ。

むしろ『蟲』と表記したいグロテスクさだった。

嘔吐感が込み上げる。足から根が生えたようにその場から一歩も動けなかった。

ガンガンと頭の奥で警鐘がしている。

（逃げろ逃げろ逃げろにげろにげろおにいげええろおおおおおお）

思考は、いや理性は飴細工の如く間延びした。

変態は完了したのか、母は娘に向かって一歩踏み出した。多分さっき橋月は悲鳴を上げたのだ。それも盛大なものを。

「うにゅるるるうぅ」

鋭く長い舌に似た器官を口と思しき個所から出入りさせる。ひゅっと橋月は喉から空気の漏れる音を出した。

記憶のフラッシュバック。

『あんた誰よ、誰なのよおおぉぉおお』

ぎりぎりと首に絡みつき、締め上げる細い指。血管が浮き上がる、垂液が唇の端から零れて顎を伝う。

『返してよ、私の眞己を返してよおぉぉ』

『お……さ……』

お母さん。

『返しなさいよ！お前が眞己を殺したんだな。お前が殺したんだ。殺してやる殺してやる』

死にたくない。死にたくない。

何より母が自分の首を絞めて『殺してやる』と、口から泡を吹いたまま血走った目で唱え続けるのが衝撃だった。

（お母さん）

涙が溢れて止まらなかった。

（お母さん、私を殺さないで）

わたしを、殺さないで。

薄れ行く意識の中、『止めろ、朝子！！』と魂切る叫び声を聞いた気がした。

後に虫の知らせを感じて、会社を早退し急ぎ帰宅した父が、この場面に遭遇して死物狂いで母を制したのだと知った。

それ以来、橋月は家族の中で存在しない人間になった。四大虐待の内、育児放棄というネグレクト。すでに人から気付かれにくくなっていたが、この後急激にその体質に拍車がかかったのは何かの因果関係なのかもしれなかった。

お母さん、私を殺さないで。

橋月は目前まで迫った母に、血を吐くような絶叫を返した。

「あああああぁぁぁぁぁあああああ！！」

どん、と華奢な身体を突き飛ばして、無様に転びながら家を飛び出す。母は追って来なかった。相手の動きが鈍い事に気付いたのは後からだ。

（嘘だ嘘だあああ！！）

閑静な住宅街を恐怖と混乱に任せて全力疾走しながら、橋月は叫んでいた。今はただ自宅から遠ざかりたかった。ひいてはあの母から。

しかしやがて体力が尽きて、息切れした状態でブロック塀に寄りかかり、ずずっと背を擦って路上に尻餅をついた。

「ど……なって……！」

ぐしゃぐしゃと頭を掻き毟る。いつの間にか唇の端を噛み切っていて、今更ずきずきと痛み出した。右手の甲で乱暴に拭って、血がこびりついているの見た時、ヒステリックな哄笑が爆発した。

「あはははは、何これ！　何なんだよこれ！　これが現実なの！！」

ばかげてる！！

声は異様に響いた。その事実にはっとする。

（何で物音がしないんだ！？）

同じ。家と同じだった。静か過ぎる。

一体どうなって？　彼はそこまで考えてカッと目を開いた。

（もしこの辺一体で家と同じ事が起きているとしたら？）

その為の静寂だとしたら。

（じゃあ、どうして私みたいに逃げ出してくる奴がいないんだ？）

恐ろしい考えが浮んで来る。

（まさか私だけが正気なのか？）

誰かまともな奴、と必死で周囲を見渡したが、立ち並ぶ家々に入り込む勇気はなかった。そこであっと思い当たった。

「巴！！」

あのフェアリアなら何か事情に通じているかもしれない。

橋月は鎮扇公園に向かって走り出した。

妖精の助言

「巴！　ともえええ！！」

口に手を当てて、大声でフェアリアの名を呼ばわる。

（頼むから、出て来てくれ！！）

夜以外に巴と会ったことはなかった。しかし今彼に会わないと何も手掛かりがないのだ。

「ともえええ」

一際大きな声で叫ぶと、茂みから弾丸の如く小さな物体が飛び出し、橋月の顔面に張りり付いた。

「とも」

橋月の言葉を遮って、巴が絶叫した。

「まさみいいいいぃぃぃいいいいい」

橋月は巴が半泣きで叫ぶのを呆然と耳にする。

「どうなってんだよおおお」

巴の嘆きに、それはこっちが訊きたいことだと漸く橋月は叫び返した。

「し、知らないよおお。だって昨日何か変で、長老が里を出ちゃ駄目って言って、俺怖くて、でも眞己が来て叫んで、怖かったけど出てきて」

支離滅裂ながらも、巴が橋月の為に危険を犯して安全地帯からこちら側に出てきてくれたのだということは理解できた。理解できた為に、橋月は自分の恐慌が沈静化して行くのを感じた。

「巴、ごめん。それでありがと」

橋月は零れ落ちそうになる涙を堪えて、そっと繊細な身体の友人を手に包み込んだ。

「ば、ばかやろー、謝るない！　俺達友達だぞ！」

巴もいつもの調子を取り戻して、照れ隠しに乱暴な口調で怒鳴る。橋月はしっかりしろ私！　と己に言い聞かせた。

「頼む、巴。何でもいいから知ってること教えてくれ。私よりお前の方が情報持ってるはずだから。昨晩の変なことって何があったんだ？」

元々人慣れない彼女の素は、言葉遣いが非常に乱暴である。こんな混乱しているときに、口調に拘ってもいられない。

それが顕著に出た。

しかし、巴も現状が現状のためか、見る間に眼光を鋭くし、緊張感に溢れた。

「よ、よくは分かんねーけど、昨夜流星群がやって来たんだ。でも人間には見えない。位相が違うんだ。つまり、この世界のものじゃなくて、別の世界からやって来たんだ」
「別の世界！？」
「おう、えっと、俺らフェアリアはこの公園に少しずれた空間を作り出してそこで暮らしてるんだけど、基本はこの公園なんだ。
公園が本体で、俺の里は影だとするだろ。でも昨日の晩やって来た奴等は、この世界に付属する別空間に生息してる種族じゃなくて、丸ごともう全然別物なの！　別の世界の生き物なんだよ！　分かるか？」

はっきり言って巴の話は要を得なくて、橋月は自分の中で整理するのに暫し時間を要した。何とか昔読んだファンタジーの知識を総動員して、具体的例を思いつくまま並べ立てた。

「う……うん、何となく。その、例えばさ、妖精とかユニコーンとか、龍とかはこの世界に属するものだけど、あの蟲みたいな奴等は属性がこの世界の不思議な生き物じゃあないんだな？」
「そう、俺らも全部把握してるわけじゃねーけど、あんな変てこなこの世界にそぐわない気を発してる奴等、どれだけ時を遡っても、現在に至るまでだって絶対存在しない！　どっか別の世界からやって来たんだ」

橋月はぐらぐらと眩暈を覚える。この間から怪異現象とは仲良くなりっぱなしだ。今だって夢ではないかと思う。しかし夢だと思い込みたい気持ちをあえて振り払った。

「そいつら、私の母親の身体乗っ取るか寄生したかしたんだ。ひょっとしたらこの辺は全滅かもしれない。規模がどれだけなのか分か

んないけど」
「多分、町全体くらいだと思う。昨日町が何か膜みたいな物に遮断されたんだ。長老が言ってた」
「遮断？」
「外界から干渉できなくなる。俺らの里みたいに少しずれこむんだ。誰も気付かなくなる」
「電車は？　通勤通学する人は？　自動車は？　外からの助けは？」
矢継ぎ早に尋ねた。
「駄目だ。そういうのって時間の流れが断裂しちゃうんだ。つまり、どっちかの時間が止まったみたいになる。これを破る為の特殊な能力がないと干渉できないんだ」
「そんな……待てよじゃあ、その能力持ってる奴がどこかにいるのか？」
巴がそこでぽかんと意表を突かれた表情をし、ぱんと手を打ち合わせた。
「いるいるいるいる！　すっげー適任者がいる！」
興奮する彼に、橋月も喜びが湧き起こる。
「ホントか！」
「うん！　この地域一帯の妖怪諸々を納める長がいるんだ！　滅茶苦茶強いぞ！　自分のテリトリーだから、お願いしなくても何とかしてくれるはずだ！　あっ」
最後の『あっ』が橋月に不安を与える。

「何だよ、あって」

巴は蒼白になって頭を抱え込んだ。

「やっべー、やっぱ無理かも」

「な、なんで！？」

「長、留守かもしんない……てゆーかかなり留守だ」

希望の光が早くも掻き消されて、橋月の眼前は絶望に真っ黒に染まる。

「どういうことだよ！！」

「最近長が不在だって長老ぼやいてた。つーか俺長老のひ孫なんだ。だから極秘情報にもちっとばかし詳しいんだけど。ホントは長と会えるのって各種族の代表者だけで、定期的に開かれる集会で互いに連絡取るんだ。それがこの頃長の欠席が重なるって長老が言ってたんだよ」

「い、今は帰ってるかも」

「分からねえ。もし帰って来てるとしたら、こんな手抜かりはしねえはずだし」

「それこそ分かんないだろ。力が及ばなかったのかもしれないし」

巴が今度は怒ったように眉を吊り上げる。

「馬鹿！　長はそんじょそこらの雑魚とは違って、物凄く強いんだよ！でなきゃ自主独立志向の強い妖怪のボスやってられるわけねーだろ。

俺はあったことないけど、俺のひーじいさまよりずっと強いってことはすんげーすんげーってことだぞ！」

よくは分からないが、巴の勢いに首をぶんぶん縦にふった。

「分かった。それじゃその長がもしこの一帯にいるとしたら、どこに行けば会えるんだ？」

巴は焦った風に橋月を引き止めた。

「おいまさか長に直談判に行く気かよ。止めとけ、外は危ないんだ。ここにいりゃ安全だから！　おまけに言っても空ぶりかもしんねーんだぞ。そん時はどうすんだよ。帰れなくなっちゃってるかもしれないだろ！」

必死に自分を心配してくれる巴の姿に、橋月は酷く嬉しい、眩暈にも似た気持ちを覚えた。家族だって他人の彼ほど橋月の身を案じてくれるかどうかは怪しいものだ。

「ありがとう。でも私は行くよ。行かないと駄目なんだ。これは私の問題でもあるから。それにもう逃げっぱなしなのは嫌なんだ。ここで逃げたら一生逃げ続けなきゃなんない気がするし。頼む。長のいる場所を教えてくれ」

巴は口をへの字に結んでじっと沈黙した。

「……知んねえ」

「巴！」

「知んねえよ！　人間に教えちゃ駄目なんだ。掟なんだよ！」

掟、と言われて橋月は黙り込んだ。ならば巴はもうすでにこの時点で彼らの戒律を大分破っているのではないだろうか。自分のせいで。橋月は唇を真一文に引き結んだ。

「……分かった。どうもありがとう。自力で何とかしてみるよ。長って人がいることは分かったし。ちょっと心強いから」

礼を言って立ち去ろうとした橋月に『馬鹿！！』という特大の罵声が飛んだ。驚愕して硬直する橋月に、巴が怒り心頭とばかり怒鳴り散らした。

「何でそこであっさり引くんだよおめーは！　もっと俺を利用しょーとか知恵を働かせろよ！」

そう言われても困ってしまう。

「いいか、言うのは駄目だ。だけど案内するのが駄目だとは言ってねえ」

呆然と橋月は友人を見遣った。

「巴……」

「うるっさい！　行くぞ！！」

小さな友人は、やはり小さな肩で風を切って飛行した。

「ああ、ああ」

公園を出て行く二人を、先程から監視していた者があった。里と公園の間に微小の接続空間を設けて成り行きを見守っていたのである。するりと公園のチョコレート・ロードの上に二つの小さな影が現れた。その背には巴と同じ翅が生えている。フェアリアだ。

「よろしいのですか。あのまま行かせて」

若い方が心配げに尋ねた。もう一人、長老は自慢の長い髭を扱きながら笑う。

「はて、最近とんと耳が遠くなってのお」

若手はそのとぼけた返事に、冷ややかな目つきになる。

「ご覧になったでしょう、その両目でしっかりと」

「うう、視力もがた落ちじゃ」

「……分かりました。私は何も見ておりません。聞いてもいません」

「そうじゃのう」

「……やはり聞こえていらっしゃるじゃありあませんか」

「……」

長老は恨めしそうに補佐役の青年を睨んだ。

途中、蟲達が道を右往左往する光景に出くわした。頭部だけ変態しているものもあれば、全身かまきり蟷螂を更に醜悪にしたような感じに変形してしまっている者もいた。彼らは一様に鈍重そうな歩き方で、目的があるのかないのかひたすら道をうろついていた。

もし巴が姿隠しの術を使ってくれなかったら、自分が果たして彼らにどう歓迎されたか考えたくない所だった。

巴の後を追いながら、もしやと思った通り命婦高校の正門前に着いてしまって橋月は困惑した。

御影石を切り出した校門の脇には、桜の木が現在緑の葉を生い茂らせている。一時期毛虫がわんさか大量繁殖した上に、ぼとぼとと下に落ちて来て問題になったという曰くつきの桜だ。橋月は傍らの巴を見遣った。

「ここ私の通う高校なんだけど」

「そうなのか？　長はここにいるはずだぞ。留守でなけりゃ」

「いやしかし……」

中庭の先の校舎を見上げる。一昨年改築したばかりで、白亜の校舎は染みのないまま堂々とそびえ立っていた。基本的にコの字型をしていて、北館と南館の一、二、三階に主要な教室が配置されている。

「長はここに昔社を持ってたんだ。で、学校が建ったんでそのまま居着いちゃってんの」

「へえ」

祟りとかなかったんだろうか、と思ったが、長とやらに心酔している巴に尋ねてもいらぬ諍いを起こすだけだと想像するに留めた。

「ああ、でもやっぱりここは長の力が満ちてる。あの変てこな奴等も入って来れないと思うぞ」

良かった、と少なからず脱力する。しかし逆を言えば長の力も校内にしか有効でないとも取れる。

（とにかく会ってみないと）

全てはそれからだ。

不安と期待と緊張、それらがない交ぜになった厳しい顔つきで、橋月は白亜の牙城のような校舎群を見上げた。

校内放送

橋月は警戒を怠りなくしながら、桜並木を通り抜けて校舎の中へと入って行く。

下駄箱の前で、二人の生徒が話をしていた。思わず下駄箱に隠れて、盗み聞きをする。

「どうなっちまったんだ？」

男子生徒が口を開いた。その相手は――あ、と橋月は声を上げそうになり、慌てて口を噤んだ。

――久村。

口を開いたもう一人は確か、久村とよくつるんでいる志田耕太郎といったか。

「眞己、あいつら知り合いか？」

橋月の肩口に留まったフェアリアの巴が尋ねる。

「いや、知り合いというか」

語尾を濁しながら、橋月は二人の会話に集中した。あいつらは、果たしてまともなのだろうか？　町を右往左往する蟲たちの仲間か？　それを見極めるために。

久村がふと視線をこちらに寄越して、口を開けた。

「あ！　橋月！」

指差され、橋月は危うく下駄箱のシューズを投げつけかけた。隠れているつもりだったのに、どうしてあの能天気男はすぐに気がつくんだ！

「よお、お前も無事だったのか～！」

久村は手をぶんぶん振り、近づきながら笑顔で再会を喜ぶ。

「ああ、あんたも無事だったんだな……」

残念なことに、と橋月は引きつった笑いを浮かべた。もはや、「久村君」も「貴方」も彼を指さない。あんたやお前呼ばわりで充分なほどに久村への評価が底辺まで落ち込んでいる橋月である。

後追いして志田もこちらにやって来る。

「久村の友達？」

「そうそう、オトモダチの橋月眞己サン。何とあの若葉が唾つけてるから、手ェ出すなよ」

「出さねえよ。おめーと一緒にすんなって。あ、俺、久村と同じクラスの志田耕太郎な。緊急事態だけどよろしく」

「緊急事態？」

橋月が視線を鋭くして聞き返すと、二人は互いに視線を合わせた。

「橋月、事態分かってるよな？」

「私に分かってるのは、街の中に変な奴等が徘徊しているってこと、人気が全然ないこと、もしかして化物は人間が変化したものかもしれないってことだよ」

「いやいや、それでも十分把握している方だって」
「そういう久村はこれがどういうことなのか、理解しているっていうのか」

一度パニックを迎えた後で、大分落ち着いたものの、あまりの非現実的事態に、やはり感情が追いつかない。久村を責めても仕方ないのは頭で分かっていたが、彼の落ち着きぶりに腹立ちを覚えて睨みつける。

「ウーン、俺もよくわかんねえや」

久村は気負いなく分からない、と認めた。その上で、

「ええと、俺ンちは学校からすぐ近くっていうか、まあ学園の敷地内みたいなもんだからさ、それで学校にすぐ来られたんだけど、太郎ちゃんはそうも行かなくてよ」

太郎ちゃん、は志田のことであろう。当人が話を引き継ぐ。

「ああ、俺も、比較的学校近隣だからさ。それでまあ久村や他の連中にメール打って、皆学校に集まってるって聞いて、化物から隠れながら何とかここに来られたんだが……」

橋月は今更外にコンタクトを取らなかった自分のうかつさに気がついた。気が動転していたにしても間抜けていた。しかし、フェアリアの巴の言によれば、『来須町』は《外界》と隔離され、世界の中で陸の孤島になってしまったも同然の筈なのに、と矛盾に眉根を寄せる。彼らの携帯電話が実際使用可能だったとなると、それは一体どういうことなのだろう。

「連絡手段は生きてるのか？」
「いんや、《外》にはつながらねえ。あ、《外》っていうのは、どうも『来須町』の外のことな」
久村が首を振る。一方橋月はそれを聞いて合点した。
「つまり、携帯の有効圏内は『来須町』限定ってことか」
「そゆこと」
「インターネットはつなげてみたか？」
「やっぱり《外》のサーバーにはつながらねえみたい。メール機能は、学園内のパソコン同士でつながるみたいだけどな」
飄々とした顔をして、久村は彼なりに色々試してみたらしい。橋月は少しだけ彼を見直した。
「他に、無事な人は見たか？　警察は？」
矢継ぎ早に尋ねて、久村に問うべきことじゃないな、と内心自嘲した。誰しも混乱しているのに。それでも橋月は新しい情報を欲していた。とにかく、誰かに何かを聞くしかない。
「１１０番は最初にやってみたんだけどなー。出ないんだよなあ」
「そうか、やっぱり……」
「多分さあ、『来須町』内でも、通信回線の向こうの人が無事とは限らないと思うんだよな」
さらりと久村は言ってのけたが、その意味は重大だった。
「この《異変》のせいで、無事な奴とそうでない奴に二分されたってことか」

「いんや、正確には三分だね。太郎ちゃん、《異変》に気がついたのはいつだ？」

いきなり久村は志田に話をふった。

「え、ああ、朝起きて、《異変》に気がついたのは結構すぐだったよ」

志田の言葉に、橋月ははっとした。

「もしかして、志田の家族も？」

「ということは、橋月の家もか？」

同じ境遇の人を見つけて、橋月の緊張の糸が僅かに緩んだ。

「いや、びっくりしたよ、俺以外家族全員、彫像みたいに動きが止まっちまってさ。押しても引いても動かないんだから、どうしようかと思って、結局置いてきちまったけど」

「え？」

「あれ、橋月んちは違うのか？」

「あ、いや」

自分の母親のおぞましい変態については、すぐさま口にする気になれなかった。ほとんど会話をもたなかった家族だけれど、とても信じられなくて。言葉にすると、あの恐ろしい現実が、本当に動かし難い事実になってしまうように思え、橋月は次の言葉が出て来なかった。

橋月の逡巡を察したのかどうか、久村が口を挟んだ。

「どうも色々話を総合するとな～、今『来須町』一帯に住む人は三

種類に分類されるようだぞ。第一に俺たちみたいにふっつーに動いている奴、第二に、太郎ちゃんの家族みたいに『時が止まってしまった奴』、それから第三番目に蟲みたいな化けモン」

んでもってえ、蟲サンは、俺たちのお仲間かもしれないんだよねえ、と。

「これからどうする気だ？」

橋月が尋ねた時、場違いな全校放送お知らせチャイムの音が鳴った。昇降口の方だ。

『えーえー、マイクテスト。マイクてすとおお。どう、俺いっぺんコレやってみたかったんだよね』

ぼむぼむとマイクを叩く音がした。ついで、背後からブーイングが聞こえて来た。

『あーもう、どーでもいいから、早く言って下さいヨ、先輩っ　皆混乱してるんスから！』

『そうですよ、恩田会長、俺が代行しましょうか？』

「あ、『いいんちょー』だ！」

久村が指摘する。委員長とは、久村の中でいつまで経っても格上げされない生徒会副会長白岡のことだろう。第一放送室に生徒会メンバーが集って、校内放送を流しているらしい。

『ウワ、二人とも後輩のクセに生意気。あー皆さん。生徒会長の恩田律でえす。選挙では
俺を選んでくれてありがとお！』

『もう任せていられねえよ、マイク貸せっ』
『ぎゃー、卯堂が切れたっ　誰か止めろ！』
『痛い、痛い、痛いーっ　やだーっ　誰かお尻触ったああっ』

悲鳴と罵声と物が倒れる音が入り混じって聞こえ、「何やってんだ生徒会メンバーは」と全校生誰しもが思ってしばらく、どうにか収拾がついたらしい。再びマイクから力の抜ける恩田会長の声が流れ出した。

『ええ～、生徒会の醜聞で校内をお騒がせさせまして、大変申し訳ありませんでしたあ。ところで皆さん、今ので『あーあ、何やってんだよ、こいつらは』と腹立たしく思いませんでしたかあ？　それとも呆れましたか？　脱力しましたね？　『俺・私の方がまだマシだよ』とかあ。そうですよね、俺たちより皆さんの方がきっと何ぼか落ち着いてますよね。馬鹿馬鹿しいですよね。皆さん、今更ですが、さっき『あ～あ』と脱力下気持ちを思い出して下さい。はい、『あ～あ』。力を抜いて、落ち着きましょう』

橋月は瞠目した。凄い。確かに今の馬鹿騒ぎで呆れるあまり、頭の中がフォーマットされて、余分な力が抜けた。故意にやったのだ。

恩田会長は声の質を変えた。

『皆さん、よく聞いて下さい。今校内にどれほどの人数が無事集まっているのか、正確な数は不明です。校内を隈なくとはいえずとも、それなりに探索した結果、先生方はいらっしゃらない様子です。また、連絡手段が、どういうわけか町内限定にされたことは、大多数の人が気がついていることと思います。

大人が不在で外界に連絡がつかない今、大事な点は一つ、現在無事に集まっている皆さんと、協力し合わなければならないということです。校外で不思議な生物をみかけた人もいるかもしれません。

しかし、現在校内ではその生物を見かけたという報告は今のところ来ていません。校内は安全だと、暫定的に言えるでしょう。ですから、どうか外に出ることは控えて下さい。そして、今いる人たちで一度一箇所に集合して、お互い無事を確認し合い、今後の対策を練りましょう。これから体育館に集合して下さい。三人寄れば文殊の知恵、赤信号、皆で渡れば恐くない！』

それは違う、とおそらく全校生徒がつっこみを入れた。しかし、マイクを通して流れて来る声は不思議と突き抜けた明るさがあった。

『大丈夫、何とかなります。何とかならなければ、皆で何とかしましょう。とりあえず、体育館に集合して下さい。体育館の場所が分からない人はいませんね？　全員集合できるように、一時間後に集会を始めようと思います。また十分後に同じく体育館集合と放送を流します。それではいったん放送を切ります』

静かな余韻を残して、放送は終わった。橋月は久村と志田の二人と視線を合わせた。頷いた。

「行こう」

全校臨時集会

「久村ァ！」

体育館に入るなり、人込みを掻き分け、大声で指差して来たのは若葉千尋である。

「あんたも無事だったんだーっ　あっくうんつよーい！」

悪運が強い、と言いたいらしい。躁状態できゃらきゃらと笑う若葉の顔色はどこか悪かった。

「わーかーばー、お前ちったあ落ち着けよ。てえ、あらあら、案外人多いさね」

久村の言う通りだった。体育館には現在軽く見積もって百人はいそうだ。

ざっと見回して、橋月は違和感を覚えた。

「ほっほう」

隣に立つ久村が顎に手を当てて何やら頷く。

「何だよ、久村」

「うん、何か二年生が多いやね」

「……あんたもそう思ったのか」
「ありゃりゃ、橋月も？」
「まだ全員集まってはいないだろうけれど……半数以上二年生じゃないのか？」
「いやー、七割は二年だね」

そういう橋月、久村、志田、若葉も二年生だ。周囲の生徒たちにはほとんど見覚えがあった。
――生き残りは二年ばかりに偏っている？　どういう、符号だろう。
駆け寄って来た若葉が、久村を押し退けて橋月の前にやって来る。
「きゃー、橋月さんだーっ　久村はどうでもいいけど、橋月さん無事でよかったねえ」

志田が俺、俺はどうなの？　と自分を指差しているが、若葉は無視した。一方橋月は両手をとられてぶんぶん振り回され、久村効果で若葉に捕まってしまったと顔面を引きつらせる。

「あ、ど、どうもありがとう」
「若葉、おめーなあ」
「うっせえ、久村は黙ってな」
「こいつマジで女かよ」
「あんだあ？」

若葉が斜め下から凄むと、久村はあっさり白旗を挙げた。

「俺、じーちゃんの遺言で女と子供には逆らっちゃいけねえんだよね」
「遺言多いな、久村」

淡々と橋月が呟く。
「おい、久村、てめーアタシを女と子供の後者扱いしてんじゃねえだろうなあ」
「いやいやいやいやいやいやいやいや」
「おめー『いや』を今何回言ったんだよ」
傍から見ていて、若葉の顔色は大分回復して来た。よかった、と橋月は思う。久村もたまには役に立つこともあるようだ。
「なー、今からおよそ三十分後には生徒会主催の『全校臨時集会』だろう？」
志田が若葉に尋ねる。
「うん、らしいねえ。あはーっ　何かお祭りみたいっ」
「お祭りどころじゃねえってば」
「でもでもでもさあ、真っ暗な時に雷が鳴っているみたいな感じじゃん」
「どういう感じだよ」
「ドキドキするじゃん、《お祭り》だよ！」
若葉の声は甲高い。奇しくも若葉千尋の言葉は的を射ていた。
これは、《祭り》だったのだ。後から、そう思うことになる。
「あらー、久村クンじゃあありませんことぉ？」
「滝田里瀬さん青ヶ淵サユリさん須々木香琉さん友枝百合架さん」
久村が全員のフルネームを区切ることなく棒読みした。にこにこ

笑いながらも、あまりに平淡に言うので一種異様であった。
久村の愛想の良過ぎる横顔を見て、橋月は何故か鳥肌を立てる。
こっそり志田が橋月に耳打ちした。

「『４Ｃ』だよ」
「よ、よんしい？」
「逆らうなよ、後がこえーから」
「な、何が？」

ちなみに、『４Ｃ』とは、ダイヤモンドの価値を決める４つの要素のことで、内訳はＣａｒａｔ（カラット）、Ｃｌａｒｉｔｙ（透明度）、Ｃｏｌｏｕｒ（カラー）、Ｃｕｔ（カット）になる。
滝田里瀬サンのおうちは宝飾店で、それにあやかってかどうなのか、通称『４Ｃ』仲間を結成している。
確かにダイヤモンドになぞらえられるだけあって、目鼻立ちの整った『ゴージャス』四人で、良く見れば何故かブランド品のバックを持っており、化粧もきっちり丹念に施して、グロスでてらてら光る唇はいっそ毒々しく、ビューラーで芸術的に仕上げた睫毛の曲線美とマスカラの魔術の前には、マッチを五本は載せられそうなけはいだった。
クラスに一人か二人は必ずいる、『女王さま』格ばかりが四人も並ぶと壮観なものがある。特に滝田里瀬は人形のような黒のロングヘアーと赤い唇の対比のインパクトに、橋月などは思わず引いてしまいそうだ。
「それにしても、生き残りは濃ゆいメンバーばっかりだなあ。俺は天の悪意を感じるね、アーメン」
十字を切った志田は、曹洞宗のご実家である。悪意はともかく、濃い面子ばかり残ってしまったという言葉には賛成したい。

「恐ろしいことになったわねえ」
カラット滝田里瀬が『４Ｃ』を代表して口火を切った。
「外の様子をご存知？　化物が徘徊してたでしょう」
「あー、まあ。ところで、滝田さんたち、結構家遠いでしょーに、よくご無事でしたねえ」
久村は一体滝田里瀬に何か含みでもあるのか、と橋月は不思議に思う。久村の人懐こさは異常なものがあるが、滝田相手にはそれも発揮されないらしい。
「私、陸上部のエースですから。化物はぶっ千切って登校しましたわ」
「ははは、左様で」
「ねえ、久村クン、《あの》お姉さんはどうしたのかしら？　お見かけしないけれど」
あ、と橋月は声を上げかけた。分かった。志田がそういうこと、と目配せしてくる。今の嘲笑を滲ませた口調は、肌を刺すようにその背後にある敵意を感じさせた。久村笙の双子の姉、久村たえこと『４Ｃ』は敵対関係にあるのかもしれない。久村は当然姉の味方だから、滝田たちとは折り合いが悪い。そういうことだろうか。
「たえこはねえ、理事長室に出張ってるみたい」
「あらそう。残念……お会い出来なくて」
でも、久村クンに会えたから良しとするわ。
滝田はそう締め括って、久村の腕を取った。

「ネ、三組にお友達多かったでしょう、皆あっちに集まっているから一緒に行かない？　ここはホラ、別のクラスの人が多いし」

一緒にいた橋月、志田、若葉の目の前で、この三人を無視して久村一人を連れ去ろうとする根性が凄いと思わず感心した。

「ちょっとお、あたしらの目の前で久村を三組にお持ち帰りしようとするなんざ、あんた」

若葉が文句を言いかけた瞬間、また間抜けなお知らせチャイムが鳴り響いた。行き場のない罵倒を飲み込んで、若葉が困ったように久村を見、頷かれて口を噤む。

「みなさ～ん、お集まり頂いてありがとうございまあす」

いつの間にか、壇上に恩田会長が立っていた。

「あれ、ほんといつの間に？」

志田の独り言は、まさに橋月の代弁でもあった。ざわついていた周囲が、不意にしいん、と水を打ったように静まり返って壇上の会長に注目する。

周りの人のけはいや呼吸や囁きが頭蓋に飛び込んで来て、身体中が外界に向けて開いてしまったような、急に鋭敏さを増した感覚に眩暈を覚え、橋月は知らず口許を抑えた。嫌な感じに身体の奥の方がじりじりと熱く、気持ち悪ぃ、としゃがみ込みたくなる。

この景色には違和感がないだろうか？

「眞己、大丈夫か？」

フェアリアの巴が気遣って、ぺちぺちと頬を叩いたが、頭を僅かに振るのが精一杯だった。
――分かった。
多分、この、群集が。
奇妙に興奮しているけはいがして、嫌だ。
抑えた手の平ごしに上目遣いで壇上を見遣る。そこまでにたくさんの頭が並んでいる。
嵐の前の海の静けさだ。何か起こるのに、静か過ぎて、恐い。静寂が静寂として横たわっているだけに、次の瞬間の熱狂的な崩壊を思い描くだけでたまらない気分になる。
――マズイ、んじゃないだろうか。
こんな一箇所に、異変のせいで精神に安定を欠いた群集が集まって。
もし、何か、パニックを起こすような一石がこの黒い群集に投じられたら。
その考えにぞっとして、手の平に汗をかく。
そして同時に笑えた。馬鹿馬鹿しい考え。妄想だ。――でも、果たして妄想で済む話だろうか？　そうだろうか？　本当に馬鹿げているんだろうか？　だってもう自分たちは非現実の中にいるのに。
ここには、不安な昂揚感が濃密度に満ちている。息苦しい。
――皆、《祭り》を待っている。
若葉の言葉のせいか、ふとそう感じた。そう、《祭り》だ。全身の毛穴が開いて、どっと冷や汗が噴出す。
胸を炙るように高まる嫌な予感に、橋月は一人だけ逃げ出したくなった。
――今なら、安全なところへ、逃れられるんじゃないか。いや、私って、さいてえ。
恩田会長がマイクを調整して、口を開こうとしたその時、分かったのだ。

――もう遅い。

「皆さん」

恩田会長はわらっていた。奇怪に罅割れた顔のビスクドールを思い出した。ああ、あれは、確か、人形好事家の叔母のビスクドールを弟が不注意で壊して、姉さんがやったんだ、と言い逃れをして、まさか信じるわけないと思ったのに、母が顔を真っ赤に膨れ上がらせて怒って……

「みいいなあああさあああああんんんん」

わあん、とマイクが鳴った。群集が「一体何？」と不安に一拍ざわめく間隙を縫って、

『じょおうをだせ』

恩田会長の声は罅割れた。

集団パニック

『じょおうをだせ』

平仮名に読みを変換してしまったのは、恐らく橋月だけではない。発音のアクセントが平易で、漢字で読むメリハリがなかったのだ。

――女王を、出せ？

ようやく思い当たって、耳鳴りのする呆然とした状態から現実の喧噪に引き戻される。

「何言ってんだあ」

「わけわけかんねー」

「俺ら集会に呼ばれたんと違うんかよお」

たちまち悪意に満ちたブーイングが巻き起こり、不審の皮を被った不安が体育館の中を充満して、生徒たちを揺さぶった。橋月はいっそ体育館が生き物のように目覚めの身震いをしたのではないかと思った。

「かいちょおおっ　頼むっすよ～」

特大の野次が飛んだ瞬間、恩田会長は無機質なほど綺麗に微笑んだ。

「どうしようもないやつらだ」

ああ？　と何人かの生徒が眉根を寄せるのを無視して、恩田会長はマイクをハウリングさせた。鋭い音響効果に、女子生徒たちが痛そうに耳を抑える仕草をする。彼女たちも不安げな表情をしている。

「おまえたちとわれわれがたいとうだとおもいあがるのはゆるされないこれはようきゅうではないめいれいだじょおうをだせ」

さもなくばころす。

読点の存在を無視して平淡に綴られる音に、意味が取れずにか、生徒たちは更にしらけた。何やら趣向を凝らしたつもりかどうか知らないが、完全に外している、と。

しかし、その顔色は皆一様に不安定に慄いていた。

悪態を吐きながら、どこか本能の部分で痺れたように異変の臭気を嗅ぎ取り、それで攻撃的になっているのかもしれない。誰もかれもがマイナスの感情を隠せないでいる。

逃げた方がいいかもしれない、と本気で橋月は手の平を握り締めた。集団の悪意と不安がはっきりと形をとり始めている。ようやく保たれている安定が、決壊するには、あと一押しでいい。

何かが起こる。起こっている。分かるのだ。

予感は臭う。鉄錆の臭いがする。

久村が、ぽつんと指摘した。

「やばいぞ」

橋月は無意識に反復する。

「やばい？」

不穏な響きに硬直した直後、絶叫が響き渡った。

「うわあああああぁぁぁあああああああああああああああああーっ
何だアレーッッ」

振り仰いだ先に運動場側の窓ガラス。
その一面に、べったりと赤い物体が張り付いていた。もぞもぞとむかで百足に似た赤い色が、鈍く光を反射しながらうごめ蠢いている。

「いやあああああああああああああぁぁぁあああああああああああああーっ」

誰かの一際甲高い悲鳴。悲鳴が、尾を引く。
橋月は衝撃のあまり、身じろぎもせず物体を凝視する。見覚えがあった。ただし、昔祖父の見せてくれた、難しい書籍の中で。

「……餓鬼」

あまりの非現実感に、だらんと弛緩して呆然と呟く。
あれは、餓鬼、と言うのではないか。
手足は棒切れのように細くて、腹ばかりが水風船みたいにぱんぱんに膨れている。あのアンバランスさが異様で、橋月はその姿をしっかりと目に焼き付けていた。
その次の瞬間、今度は誰かの隣にいた生徒の頭が破裂した。近隣の生徒は脳漿とも血水とも取れない、アメーバ状の液体を被って、一拍後に卒倒しそうな「ひ」、と短い悲鳴を上げた。他の者はただ注視して、目を反らした途端、とんでもないことになるとばかりその場に凍りついていた。
目が点になるとはこのようなことをいうのか。
咄嗟に誰も反応出来なかった。

破裂した生徒の頭部が、ぐにゃぐにゃと蠢いて別の形を作る。
――蟲だ。

「もういやあああああああああああ」

また、誰かの悲鳴。絶叫。橋月の恐れていた一石が群集に投じられ、波紋を起した瞬間だった。

それを皮切りに、互いに押し合い揉み合いながら、戸口や窓から生徒が逃げ出した。狭い入り口に殺到した彼らは、悲鳴と怒号とでパニック状態を起こし、転んだ者を踏みつけ、それでもなお自分だけ逃げ出そうとする。しかし中には、衝撃のあまり全く動けない者も少なからずいた。

「やだっ　置いてかないでええええ」

腰を抜かした滝田里瀬が、仲間の少女たちに置き去りにされ、背後から男子生徒に蹴倒された。倒れ伏して、立ち上がろうとしたものの、汗で濡れた手が虚しくワックスを拭いて磨き上げられた床板を滑った。

焦りが頂点に達したのか、体裁をかなぐり捨てて取り縋る女子生徒が多かった。何人かは涙と鼻汁で顔をぐちょぐちょにしながら、自分を残し逃げようとするクラスメイトに懇願する。失禁した者もいたのか、つんとアンモニア臭がした。

だが、誰も聞いていない。否、聞こえる筈がなかった。皆、自分の事で精一杯だった。生徒は三種類に区分された。逃げる者、逃げたいのに逃げられない者、そしてただ呆然と動かない者。橋月たちはこの第三番目に該当した。

「くむらくうううん。わかばさあああああん」

ひいっひいっとひきつけを起こしながら、滝田や他に動けない者が、立ち尽くしたまま逃げようとはしない久村たちを、必死の形相で見上げてくる。彼女たちは腰が抜けたきり、吸い付いたように臀部が床板から離れないのだ。一方若葉は紙のように真っ白な顔色をして、拳をきつく握り締めたまま壇上を見つめ、微動だにしなかった。何なのよ、これ、と唇がうわ言のように小さく動く。

ごくり、と久村が唾を飲み込む音が聞こえた。

橋月が久村を見遣ると、彼は真っ青になりながら、こちらを見て少し唇の端を捲り上げた。小さく頷く。

橋月は、自分も同じような顔をしている事を悟った。

怖い。逃げ出したい。目も、耳も、全部塞いで、彼女達を置き去りにしたい。

橋月の片方の指を、小さな手が握った。

――巴。

きゅっと握り締め、巴が多分一番落ち着いているのだろう、少し強張りながらも、橋月を見上げて微笑する。

――うん。

今度は、無理なく笑えた。がちがちの微笑だろうけど、白い歯が零れる。

滝田達が、笑う橋月を呆然とした面持ちで仰ぐ。

「大丈夫」

巴が言う。

「大丈夫」

橋月が繰り返す。

「何とかなるって」

久村が巴の声は聞こえなかっただろうけれど、橋月の言葉を受けて締め括った。それだけで、もう何とかなった気がした。

「滝田さん、立ち上がれる？」

橋月が滝田の軟体生物のように弛緩しきった腕を取った。肩口にさらさらと黒髪が零れて、シャンプーの香りが鼻先をかすめた。毛先が涙で湿っている、と橋月は気がついた。錯乱する滝田のお蔭で、逆に心が落ち着いた。人は、他に庇護すべき者がいれば、存外状況の困難を割り切れるものなのだ。彼女に感謝したい気持ちが湧いて来た。

「あ、あ」

「逃げよう」

力強く言うと、滝田は涙の筋を作りながら、確かに頷いて見せた。久村は自失呆然の若葉を支え、志田が先行して扉の方に向かう。

「みなさあああああん、にげられませんよおおおおお。じょおうをだせばたすけてさしあげまあああああああす」

追い縋る粘着質な声は、とてもあのふざけた恩田会長のものとは思われなかった。もしかして、恩田会長も『蟲』に乗っ取られているのだろうか。

そして、ある可能性に気づいてぞっとした。

――じゃあ、私達は皆自分からこんな閉鎖空間に誘き寄せられて、罠にはまったってこと？

蟲の罠に？　仕組まれていたのか？

発端となったのは、あの放送演説。体育館に生き残った生徒たち全員が、ある恣意に基づいて集められた。つまり、放送によって罠を仕掛けられたことになるのか。では、放送室にいた生徒会メンバーは全員敵ということか？

もう分からない。先ほど頭が破裂した生徒にしたって、あまりに突然過ぎた。もう誰が正気でどの場所が安全なんて、どこにも保障がない。狂気と破壊は突然訪れるのだ。防ぎようがない。

そうなると、誰も信用出来ないことになる。人が何の前触れもなしに『蟲』に変態してしまうのなら、いつ誰が敵になるのかなんて、予想もつかないということではないか。それでも当面は少しでも信頼のおける連中とつるんで、その場の危機を脱するよりなさそうだ。

「開かないっ　開かないようっ」

魂切る絶叫が空を引き裂いた。体育館の入り口に人だかりが出来ている。ドンドンと激しく大扉を叩くが、扉は口を閉ざしたように頑として開かなかった。

「ちょ、どけっ」

別の生徒が押したり引いたりするが、駄目だ。滝田の腕を肩に回して、半ば担ぎ上げたまま、橋月は青い顔で久村を振り仰いだ。久村の唇は乾いていた。

「扉、閉まってんのか」

「みたいだ」

「いやあああぁぁぁあああ」

腰に手を回されてようやく立っていた滝田が細い嗚咽を漏らした。

崩れ落ちそうになる彼女を必死に支えた。さっきからだんまりの若葉も気になる。普段元気なだけに、反動が怖い。全身で混乱を表現する滝田はまだガス抜きが出来ているが、青ざめて何も言わない若葉はいきなり爆発するかもしれない。

「あっ」

突如、大扉が大きな音を立てて外側から開いた。逆光を浴びて立つ人影は。

「い、いいんちょーっ」

素っ頓狂な声を上げたのは久村だ。

「お前ら、皆とっとと逃げろ！」

いつまで経っても『いいんちょー』で済まされる生徒会副会長白岡は、眼鏡を中指で押し上げて怒声を放った。その怒鳴り声をきっかけに、生徒たちは慌てて我先にと外へ飛び出す。

――白岡委員長、いや、白岡副会長も、恩田会長と放送室にいたはずだ！

新手の罠か、と橋月は強い猜疑と警戒を覚えたが、そうも言ってはいられなかった。今は逃げるしかない。

流れに巻き込まれないようにしながら、どうにか橋月たちも体育館を出た。

「にいいいげえええてえええもおおおおおおむうううううだあああああじょおおおおおうううをおおおおおおだあああああせえ

えええええええええ」

捩れて肌を粟立たせる不吉な声を背に受け、それでも生徒たちは怒涛のように先を争って逃げ出した。どこにも逃げ場などないと知りながら。

変態を終えた元クラスメイトたちが、蟲の形をした頭部で奇声を上げながらゆるゆると追いかけて来る。捕まった生徒がどうなったのか、誰も振り返らなかった。

ガランとした体育館に、緩やかに微笑する恩田会長と蟲たちだけが残された。

口吻

自力では歩けない滝田里瀬、若葉千尋を引っ張って、橋月たちは体育館を脱出した。中庭の石畳を突っ切って、白亜の校舎へと一目散に駆け出す生徒たちの後を追う。反対方向の特別教室の方へ逃れる者もいた。どちらに行けばいい、というものでもなかった。

「急げ！」

誰も後ろを振り返らなかった。逃げ出せなかった者がどうなったかなんて、考え出したら押し潰されてしまう。人は人を助けられるほど偉くも強くもない。橋月に出来るのは、滝田の弛緩した腕を肩に回して急かしながら、奥歯を食いしばることだけだった。

「いやあっ『蟲』が！」

誰かが叫んだ。示し合わせたわけでもないのに、それは『蟲』と表現するしかない代物だった。思わず肩越しに振り返ったのを橋月は死ぬほど後悔した。

頭部だけ『蟲』に変態した元生徒たちが追いかけて来る。揺れ動く触角と異様に大きな漆黒の複眼、下唇髭《パルピ（Ｐｕｌｐｉ）》に似た器官の間から、長い一本の糸が口腔から伸びて、これも宙に揺れている。

――糸？

違う。
その動きは不規則で、風の向きには関係なかった。つまり、身体の器官の一部なのだと気が付き、どうしようもない嫌悪感に心底ぞっとした。
首から下は元のままだけに、アンバランスを通り越して生命への冒涜すら感じた。一人、男子生徒が捕まった。石畳に転んだ生徒がいた。悲鳴を上げた。
水煙管の吸い差しを思わせる管が逃げ遅れた生徒の頭蓋伸ばされた。屈折点を境に、管は前後自在に忙しなく動いて、それは花の蜜を吸う蝶の口吻を彷彿とさせた。ただ一点違うのは、ぜんまい状にしまわれていた吸収官が分け入る先は、花弁に埋もれたオシベではなく、逃げ遅れた生徒の頭蓋だった。
響き渡る絶叫に誰もが目を瞑った。
――吸ってるんだ。
何を？　蜜じゃない。ああ、脳味噌を？
怒りと恐怖で頭蓋の内側がぐちゃぐちゃに掻き乱された。こめかみの辺り、血管が膨れ上がって破裂しそうだ。
橋月は置き去りの光景を振り切った。
助けられない。
惨めさ、悔しさ、義憤の全てを、恐怖の方が上回った。絶大に。
目頭が痛くて、もう振り返らなかった。
最後尾の白岡副会長が「昇降口に向かって走れ！」と怒声を放った。
命令されるままに言う事を聞いて良いのか、橋月は咄嗟に迷った。
――白岡も、放送室にいたんだ。
体育館に生徒たちが集まったのは恩田会長の放送演説のせいで、白岡もあの現場にいた、という事実が頭にこびりついて離れなかった。

――信用していいのか。
橋月の葛藤を知らず、先を走っていた久村たちは、先導する生徒の流れに乗って、昇降口を左に折れた。遅れて橋月たちも――
「うわああっ」
昇降口は西門と中庭に挟まれている。その西門の方から新手の『蟲』が現れた。逃げる生徒たちが二手に分かれる。右と左へ。橋月たちは右側に押し流された。混乱でごった返し、フェアリアの巴が人に衝突して、切り揉みしながら落下するのを引っ掴み、ポケットに押し込む。もしかしたら、失神しているかもしれない、と心配になったが、確かめている場合ではない。
「「橋月っ」」
左手から久村と若葉が同時に叫ぶが、橋月と滝田、そして白岡は右手に走るしかなくなった。黒い頭を一つ突き抜けた久村が必死に呼ばわる。
「合流箇所は、《例の場所》だっ　再会まで無事でいろよおっ」
――れ、例の場所！？
例の場所ってどこだ、と聞く前に久村の頭部は見えなくなった。久村、若葉、志田組と、橋月、滝田組に別れてしまったのだ。
「おい、橋月さん、呆けている場合じゃないぞ、早く走れ！　突き当たりの階段を上ろう！　二階に行くんだっ」
後ろから白岡副会長に促され、目を見張る。そうだ、それどころ

じゃない。
声の出なくなっている滝田を引っ張り、荒い息で廊下を走って階段を駆け上がった。昇降口すぐ横の階段を上った生徒がほとんどのようで、わざわざ突き当たりまで走った者は少数だった。二階に上ると、「三階まで上れっ」と檄が飛ぶ。

「滝田さん、上れる？」
「あ、だ、だいじょうぶ」

涙か汗か区別のつかなくなった液体で滝田の長い髪の毛はべったり白い頬に張り付いていた。三階まで駆け上がった時、追跡者のけはいは絶え、橋月はもう大丈夫、と気を抜いた。

「あんたたちっ」

鋭い声に、滝田に肩を貸したままだというのに、身体が竦みあがって咄嗟に頭をめぐらすと、

「あ、久村さん」

久村の双子の姉の姿に、橋月は呆然と呼ばわった。

「久村君と久村さんでややこしいから、『たえこ』で結構よ！」

仁王立ちした久村たえこはぴしゃりと言い捨てた。しかし何故か彼女は随分憔悴して見えた。この異常事態で、御多分に漏れず、精神が参っているのだろうか。そういう『憔悴の仕方』には見えなかったが、他に理由を思いつかなかった。
久村たえこは、橋月に肩を借りている滝田に目を止めて、一瞬鼻先に皺を寄せたものの、その冷やかな視線は素通りして背後の白岡

に止まる。

「白岡くん、不肖の弟はどうなったか知っているでしょう」

「昇降口で二手に別れたよ。俺らは北側から階上に上がったけれど、久村や若葉、志田たちは南側に流された」

「そう。ところで、後ろのお荷物は何なのかしらあっ」

え、と瞠目した瞬間、無防備な背中越しにいびつな形をした黒い影が山の稜線を連ねるように複数、リノリウムの廊下に落ちた。橋月は絶句したまま身動きが取れなかった。いつの間にか背後に『蟲』がけはいもなく、すぐ真後ろまで忍び寄っていたのだ。

――死ぬのか、私。脳味噌吸われちゃうのかな。

冷たい汗と沸騰して真っ白に焦熱した頭で、指先まで血が凍り付いた。

「痴れ者がああぁぁあああああっ！」

一体誰が憤怒の形相で罵倒したのか、分からなかった。

久村たえこ。

だったもの。

「不浄の者ォッ　うぬらに誰がこの地を踏むのを許したかあああぁぁあああああああ！！！！！」

烈火のような気迫と激怒を塗り込めたその声音は、同時に虚空を灼熱の炎で切り裂いた。

真夏にアスファルトを焦がす熱線のように降り注いで、ぼっと青白い火が点いた。『蟲』たちは溶けたアイスクリームも同然に溶解

し、最期黒の塊と化す。ほんの数秒のことだった。
橋月は悪寒を堪えながら後ろをどうにか振り向いて、消し炭が一山、二山、踏み面にこんもり盛っているのを見た。
空気は高熱に炙られ、陽炎となって揺らめく。
熱の余韻だけで、まだじりじりと空間が歪んでいた。
——ええと。
白紙化した頭が、目の前の事態に追いつかなかった。何が炭化したのか、つまり——察して、たちまち悪寒は脳天まで突き抜けた。
——燃やしたのだ。
誰が？
久村たえこが。
化物だ。
咽元まで熱い塊が込み上げる。
だって、こいつら。もしかしたら、人間だったのかも、しれないのに。
じゃあ、人間が、消し炭、に、
ひとが、

「ひ」

頭を鈍器で殴打されたような衝撃があって、間髪要れず、ぐうっと吐き気が競りあがって来る。上半身を折って、吐瀉物を撒き散らしそうになった時、
「いやぉあああああああああああああああああぁぁあああああああああああああっ」
とても人の上げた声とは思われない、捩れた甲高い哭声が沈黙を無惨に引き裂いた。橋月が生理的嫌悪に耐え切れず、前のめりになる前に、滝田がずるりと尻餅をついて、壊れたように頭を掻き毟り、

慟哭を上げ始めたのだ。

「もういやあああああああっ　こんなのいやああ……ぅぁあああああああああああぁあああああああ！」

だん！　と白い拳が憎悪を叩き付けるよう、冷たいリノリウムに打ち付けられた。

「たえこおおおおっ　あんた何なのよおおおおおおおっ　化物っ　化物っ　化物オオオオオオオォィァァオオオオオオ！」

それは橋月の代弁でもあった。だが、滝田が取り乱したお蔭で、理解出来ないものへの無闇な恐怖は急激に沈静化して行った。奇声を上げ、惑乱する滝田に、度肝を抜かれたというのが一番正しいだろう。ざんばらに振り乱した艶やかな黒髪の下、涙で濡れ濡れと光る強い視線がたえこを貫く。

「答えなさいよオオオオっ　あんたの弟も化物なの！？　私達を騙していたのオオオオォォオオオオっ」

無言のたえこは、その時冷やかな視線を突き抜け、青い氷塊を浮かべたかのような瞳孔をきつくしぼった。

「黙れ。私を愚弄するのはまだしも、弟を化物呼ばわりは許さぬ。百年足らずの短命、若いみそらで命を散らしたくなければ、その腐れた禍口を閉じるがいい」

決して声を荒げたわではない。しかしそれは紛れもない身も凍る恫喝だった。滝田は涙に濡れながら、その場に縫い止められ、身動きを封じられた。橋月は何か喋らなければ、と闇雲な焦燥感に襲わ

れ、それを実行した。

「く、久村さん、一体その喋り方」

「たえこでよいと言ったであろう、石頭め。そもそも」

引き絞った瞳孔は、金色の光彩を帯びた縦。

――人間じゃない。

どっと血の気が下がった。何なんだ。何なんだよ、一体。

「橋月眞己。お前が事の発端の気がしてならぬわ」

は？　と橋月は固まるが、たえこは独り言のように続けた。

「完璧な筈の守りに、お前の存在が段差としてあるのに気がついたのはここ最近のこと。仔細漏らさず網羅した筈の手持ちの情報に、お前の存在などなかった。《盲点》なのに、お前は《消失点》だ。全ての異変の中心にお前がいると言うのなら、私はお前を殺さずにはおれまいよ」

「な、何言って」

電波ですか、と茶々を入れる気にはなれなかった。全身を針で刺すような、本物の殺気が吹き付けて来る。先ほどの高熱と炎、炭化した黒い山。脳裏にそれがある。

張りつめた緊張の糸に、何とかこの殺気を反らさなければと焦るあまり、橋月はあらぬことを口走っていた。

「こ、このこと、久村は、知って」

「知らぬ」

僅かに顔を背けて、一言吐き捨てた声音には、ありありと苦渋が

滲んでいた。ここが突きどころだ、と橋月は直感で確信した。

「どうして久村はっ」

「『記憶喪失』。聞いたとがあろう？」

いきなりの問いに、橋月はぽかんと間抜け面を晒した。

「き、きおくそうしつ？」

人間じゃ、ないのに？

言外に通じたのか、たえこは肩を震わせて苦笑した。

「お察しの通り、私は人に非ず。ならば同じ血を分けた弟、久村笙も人ではない。だが、あれは自分を人間だと思っておる。幸福な勘違いか、不幸な思い込みか、全てはあれの『記憶喪失』から始まったのじゃ」

たえこは一拍間を置いて、まるでねぶるような視線を向けた。

「紅入海岸（いろいりかいがん）」

橋月の目に衝撃が走る。それは、橋月にとって因縁の地名だった。

「お前は知っているね？」

「……小さい頃、その海岸で溺れたことが、ある」

下手な刺激をしたくなくて、慎重に言葉を選んだ。

「何の因果か知らない。しかし、私の弟が一族にあるべき『記憶』の全てを失ったのも、そこでねえ。おまけに、お前がそこで溺れた

年に、我が愚弟も『記憶喪失』になった。何の符号かと思うであろ？」

「それはどういう」

「知らぬ、分からぬ、だがこうなっては偶然とは思えぬ。お前が何かしら関わっているというのなら、答えは簡単だ。殺すまでよ」

たえこが右手を空中に差し上げた時、もう駄目だ、と橋月は覚悟した。その時、ポケットの中身が急に動いて、

「おおおおさあああああああああああっ」

巴がくしゃくしゃに丸めた翅脈を伸ばし、弾丸の勢いで飛び出して、たえこの顔面に貼りついたのだった。

一時休戦

「うわあああああん、おさあああああっ」

顔面に飛びついたまま号泣を始める物体の翅を引っ掴み、引き剥がして、たえこはまじまじとその物体を見つめた。

「鎮扇の子倅ではないか」

一体どうした、とつなぐ。鎮扇の倅は吊り下げられた状態でじたばたと暴れた。

「一体もどうしたもないですよっ　長ァっ　今までずっとどこにいらしたんですか！　もう町中がおかしくなってしまって、俺たちの一族も右往左往、公園からは一歩も出られない状況なんですよ！」

「それは悪いことをした。ふむ、姿を隠してからもう大分経つわねえ」

「大分どころかずっとずっと長い間ですよ！」

喚くフェアリア――そう、確か《鎮扇公園》一帯を拠点とする一族の直系だ。巴と言ったか。不意にたえこは強い視線を感じ、巴を摘んだまま目線を上げた。

滝田を庇うようにして立つ、橋月眞己だ。笑えるほどに全身が強張っている。

「長……長って、あんたが『来須町』一帯の妖怪を取り仕切るとか

いうボスだったのか？」
「大ボス……せめて頭領か首魁とでも言って欲しいわねえ」
大仰な喋り口から普段の口調に変わり、たえこは小首を傾げてみせたが、目の奥は笑っていなかった。例え軽口をたたいても、一触即発の状態に変わりはない。ただ、張りつめた糸を、巴がその出現でもって一時的に緩ませた。それはたえこに強者の余裕を自覚させた。考えてみれば、橋月眞己などいつでも殺せる。たえこは目の前の矮小な人間の話を、少しは聞いてやってもよいという寛大な気持ちになっていた。
橋月はたえこの心境の変化を敏感に感じ取ったのだろう、解決の糸口を探しているのか、一言一言噛み締めるように口を開いた。
「巴の言う『長』はここしばらく消息不明だと聞いていたけれど、まさか同じ学校の生徒だったとは思わなかった」
「私自身一生徒を演じている自分に驚いているのよ。全て笙のためだけれど」
「どうして久村に事情を打ち明けなかったんだ？」
自分の命が危ない場面で、弟のことを気にする橋月のありようがおかしかった。だから、たえこは意地悪をするでもなく、その疑問に答えてやることにした。
「私たちの寿命はとても長いの。無理矢理記憶をこじ開けるような危険は冒さないわ。こんな不自然な状態は長いこと続かないでしょう。笙が全ての記憶と力を　無くし、名実ともにただの人に成り下がったのなら、自然に思い出してくれるのを待つわ。何年でも……ここは私たちの土地なのだから、誰にも邪魔はさせない。だからね――橋月眞己、お前のような不確定要素は排除する」
「うわあああっ　待ったあっ　長！　乱暴過ぎるよっ」

ぶら下げられた巴が猛烈に暴れて抗議する。

「今はそれどころじゃないっしょ！　眞己を殺したって、何の解決にもならねえよっ」

「そうかしら？　殺してみれば、何かが変わるかもしれないわよ」

たえこは指先を放して巴を宙に解放してやり、肩を揺らして笑ってみせた。しかし巴は、空中に留まったまま真っ赤な顔で拳を握って憤慨している。

「殺したら、もう取り戻せないんだってばっ　長、ここは皆で協力しようよ！　大体、久村とか言う奴――って、ええっ　じゃあ久村って奴は」

今更思い当たったらしく、巴は見ていて面白いほど顔色を赤から青へと鮮やかに変えた。

「ぎゃーっ　俺、俺っ　『青蓮華』さまの御前で、そうとは知らずとんだご無礼をっ　挨拶もせずに、うわあっ」

「お前、本当に鈍いわねえ。そうよ、私が『赤蓮華』なら、久村笙は『青蓮華』。お分かり？」

「ひえええええっ　全然、気づかなかったです！」

巴とたえこのやり取りに、橋月は恐怖と困惑の織り交ぜになった表情を見せている。何も分からないで、事態に翻弄されているこの憐れな人間に、自分たちの説明をしてやろうと思ったのは、ほんの気紛れだ。

「来須町を取り仕切っているのは、私一人じゃない。本来は、私と

弟の二人でよ。私の号は『赤蓮華』、弟の号は『青蓮華』。片方が欠けたために、この町の守　りはとても不安定になってしまった。せめて、我々の社があったこの学校の敷地だけはと思ったけれど、万全の守りは敷けなかったようねえ」

あのような、汚らわしい者の侵入を許してしまった。その動かし難い事実が、片割れの欠けた今の自分の無力さを痛いほどしらしめる。

「くむ、いや、たえこさん」

何を決心したのか、橋月がたえこを見据えた。

「私が《盲点》だか《消失点》だかで、貴女のテリトリーに紛れ込んだ異分子だっていうのは分かるよ。多分、私の存在に今まで全く気がつかなかったんでしょう？」

「そうね、本当に《盲点》としか言いようがないわ。お前は、書類上は二年間命婦高校に在籍していた。でも、私にとって、お前はある日突然現れたも同然だっ　たのよ。笙が何も言い出さなければ、お前がこの学校にいたことにずっと気がつかないままだったでしょう。信じられない、私の、テリトリー内でよ？　許され　ないわ、そんなこと」

「……だから、貴女はわけのわからない私を、放置と処理した場合の利益を比較考量した末、殺した方が安心って考えたんだよね。この混乱した機会に手っ取り早く始末したいっていうのも分かるよ」

「ほう？　それで？」

「でも、私自身は別に貴女の弟――久村に危害を加えたわけでもないでしょう。そして、これからもないはずだと断言出来る。それに、久村は何だか私のことを　勘違いして気に入っているみたいだからね。貴女が今まで私のことを看過して来たのは、それが一番大きな

理由でしょう。久村と私は仲違いしたわけじゃない。　いくらこんな状況でも、突然消えたら、訝しく思うくらいの常識はあいつにも備わっているよ。その私を殺してもいいの？」

淡々とした口調だったが、そこにこもる気迫は触れれば切れそうに鋭利だった。

「ほおおお、私を脅す気か、この小娘は」

たえこの口許が肉食獣の残忍さを思わせる歪みの形に吊り上がる。

「だが、確かに、一理ある」

その言葉に、ぱっと橋月は顔を上げた。

「じゃあ」

「しかし、殺す利益が更に勝る場合は？」

「……殺さない利益の方が更に勝ると言っておくよ」

「ふ、はは！　面白い奴だ！　馬鹿馬鹿しい賭けをしおって！　ふん、いいだろう。お前を生かしておいてあげるよ。殺すのはいつでも出来る。笙もお前を気に　入っているしねえ。それに、そこの二人を証人に引き合い出さない根性が気に入った。中々見所があるじゃないかねえ」

橋月がはっと目を見開く。そのくらい、分からないではない。何しろ、たえこは橋月を消すだけではなく、白岡も滝田も一緒に焼き殺してしまえば、それで良　かったのだ。その二人について、自分を殺したら二人が久村に証言するだろう、と一言も言及しなかった橋月に、他人を巻き込まない程度の思慮や勇気はあるよ　うだと、たえこは小気味よさを覚えた。

「ふふ、少しは信頼に足るようね。いいわ、一時休戦よ。私のことは、笙には言わないでちょうだい。これから、笙たちと合流しましょう」

がらりと雰囲気を変えたたえこに、明らかに橋月の肩から力が抜けた。相当緊張していたらしい。それはそうだ。何しろ、賭けていたのは己だけでなく、他の二人の命。決して軽くはない。しかし、たえこには重くはない命。

「あー、二人とも」

今まで黙っていた白岡が挙手した。

「よく分からんが、たえこさんは人間じゃなかったんだな」

「そうね、笙には内緒で頼むわよ。あの子、自分のこと人間だと思っているから」

白岡にだけでなく、それは滝田里瀬に向けてもの台詞だった。滝田は座り込んだままだが、食入るように話を聞いている。けはいで分かった。

「うっかり喋ったりしたら、私何をするか分からないわよ？　滝田さん」

表情の見えない滝田の肩が跳ね上がった。しかし、答えたのは白岡だった。

「ああ、了解。今日は色々と視野が広くなるな。じゃあ、まあ、久村たちと合流するか。橋月君、合流する『例の場所』とやらは、ど

このことなんだ？」

落ち着いて、事態を簡単に受容する白岡とは対象的に、橋月の方は慌てて応じる。

「えっ　いや、私にもさっぱりなんだけど」
「打ち合わせしていたわけじゃないのか？」
「する余裕はなかった」
「うーん、普段の会話で思い出せないか？　よく集まっていた場所とか」
「……考えられるとしたら、クラスの教室かもしれない」
「他には？」
「後は……理科室」

挙動不審に応じる橋月に、白岡は腕を組み、何で理科室？　とは問わず、器用に片眉を上げた。

「後者の気がするな。理科室の方が近いし、行ってみよう」

行き先は決定したものの、座り込んだ滝田は一言も喋らなかった。項垂れたまま橋月に腕を取られて立ち上がり、たえこのことは決して視界に入れようとはせず、顔を背けていた。

――これが、正常な反応。

滝田は普通。
橋月は規格外。
白岡は……
たえこは何気なく白岡の横顔を見上げる。汗一つかいていない。
泰然としている。

あまりに、落ち着きすぎているし、受入れや順応のスピードが早すぎる。例え『蟲』とはいえ、元同胞を灰山にされても、顔色一つ変えないとは、冷静で済む域を超えてはいまいか。
それゆえ、たえこは一つの判断を下した。
白岡は……
たえこは歩き出した白岡の背中を鋭く睨み据えた。
――白岡は、異様。

＊＊＊

「委員長、落ち着いてるよね」
橋月が背中から話し掛けると、白岡は「そうかな？」と首を傾けて鳴らした。
「俺なりに驚いているつもりなんだけれど」
――つもりかよ。
「いや、委員長がそれで驚いてるんだったら、私憤死してるから」
橋月はきっぱり唱えて、本題を切り出した。
「委員長、もしかしてもしかしなくても、視えてる？」

俯いたまま手を引かれる滝田を憚って、何を、とは直接問わない。しかし、白岡には通じた。

「あー、もしかしてあのちっこいのか？」

「……何だ、やっぱり」

脱力してしまう。早くに言ってくれれば良かったではないか。いや、言う暇もなかったか。

「そういう人だったのか」

「そういう人って、妙な言い方だなあ」

苦笑して、

「えーと、あーうん、まあ。昔っから、目だけはよくってね」

フレームレスの眼鏡越しに細められた目玉は、少し人よりものがよく見えるようだ。例えば、フェアリア――

――滝田さんは、見えていないのに。

白岡はこの異様な環境下で突然『視える』ようになったわけではないようだ。生来のものか。文字通り、そういう人だったわけだ。

――とりあえず、考えようによっちゃ色々前進、だよな。そもそも『長』を探して学校に乗り込んだわけだし、第一目的は達成したってことだよなあ。

しかし、どうも話を聞く限りでは、久村兄弟は二人で妖怪的には一人というか、『長』としてはたえこと久村笙両者の力が必要な感

じだ。久村笙が妖怪としての記憶を失い、その力もふるえないとなっては、当初の目的である『長に何とかして貰おう』プランは人外の彼らにとってもいわゆる無理難題を押し付けるようなもので、現状では到底不可能ということではないのか。何しろ、たえこ自身がこの学校の守りでさえ破られたと怒髪天を衝いていたくらいなのだから。久村が記憶喪失なせいで、二人で一人な長としての能力は低下しているのだろう。

久村を問い詰めようにも、身内が無理矢理記憶を穿り返すような真似は許してくれなさそうだし。多分、それをやったら殺される。橋月だけでなく、滝田や白岡まで。

――前途多難だ。

やはり、他力本願がいけなかったのだろうか。

第二理科講義室に辿り着くと、

「やーん、久村のアホが言った通り皆来たーっ」

若葉がぶんぶん手を振って出迎えてくれた。橋月は全員無事に集まれたことに、ほっと安堵の溜息を吐く。それぞれが再会を喜び合った。

「俺はアホなんかよ」

げっそり呟く久村は無視された。

「たえちゃーんっ　無事で良かったよっ」

抱きついた若葉を巨乳で受け止め、よしよしとたえこが撫でる。

咽を鳴らさんばかりの若葉に、久村が遠くを見て呟いた。

「お前ら、それでええのか」

「久村、それよりお前集合場所ちゃんと言ってよ。たまたまま合流出来たからよかったけれど」

橋月が文句を言うと、久村は、あっはんと身をくねらせた。

「そらあ、短慮で浅慮で浅はかってもんだぜ、橋月ィ」

「それ全部意味一緒だし、しかも全部お前のことだろ」

「大人な俺は今の暴言を流します。とにかくなあ、怪しい連中の前で合流場所なんか大声で言えますかい。例の場所っていったら、我々が仲違いをした記念地点ということでえ、ここしかないでしょう」

そう畳み掛けて、久村はにへら、と妙な笑顔を浮かべた。

「そういうわけで、『ごめん』なっ」

「――は？」

今の『ごめん』がどこにかかったのか、橋月には分からなかった。久村はにこにこ笑って、他には何にも言わなかった。例の場所などと適当なことを言ったことに対しての陳謝か。

「いや、まあいいけど」

拍子抜けして、それなりに、ない知恵絞って久村が気を回したことは分かったし、と片付ける。うん、こいつ、やっぱりそれなりだ。

「はっしー！」

甲高い声に、橋月は思わず辺りを見回した。

「はっしー、君のことよ！」

「え、私っ」

若葉がイエース！　ザッツライト！　と万歳した。

――若葉さん、英語喋れたんだ。いやいや。

「すみません、私は何か悪い事をしましたか？」

何故こんな仕打ちを……とひきつる橋月とは対照的に、若葉はおおはしゃぎである。

「ええやんええやん、今日から橋月さんは『はっしー』！」

「本当にすみません、橋月で結構ですから」

「はっしー、何で丁寧語」

横合いから久村が茶々を入れたので、肘を打ち込んでおいた。気に入らないのお、と若葉が首を捻る。

「じゃあ、つっきーにしとく？」

「……いや、それもちょっと」

「ほんじゃあ、ムーンたん」

いっそ消えたい。

そういうわけで、局地的に橋月は『はっしー』にされた。久村でさえ久村で通っているのに、何故私だけがこんな目に、と橋月の表情は暗い。たえこに引っ付いていた巴が戻って来て、同情たっぷりにニヒルな笑みで肩を叩いた時には、本当にダメ人間になった気がした。

「やれやれ、お前ら本当に緊張感ないなあ」

白岡が微苦笑して肩を竦めた。
「バリケードがてら理科室は戸締りしたから、今から今後の対策でも練らんかね」
「賛成であるー」
若葉が元気良く挙手した。
「そうね、今のうちに話し合っておいた方がいいわア」とたえこ。
久村と志田が机を引っ張ってきて、即席対策本部の陣形となった。メンバーは、久村姉弟、志田耕太郎、白岡正樹、若葉千尋、滝田里瀬、橋月眞己、ついでに巴の総勢七名と一匹。
橋月は滝田を気遣って、とりあえず彼女を席に座らせてから自分も腰を落ち着ける。滝田は久村姉弟を決してみようとはしなかった。
――あれだけ、久村にあからさまなモーションかけていたのにな。人でないと分かって、滝田の中で久村はどういう位置付けになったのか。それが彼女の硬い態度に垣間見えたような気がして。
しかし、久村は滝田の態度の明らかな様変わりを変に思わないのか。机の上に直接座って、たえこにマナーを叱責されている彼を見る限り、どうでもいいようだ。
――案外、冷たい。
人じゃないからか？
「眞己？」
巴に声をかけられて、はっとした。駄目だ、自分が一番差別的かもしれない。どっちが上位、というわけでもないのに。滝田が嫌悪をはっきり露わにするだけ、自分の方が、よっぽど性質が悪い気が

した。

「えー、皆さん」

壇上で議長を務めることになった白岡が口を開く。

「とんでもないことになったんで、とりあえず現状確認をしたいと思います。構いませんか？」

「オッケー！」

「はいはい、若葉さん、ありがとう」

軽くあしらう白岡は調教師に見えた。

「まず、昨晩から今朝にかけて、町全体が外界から切断されてしまったこと。連絡手段は目下のところなし。電話、ネットはつながらず、公的機関にも連絡がつかず、バス、電車などの交通機関もストップ。町の外に出ようとした奴の話は聞かないな。誰か情報他にあるか？」

全員が首を振る。

「――と、いうわけで、分かっているのは、外に連絡がつかず、同時に外に出られないということだ。何しろ、学校の外にはあの蟲が右往左往しているからな。あれを突破して外界に行った連中の情報はなし、と。むしろ脱出した連中とは内と外で連絡が取れなくなったという可能性もあるな。で、現在学校に集まっているメンバーは、比較的卑近距離に住んでいる奴等、それから異様なバイタリティーを発揮するどこにいっても生き延びそうな奴等、の二種類だな」

今ここにいる連中は間違いなく後者寄りだと橋月は確信した。

「で、体育館に集まっていた人数を見ても、百名前後は学校に集合しているわけだ。無茶苦茶な環境にしてはよく集まったと思うよ。ある程度、不自然なほどにはね」
「はいっ」
「どうぞ、久村」
「不自然なほどに人が学校に集まったってえことはあ、いいんちょーは、そこになーんか作意を感じてるってことですかねえ」
「語尾を間延びするな、レッドカード出すぞ。それはともかく、久村の言う通りだ。生き残った連中、とりわけ学校に集まって来た連中というのは、何かしらの法則に従って今ここにいる、と考えたいね。大事なのは、生き残り組が自身の力によって自然生き残ったのか、それとも故意に生き残らされたのか、この点だと思う」
「白岡アっ　意味がわかんないようっ」
「若葉、お前のいいところは素直に分かりませんと言えるところだ」
「えへっ」

若葉は照れたのか、頭を掻いた。
――若葉さん、それ、誉められているのか貶されているのか微妙だよ。
橋月の視線は届かない。

「つまり、俺が言いたいのは、街中の人間が蟲化したり、時間が止まってしまったりしている中では、何の影響も受けず生き残った人間の方が異常かもしれないってことだ。
普通の人間なら、この状況下ではおかしくなっているはずなのに、どうして俺たちは何も変な影響を受けないのか。若葉、お前だって普通なら蟲になったり、動けなくなったりしていても別段この状況じゃおかしくないはずだろう？」
「やだ、あたしはやだよ、そんなん！」

「俺だってやだよ。じゃあ、どうして俺たちは無事なままなんだろうな？　考えてみろよ」
「えっ　あたしの行いが普段からいいから？」
久村が「素で言ったな、こいつ」とぼやいた瞬間、チョークと忘れ物の筆箱が飛んだ。白岡と若葉同時である。
「私語禁止」
「悪口禁止～」

嘆く久村の頭たえこがおざなりに撫でて慰める。白岡はちゃきちゃき進めるぞ、と久村を斬り捨てた。

「はい、それはともかく。異常な状況において、その影響が大多数の人間に及んでいる中、少数の無事な人間には何か特別な理由があってしかるべきだってことだ。いいかい、俺たちの方がマイノリティーってことだよ。マジョリティーは蟲化したり時を止めてしまったりした連中の方なんだからな」
「少数派の方に、原因があってしかるべきってか」と復活した久村。
「そういうこと。しかも、街全体の様子を見る限り、全生き残り組の中でも、相当数が今学校に集まっていると見るべきだと思う。そして、集まった百名前後の生徒の偏りを考えるべきだな」

白岡と目が合った橋月は、仕方なく口を開いた。

「体育館に集合していた連中は、第二学年が六割以上ってこと？」
「七割と見ても難くないね。こういう妙な偏りは見逃すべきじゃないと思うよ。街全体の生き残り組が、うちの学校の連中に偏っていて、その中でも二年生に偏っている、と想定したら、そこには何か因果関係があるはずだ」

そして、そこに何かしらの解決の糸口があると。

「それで、少し検討材料を呈示したい。――恩田会長だ」

橋月は驚いて面を上げた。

――ええと、そもそも、体育館への集合を呼びかけた演説放送についてなら、現場に居合わせた白岡だって、十分怪しいわけで。いや、でも。

「いや、まず、俺の弁明を先にした方が良さそうだな、一部諸君」

――う。

気まずさに息を呑んだのは、久村も同時で、

――あ、こいつも疑っていたのか。

変に安堵した。そうだ、久村は頭の回転が悪くない。回りすぎるところまで回るところもある。

「放送室にいた生徒会メンバーはおそらく潔白、です。といっても、俺自身の潔白を自分に証明出来るだけで、他の連中は白と信じたいだけなんだけれどな。生徒会連も、この異常事態を打破したいという思いは同じでだな、生き残り全員集まって、皆で臨時生徒総会を開くのは名案だって、信じていたんだよ。ああいう結果になるとは思わなかっただけで。恩田会長のようすは演説時いつもどおりだったし、俺は準備に手間取って、後から体育館に集合したんだが、その時にはもう異様な雰囲気だったわけでして。信じてもらうしかないな」

え、え、何の話？　と若葉、志田は顔を見合わせている。白岡はもっぱら、橋月と久村相手に身の潔白を証明しようとしただけだった。そして、信じてもらうしかない、と。

「オッケー。橋月もオッケーな？」

久村が了解をとる。こうなっては、橋月も頷くよりない。

「右に同じく」

「ありがとう」

白岡が口の端だけで笑った。悪くない笑い方だった。

「話を元に戻しますと、恩田会長の言動に、この異常事態のヒントが隠されていると思ったんだ」

白岡のターン

カンカンカンカンカン

路面電車の警報機が鳴っている。

高く遠く長く、近づいては遠ざかる。

カンカンカンカンカンカンカンカンカン――

一人の男子高校生が踏み切り前に立っていた。夏の長い陽射しも、今は逢魔ヶ時に黄昏を運んで薄暗い。男子高校生の表情は濃い陰影を落として見えない。

路面電車が近づいて来る。

――誰そ彼。

ごおッ、と強風が吹いた。路面電車がやって来る。

風化した枕木と錆ついたレールを軋ませ、巨大な列車がやって来る。

かんかんかんかんかんかんかんかんかんかんかんかんかんかんかんかんかん

ごおおおおおおおおおおおおぉぉおおお

耳鳴りのするような咆哮とともに、連なる車両が『彼』の前を通

り過ぎて行く。
ゆっくりと、『彼』は顔を上げた。唇が、三日月をなぞるよう笑みの形に歪んだ。
――誰そ彼。たれそかれ。
それは《呪い》だ。

「みぃぃつぅぅけえええたあぞおおおぉぉおおお」

走り去る電車の音に、その声は奇怪に捩くれて震えた。熱狂的な興奮が『彼』を支配していた。

見つけた。見つけた。ここだ。ここにいる。

くふ、と耐え切れないように嗤いが弾けた。
探していた。ずっとずっと、探していた。間違いない。痕跡がこんなにべったり。たまらない。
背筋を走り抜ける快感で射精しそうだった。
誰そ彼たれそ彼たれそかれ――『お前』だ。
踏み切りが上がった。
『彼』の眼窩と思しきそこは、穿たれて真っ黒な底なし闇だった。
過ぎ去る列車の重い音の中に、かすかな翅音が混ざっては消失した。

＊＊＊

白岡正樹は、フレームレスの眼鏡を愛用している。
久村笙に言わせると、「インテリジェンスでえー感じ？」なのだそうだ。

「中指でくって押してみてくれい、ほんで暗闇できらーて光らしてみてえ」

頼むわーなどとふざけたことを嘆願するのも、久村である。この男は、何か色々と白岡自身や眼鏡に対して、大きな誤解と激しい勘違いがあるようだ。あえて放置を選び、いつまでも訂正しない白岡にも問題があるかもしれない。

「いいんちょー」

といつまで経ってもクラス委員長扱いするのも久村だ。現在白岡は『副会長』と呼ばれるはずなのに、久村の悪影響で、ごく一部に呼び名が「いいんちょー」と語尾を伸ばした『いやーな』呼び方をされる。しかし白岡『いいんちょー』は大概出来たお人だったので、あまり久村を咎めはしないのである。

「正しい日本語を使え」

そういう諌め方しかしない。

「さすが白岡いいんちょー」

おだてるのも久村だ。便乗するのは、久村の悪友志田『たろーちゃん』だ。後方支援と称して煽るのは久村たえこだ。この辺りのタッグは非常に侮り難い。誰もストッパーがいないので、暴走し放題である。久村姉弟の叔父は、双子さまのご乱行に、長年胃を痛め続けているらしい。さもありなん、と白岡は同情する。

とにかく、久村はお調子者だ。お調子者だが、頭の回転はたいそうよろしい。一言で言うと、

――くえない奴だ。

久村に対する白岡の総合評価である。

しかし、普段そういうあからさまな態度を取らないのが白岡だ。くえない奴とは、距離を置くに限る。

適当にちょっかいをかわし、たまに若葉千尋と組んで、久村『で』遊んでみる。そこには、ジョークと笑いが絶えない、突き抜けた人の輪がある。その中心には、久村笙がいる。彼はどこに行っても、大抵は何らかの中心にいるのだ。

人生の一瞬に交差した愛すべき隣人、それが久村笙だった。どれほど派手に目立とうと、久村は所詮通りすがりの人なのだ。前述した適度な距離を置いたおつき合い――のはずだったのだが、今日一日でそうも言ってはいられなくなった。

――とんだ誤算だ。

白岡の偽らざる本音である。

白岡は、人を見る時、ざっと分類をする。

円の中心にいる奴、中にいる奴、端っこにいる奴、環の外にいる奴……ランク付けしているわけではない。厳然としたラベリングだ。中心にいればよいとも限らないし、はみ出し者がダイヤモンドの原石ということもある。白岡がやっていることは、観察なのだ。

何故こいつは人気があるのか。何故あの人は無口なのか。何故彼女はもてるのか。何故この子は走るのが速いのか。あいつとあの子はどういう関係で、そこに彼がどんな風に関わっているのか。

知りたいのは、原因と結果だ。物事は全て依存関係にある。関係

の中にこそ、存在はある。その秘密を解き明かしたい。
例えば、何故、自分は人より『目が少しよい』のか。
自分は『環』のどこにいるのか。
知りたい。

『君が君自身の謎を解き明かしたいと望むのなら――我々の、仲間にならないか？』

そう誘いかけたモノがいた。
白岡は知りたかった。
強烈に。
自分自身を。
世界を。
試験で一番を取っても、どれほど本を読み漁っても分からない、まるで裏側の世界。
表の世界の象徴は、どうしたわけか久村笙だった。
笑う彼に、人々の中心にいる彼に、表の世界そのものに、白岡はふいと背を向けたつもりだった。特に親しかったわけではない。それなのに、白岡は久村に何かを託すような気持ちだった。
俺は裏側をのぞいてみるけれど、お前は表側にいてくれよ、と不思議に祈るような気持ちで。
だが違ったのだ。
久村こそが『裏側の住人』だったのだ。
あれまあ、と白岡は呆れた。
なんだよ、こいつ。俺よりずっぷり裏側だ。とんでもない。その上、ご本人は、自覚がないと来た。
この場合、何なのだろう。中立というのだろうか。
参った。こりゃあ参ったね。
さて、役者は久村だけじゃなかった。当然久村たえこもこちらは自覚ありの共犯だ。恐らく、久村姉弟の正体は――だろう。元々こ

こに彼らの社があったと聞いたし。考えてみれば、名称がそのまんまではないか。うっかりしていた、と思う。
その上、ダークホースは橋月眞己だ。
こいつは何だか正体が全く読めない。さっぱりだ。何しろ、ポケットに『妖精さん』を入れている女子高校生が全国に何人いるだろうか。
敵ではないという感触を覚えたが、はっきり味方でもなさそうだ。
わけのわからないこの二人が、揃って白岡を疑っている。白岡としてはそれがおかしくてならない。怪しいのは、俺よりお前等の方だ、と言ってやりたい。
――お前等、断然俺より怪しいぞ。
だが、賢明な白岡は自己弁護に留めておいた。久村は納得したふりだし、橋月に至っては、あからさまにしぶしぶ、といったポーズを崩さない。
――やれやれ。
白岡は内心嘆息しながら、

「恩田会長の言動に、この異常事態のヒントが隠されていると思ったんだ」

と述べ、この発言によって誰か不審な反応をする者はいないかとさりげなく全員の顔を見回した。
その時、意外な人物が意外な反応をしたのだ。
え――？　と白岡は驚きを覚えたのだが、決して面に表わすようなヘマはしなかった。
――これはどういうことですかねえ。
弱った。どいつもこいつも怪しい。

「いいんちょー、恩田会長の電波クンな言動に、どー現状打破のヒントが隠されているっちゅーんですかねえ」

「やあ、久村。まさか全く見当もつかないなんて、情けないことを言うなよ、学内試験の次席だろう」

白岡が軽く返した時、橋月はぎょっとした顔で久村を振り返った。穴でも開けそうな勢いで久村のしれーっとした顔を凝視している。何しろ、命婦高校では試験の結果を張り出さないのだ。誰が首席か――というのは何故か周知の事実だが、次席以下の順位はほとんど知られていないのだった。

橋月の顔には、まさか久村が次席――？　信じられない、と愕然という名の太筆で書き殴られている。ちなみに、橋月の成績は、ちょうどど真ん中である。

「つまり万年次席でしょおが。首席さまのご意見がたっぷり聞きたいわあ」と久村。

「俺の意見か？　しょうがないな……皆、よく思い出してくれよ。恩田会長は、明らかに尋常じゃなかったよな。姿形は元のままでも、その中身は何か別のものに摩り替わっていた。連中――『蟲』は、変態しなくても、人間を操作出来るのだと考えられる」

橋月が異様に真剣な表情でこちらを真っ直ぐ見ている。久村に比べ、熱心な聴衆だ。もちろん、久村も椅子を傾けた姿勢ではあるが、仔細漏らさず耳を傾けているようだ。

「しかも、明らかに恩田会長は、他の『蟲』の変態の促進や統制をしていただろう？　つまり、恩田先輩に『憑いている』のは、連中の中でも首領か幹部クラスになるんじゃないかと思うんだ」

一々反対意見のけはいがないか、配慮しながら話す白岡に、代表でうんうん、と久村が合槌を打つ。たえこは久村と常に同意見と見てもよいだろう。白岡は久村の反応を目安にすることにした。

「まあ仮に、恩田会長を連中の≪統制者≫と見てだ、その彼が口にした言葉は、連中全部の意思と見てもいいんじゃないかと思う。つまり、≪統制者≫の『要求』は、連中全体の『要求』じゃないのか」
「――要求って……？」

俯いて前髪に表情を隠していた滝田が、初めて不安げに疑問を口にした。ずっと様子を気にかけていたらしい橋月は、口を開いた彼女に、露骨にほっとした表情を見せた。
いい傾向だ、と白岡はこっそり口許を綻ばせる。溜め込むのが一番最悪だ。言葉を口にすることで、常に外界と接触し、不安を発散させていた方がいい。無論、元凶の一端を荷うたえこが側にいる限り、滝田は到底心の底から安堵することは出来ないだろうが。

「じょおうをだせ――さ」

白岡は一気に吐き出した。

「何度も何度も彼は要求していたよね。俺たちに要求されていたのは、実はそのたった一つなんだ。『女王を差し出せ。さもなくば殺す』。つまり、『女王』とやらを差し出せば、それで連中の用事は済むんだろう」
「『女王』って何なの――！？　そいつを差し出したら、本当に私たちは助かるのッ　ねえ！！」
「た、滝田さん、落ち着いて」

席を立って声を荒げる滝田に、慌てて橋月が彼女の袖を引っ張って宥める。

「まあまあ、滝田さん。今の発言、いい線ついていたよ。そう、『

女王』っていうのは、『そいつ』なんだよ」
「――え？」
ぽかんと固まる滝田に、白岡はにっこり微笑んだ。
「『そいつ』……つまり、俺たちの中の誰かさ」
はっと数人が、互いの顔を見回した。猜疑と渇望と困惑を伴って。
「おいおい、俺たちの中といっても、まあ生き残った奴ら全員の中だよ。百人くらいの中の誰か一名」
「あ……そうなんだ」
志田『たろーちゃん』が気の抜けた声で言い、それをきっかけに滝田がへなへなと座り込んだ。
「体育館に集まった全員に、≪統制者≫は要求していただろう。つまり、連中は生き残りの中に彼らの探し求める『女王』がいると踏んでいるものの、誰が『女王』なのか、特定できないでいるんだろう。だから、差し出せ、なんて要求を突きつけて来たのさ」
「な、なるほど」と橋月が目一杯感心したように呟いた。
「でも、本当に生き残りの中にあの『蟲』たちが探している『女王』とかいうのがいるのか？」
そもそも、『女王』って――と橋月が尋ねた。
「さあてねえ、本当に『女王』とやらがいるのかどうかはこの際問題じゃないかもな。連中が、俺たちの中に『いる』と踏んでいることが問題なんだよ。そう信じている限り、あいつらは俺たちを襲い続けるだろうね。要求が叶えられないんだから、それこそ、生き残

りが全員死滅するまで」

ひ、と滝田が息を呑む。しまった、脅しすぎた、と白岡は反省した。だが、おためごかししても、現状は変わらない。

「それで、まあ、俺たちはさっき街の住人を三分類したよな。『蟲に変態した者』、『時が止まった者』、そして『俺たち生き残り』」

うん、とほぼ全員が頷く。

「さて、では尋ねようか。この三分類を見ても分かるが、何故無事でない大多数の者と、無事な少数の者がいるのか。その境界は何か。無事な者は、街の様子を見ても、恐らくうちの高校の連中ばかりで、しかも何故第二学年に偏っているのか。『蟲』たちは、何故俺たち生き残りをわざわざ体育館に集めた上で、この中に『女王』などというものがいると思い、そいつを差し出せと要求して来たのか。しかも、連中は生徒を捕らえて――有体に言うと、ずばり人間を『捕食』した。つまり、連中は捕食者で、人間は被捕食者の関係にあるってことだよな。全部あわせて考えてみようか」

ざっと要点を連ねてみると、志田『たろーちゃん』が全ての疑問に見えない一本の糸が張っていることに気づいたのだろう、見る間に真っ青になった。

「え……えっと、ちょっと待ってくれよ。今考えているから。え、あれ、つまり……」

何かが見えたものの、うまく言葉に出来ないで、すっかり混乱している。

「落ち着け、たろーちゃん！　俺がついているぞう！」と久村。
「いや、おめーがついていると、余計混乱すっから！」
すげなく言って、志田『たろーちゃん』は見事に落ち着いた。
「ん、何か分かったぞ！　えーっと、えーっと、多分、氷山の一角が分かった！」
「んまあ、俺、ぜひ聞きたいわあ。何かおっしゃって！」
その氷山の一角とやらを！　と久村が身を再び悶えさせる。
「だからな、つまり、あれだよ。もっとしぼれるんだよ。『女王』って奴がなんなのか、わかんねーけど、もっと対象範囲を絞れるんだ。俺たちの中だよ。俺たち二学年の中にいるんじゃないのか――？　だって、生き残り組の構成って、滅茶苦茶偏ってるじゃん。おかしいよ。ってアレ？　何で偏ってるんだ？　あれ？　『女王』がいるから偏ってんのか？　何でだ？」
再び自問自答の蟻地獄に落ちて行く志田『たろーちゃん』に、白岡は満足げな笑みを浮かべた。久村が天井を仰向いて、
「大当たり」
とだけ言った。

志田は情けない顔をする。

「お、大当たりってえ、なんだよお」

椅子を傾いでいる久村に代わって、壇上の白岡が口を開いた。

「志田、お前間違ってないよ。『女王』が俺たちの中にいるから、俺たちは生き残ったんだ」

「え、あー？」

混乱する志田に、白岡はゆっくりと、

「いいか、全ての異変は蟲のせいだが」

そこで一度言葉を切った。

「蟲が俺たちを生き残らせたんじゃない」

何とはなし、一瞬の静寂が満ちる。

つまり、と白岡は黒インキのマジックのキャップを抜いて、ホワイトボードに書き付けていく。

『大多数の異変（時間停止・蟲化）←蟲の影響

少数の生き残り（俺たち）←女王の影響？』

「生き残りの選定が蟲の意思によるものなら、連中は俺たちにわざわざ女王さまの居場所を尋ねる必要はなかったはずだろう？」
「だよなー」
久村がのんきな声で同意する。
「何しろ、連中は俺たちの中にいる目標物がどれなのかわからず、右往左往しているんだからなー」
白岡はじろり、と久村を見て、
「ま、そーゆーこったな」
珍しくラフに肩を竦めた。
「ど・どゆこと？」
志田は混乱しているのか、すでに泣きが入っている。
「つまり、木を隠すなら――」
「――森の中ってわけだな」
打てば響くように久村がつなげた。この二人、一見凸凹コンビに見えるが、どちらも頭の回転が速いのでよくよく気が合うようだ。
しかし、志田や橋月などはすでに話に追いつけていない。いや、見えていないといった方がいいか。
だーかーらーと久村が姿勢を崩して椅子の背にずるずるもたれる。
「石を隠すなら砂利の中とかー、死体を隠すなら戦場の中とかー、

あえて言うなら『人を隠すなら人の中』ってねえ」

その瞬間、橋月の脳裏で青白い火花が散って、情報の断片が一本につながった。

「それじゃ私たちは……」

青い顔をしてガタンと席を立つ。

「『女王』を隠すための森や砂利ってわけか……」

「そーゆーことになるかもなあ」

相槌を打つ久村の声と姿が遠い。

『女王』とは、隠されるべき木であり、石であり、死体であり、橋月たち生き残り組は、隠し場所である森であり、砂利であり、戦場であり、

それじゃあ。

私たちって、一体何なんだ。

頭の破裂した同級生、その液体を被って、呆然とした後悲鳴を上げた女の子、弱者を突き飛ばして我先にと逃げ出した男子生徒、転倒して蟲どもに喰われた名前も知らない誰か……

思い浮かべるだけで、同情や哀悼の気持ち、そんな生易しい生温い感情では済まされない原始的な何かがざわりと騒ぎ、どうしようもない衝動を身体の中心から脳天まで走らせる。ぐるぐると眩暈を覚えた。

頭が沸騰しそうだ。

理不尽に対する怒りなのか、それとも先行きの見えない恐怖か。

名づけられないマグマのような熱が逆流しそうに渦巻いている。

こんなものをもてあましたまま、人は理性を維持出来るのだろうか。

異常事態に、もうどんどん自分が見えない箇所から崩壊している

ような気がする。

「なるほどねえ」

だんまりを決め込んでいたたえこが、形のよい指先を下唇に当てて呟いた。はっとみやった矢先、ふとその手が膝上に下ろされる。

「『女王』とやらは、蟲たちが生き残り組にその差し出しを要求したことからいっても、私たち人間の姿に≪擬態≫していると考えた方が良いわねえ」

「じゃナイ？」と弟は姉の意見を疑問系で肯定してみせる。たえこは満足げに頷いた。

「それと、『女王』は蟲の影響下――時間停止・蟲化――にはならない能力があると考えられるわ。むしろ、蟲の影響下に入るわけにはいかない理由があるのかもしれないわね」

「んー、例えば、『女王』さまは≪擬態≫の能力で蟲から隠れてると仮定するね。で、その≪擬態≫は蟲の影響下に入っちゃうと多分解けてしまうんじゃないかなーと思うワケ。つまり、蟲化は避けるしかないとはいえ、時間停止した時点で、見つかりたくない蟲さんにばしーっと居場所が察知されて、特定されてしまうとか」

「そうね。そうすると、やっぱり時間停止するわけにはいかない。でも、蟲の影響から免れる個体が一人だけだとしたら、おっそろしく目立つわよねえ」

例えて言うなら、死体の群れの中に、一人だけ生きている人間が突っ立っていたら、敵さんはすぐに気がつくだろう。かといって、無防備な死体の振りをすれば、どういうわけかその時点で発見されてＯＵＴというルールのようだ。

「そーすっと、やーっぱり≪擬態≫対象を複数『道連れ』にするし

かないよなあ」

いーい迷惑だねえ、と久村はぎっこんばったん椅子を漕いでいる。白岡がふっと嘆息した。

「『女王』は自分以外の対象も蟲の影響から守ることが出来るが、全てというわけにはいかないんだろう。だから、敵を霍乱するために、自分が≪擬態≫している個体とよく似通った個体を選抜して生き残らせた、というわけだな」

つまり、二学年ばかり生き残るという偏りを生んだのは、『女王』が俺たちの中にいるからなんだろう。女王の意思によって、俺たちは囮として生き残らされた。

なあ、志田、そういうわけだ。

女王陛下の生き残り戦略ということだな。白岡は淡々と締め括り、眼鏡を押し上げた。

「ま、推測と仮定のチャンポンだけどな」

「だよねえ」

久村が応じて、

「で、これからの対策どーっすかねえ」

話を振った時、

るるるるるるるるるるるるる

場違いな音が鳴り響いた。

音源を捜して、全員の視線が一箇所に集中する。

「……え？」

呆然と、橋月はスカートの内ポケットに手を当てた。硬質な感触。携帯電話だ。

「鳴ってる、よ？」

若葉がぼんやりと促す。

「あ、うん」

何で、とか、どうして、とか。
うまく頭が働かないまま、取り出して、

「……非通知だ」

赤いネオンがせかすように瞬いている。
閉鎖空間でつながる筈のない携帯電話。
でも、なっている。啼いている。

「出てみなよ」

若葉が硬い顔でもう一度言う。切れちゃうかもしれない。そう若葉の表情は言っている。
そこにいくばくかの恐怖が浮かんでいるのを、橋月は気づいてしまって、視線を落とした。
ぼうっと痺れた頭で、何となく久村の方をみやると、彼は無表情に頷いてみせた。
ＧＯサインだと感じた。

切れてしまう。
震える指先でもどかしげに外線ボタンを押した。口から心臓が飛び出しそうだ。こめかみの辺りが脈打っている。
誰かの喉が唾を飲んだ。
私かも。
耳に押し当てて、何者かの息遣いにどっと血の気が下がった。
――私は、一体『何』と話をしようとしているんだ？
そういえば、私はどうして必要もない携帯電話を持っているんだっけ？
あれ？
おかしいよ。
なんだかちぐはぐだ。
いつからおかしくなったのか、橋月には分からなかった。
もしかして、と心底恐ろしくなったのは、異常事態は何も今日に始まったことではないのかもしれない、という可能性だった。
いろんな記憶がでたらめなんじゃないか。
もう、ずっと前から自分の日常はおかしくなっていたんじゃないか。
握り締めた携帯、耳をすませた向こう側から非日常がやって来た。

”……チャンネル……が…つ……りま……た……！！”

違う、非日常に日常があふれ出した――のだろうか……？

おんみょーっじっ　↓　ぱるぷんて

”……チャンネル……が…つ……りま……た……！！”

――チャンネルが、つながりました……？

橋月はコンマ０．３で抜け落ちた部分をつなげる。そして混乱した。

何を言っているのか。一体誰なのか。でも分かる。すがりつける大人の声！

何でもいい、何だっていい。

確かに、つながらないはずの携帯電話は外部につながったのだ！！

たすけてください。

言いたいことが溢れ過ぎて、舌がもつれた。

つながった――その安堵感と驚愕で、目頭がかっと焼け付いた。手がぶるぶると震え、膝まで笑い出す。

たすけて。

たすけて。

わたしたちを。ここから！

「誰なんですか、私たち、学校にとじこめ、られて、るん、です！

あ、違う、ええと、来須、町、です！　らいす町の、らいす町の、っ　みょ、命婦高校の生徒です！！　おかしなことが起きているんです……！！」

悲鳴のような怒声を叩きつけ、携帯電話がみしり、と嫌な軋みを

上げるほどきつく握り込んだ。

”落ち……て。聞いて、下さい！”

混線状況は速やかに正され、ぐんと音が聞き取りやすくなる。

”こちらは、中国管区警察局……部……課……の者です。通じていますか！？”

「え、あ、なんて？　え、は、はい！　聞こえます！」

警察！！　細部はノイズでわからなかったが、聞き慣れた公的機関の名前に一瞬涙が込み上げ、意気込んで応じると、

「橋月、拡声ボタン、押して押して」

久村が空中にボタンを押すジェスチャーをした。汗で滑る手で、今にも取り落としそうな携帯電話を耳から離し、言われたとおりにした。

途端に、音声が何故かクリアになる。

”現在状況はどうなっていますか？　分かる限りでいいので、教えて下さい”

これで全員聞き取れるようになった。他の者の表情が変わる。

「あの、町全体がおかしいんです！　動かなくなってしまった人や、さっきまで人間だった奴が、む、蟲の姿に変態してしまったり！い、生き残りが私立命婦高校に百名ほど集合していたのですが、学校の中にも奴らが入って来て、いや、生徒が奴らになってしまって、

私たち、逃げ場が！」

”落ち着いて。もう大丈夫です。私は三田村栗人（みたむらくりと）と言います。君の名前は？”

「は、橋月です」

”橋月さん、落ち着いて下さい。これからすぐ我々が救助に向かいます――いいですか、橋月さん、君の周囲に誰か他に人がいますか？”

「はい、あ、わ、私をいれて、……し、ご、ろく、なな、七名、無事です！　他にも人がいるんですが、今ばらばらに散開しちゃって、無事かどうかは分かりません……」

”分かりました。直ちに救助に向かいますから、そこから動かないで下さい。橋月さんたちは今どこにいるのですか”

「え、あ、はい。私たちは……」

「待て」

制止したのは、久村だった。

「……え？」

「選手こーたい」

意図が読めないまま、とりあえず黙り込んだ橋月の傍らに、久村がすっと回り込むような動きで居並んだ。

「俺、久村といいます。俺たちのいる場所は言えません。だって俺、

あんたのこと信用してないもん」

”……君は？　どうして？”

「うさんくさい。悪いけど、俺たちが今隠れているのは、一種のアドバンテージなのね。そーそー簡単に隠れ場所はいえませーん」

”……なるほど。それは確かにそうですね。……では、今君たちの中に、『白岡正樹』という生徒はいませんか？”

一瞬考え込んだ後提示された名前に、メンバーは凍りついた。静かに様子を見ていた白岡は、指名されて組んでいた腕を解いた。

「いますよ。白岡正樹です」

沈黙は一拍のことだった。電話口の向こう、三田村は噛み締めるよう、ゆっくりと呼吸した。

”……やはり居合わせて……無事で良かった……”

そこで一呼吸して、語調が鋭く変わる。

”では、白岡君。Eレベルの情報開示を許可します。今後は君が連絡役をつとめ、全員無事に生還できるように指揮を執って下さい”

「Eレベルですか？　それって身分開示くらいしかできないような気がすますけれど……分かりました」

”では、指示通りに動いて下さい。進行状況と現状ステージは？”

「異変は昨晩から今朝にかけて一気に進行しました。橋月君の話通り、現在、『ステージ３ｒｄ』です」

”……間違いありませんか？”

「俺の学習レベルでは、そのように判断しました」

”異様に進行が早いですね……了解しました。救助までに、最短で半日、最長で二日かかると思います。それまで”

突然文脈がぶつ切りに途切れ、じじ、と何かが焼け付くような音がした。さっと緊張が走った瞬間、

”……ぶ、つん……っ……”

「うわ、切れたー」

どうでもよさそうな投げやりな響きを帯びて、久村が呟く。ええええええーっと橋月は頭が真っ白になって固まったが、「切れたわねえ」と、久村姉のたえこも髪を書き上げて一言で済ませる。他のメンバーは橋月同様唖然として、一体何が起こったのかまだ飲み込めていない。

「……つながっている方が異常な状態だったのかもしれんな」

皮肉げに白岡が切って捨てた。

「まあいい。言質――いや、許可は貰ったから、好きにさせてもらうさ」

「あ、あの、委員長。今のってどういう……ステージとか、それと

……お知り合い？」

携帯が切れた携帯が切れたとそればかりが脳裏を回っている橋月は、振り切れそうな緊張から一転、脱力状態に陥った。本人、言葉を選んでいるつもりでストレートに尋ねてしまっている。

「お知り合いというかだな、俺の校外活動先の上司みたいなもので……」

真っ青な橋月をよそに、白岡は宙を睨む。

「うーん、一言で言うと、あれもガヴァメントの一環でだな。管轄を超えた組織集団というか……対異界妖怪妖魔その他霊的諸々の処理を請け負う、非公式特務機関というものがあってなー、むかーしむかし、その協力者にスカウトされたんだよ。アルバイトみたいなもんな」

「……うわー」

橋月は長い沈黙の末、思いっきり鼻先に皺を寄せた。うわー、としか言いようがない。しかも呆れたように「うわー」とお茶を濁すしかない。漫画の世界だ。

「君たちー、その明らかにうさんくさい名前に対するうさんくさいオーラ全開態度はどうかと思うがなー、特に橋月さんと久村あたり」

名指しされた二人は思わず顔を見合わせる。

「いやまあ、俺でも鼻で笑っちゃうけれど、あるんだよ。実際、こういうまともな神経じゃ対処出来ない出来事って全国津々浦々で起きているわけだし」

ぶつぶつ言う白岡に、はーい、と久村が手を上げた。

「そのうさんくさいおんみょーじっ！　って感じの特務機関を信じるとしてー、ステージ何たらって何ー？　あと、Ｅレベルの情報開示ってどんなん？」

「Ｅレベルって今言った身分開示に毛が生えた程度の情報だよ。俺アルバイトだし、Ｄレベルまでしかアクセス許可ないからなー。Ｄレベったって、人事的なもんで、あんまり今は意味がないよ。ステージっていうのは、異界の侵食レベルのことだ」

「侵食レベル？」

「『ステージ３ｒｄ』っつーのは、はっきりいってもう最悪な。アチラのコチラへの逆流ってやつで、職員の隠語では呆れ半分本音半分”パルプンテ”などと呼ばれたりしている」

「”パルプンテ”って某有名ソフトの『何が起こるか分からない最強の呪文』ですよねー？」

「そうそう、『ステージ３ｒｄ』といったら、もう『何が起こるか分からない』わけだ。何しろ、異界がこちらの世界にどっと流れ込んで来て、現実と異界の境目がなくなっちまうんだからな」

最終状況というわけだな。とこれは久村。

「今回の事例って、その進行具合とかゆーやつが他の例に比べてはやかったのかー？」

「俺の知る限り、異常なくらい速い。普通は、一週間から一年、下手すると十年単位で侵食は進むはずなんだが……俺の知らない情報があれば、また状況認識も変わってくるとは思うがなあ」

それはともかく！　と白岡は語気も荒く腰に手を当てた。

「何で橋月さんの携帯がつながったんだ？」
「え、な、何でって、何でだろう」
突然話をふられて、橋月はあたふたとする。白岡は追求の手を緩めるつもりはなさそうで、眉間に嫌な皺を寄せている。
「橋月さん、何か思い当たる節は？」
「分からない……チャンネルが開いて、でも突然切れたし……」
でも、確かに、つながった。
チャンネルが、つながった。
いや、チャンネルという言い回し自体どこから来た？
どこへ？
外へ。
外？
「もしかすると……君はチャンネルを開く能力者なのかな？　境界を開く、穴を開ける、そういう能力が……」
「いいんちょー待て待て待て。俺考えたんですけどー！」
「何だ」
「あのさー、今つながったのって、外部にだけ？」
はっと、白岡が面を上げた時、滝田と若葉が同時に悲鳴を上げた。ごおっと空中に風が逆巻いた。そしてどこからともなく花の芳香とその花びらが竜巻上に捩れ上がる。
「いいやあっ　また変なのが出てくるの！？」
腕で頭を抱え込み、机の陰へとしゃがみ込んだ滝田の悲鳴すら突風は打ち消した。

――私、これ、見たことある……！

こめかみの血管が爆発しそうに、嫌な既視感で橋月は脂汗を流す。瞠目して、顔面を腕で庇いながら仰いだ先に、墨のような染みが空間から突如として滲み出した。薄紅の花びらが乱舞して視界が閉ざされる。

「――ん、な、気をつけろ！」

皆、気をつけろ！　誰が叫んだのか、分からない。橋月も何事か叫んだ気がするが、口腔に花弁が飛び込んで来た。でも、知っているんだ。あれは。

黒々とした闇の中から、白い女の指先が穴の淵にとっかかるようにして、這い出た。白い、白い、蛇にも似た青白さほの暗く闇の底から燐を放つ。染色された爪だけが異様に紅い。

「ひ！」

十字交差した腕と流れ落ちる髪の合間から目撃した滝田が悲鳴を飲み込む。ほっそりとした白い腕だ。だが、それはあまりにも異質だった。生理的に受け付けない白磁だ。フェルメールの描いた貴族的少女たちの静脈が透けるような白さを通り越して、更に白い。

――這いずり出てくる。

まるで蛇だ。うねる黒髪を髷に結い上げ、奇妙な程に印象と造作の似通った白い顔が二つ、唇は紅を一刷毛はいた血色。鏡写しの同一人物のようにそっくり左右対称転写された姿に、人工美の不自然な歪さを感じて、橋月は奇妙な感覚を覚えた。

新手の敵か。見つかったのか。様々な疑問が渦巻く中、橋月は臀部から背筋を駆け上がる予感にぶるっと身を震わせた。

『……た』

つるりと左右に同じ動きで滑り出た瓜二つの女たちは、とん、と軽い爪先で床に小さな足をつけた。バレリーナを思い出し、同時にあれは銀糸で蝶などの意匠を刺繍した纏足だと思い至る。黒の着物に暗紅色の帯を締め、それは大陸の装束のように見えた。硬直したまま固唾を呑んで見守る橋月たちの前で、二人は右袖口に左手を、左袖口に右手を差し入れ、作った丸い輪の中に同じタイミングで頭をくぐらせた。それは優美な品格すら感じさせる洗練された礼だった。　中国映画で見たことがある。拱手だ。この意味は、最高敬礼ではなかったか。

彼女たちは、感極まった口調で昂ぶりを抑えるよう、腕の中に深くこうべを垂れた。

『……お探し、申し上げました……』

同時に悠然と面を上げる。瓜二つに並んだその端正な二面は、花が綻ぶようにそっくり笑み崩れた。どう考えても人外の女たちは、橋月たちの解する言葉を話した。そのこと自体、全員に驚きをもたらす。彼女たちは、目尻の異国風のアイラインと、真っ赤な唇がとても印象的だった。まるであつらえた一足の靴も同然に、二人は一人だった。小さな花唇が同時に開く。

『……お母様……』

とりあえず、全員の目が点になった。一卵双生児以上に奇怪なほど容姿も雰囲気も仕草すらも寸分違わず同じ、その女たちの熱い視線は、橋月に注がれていた。がたん、と橋月は挙動不審に机の角に尻をぶつけた。若葉の不審げな視線に、

「ち、違う！　何かの誤解だ！！」

めいっぱい否定すると、何を勘違いしたか久村が「まあまあ」と理解のあるような笑みで肩を叩いた。

「はしつきー、潔く責任は認めようぜ。よ、おかーさん！」

「馬鹿言うな！　この年でお母さんになれるか、脳みそ沸いてんのか、タコっ」

「まあまあ、柔らかく言うと、下半身結合行為の結果だろ？」

ぐっと親指を立てて、久村がウインクする。憎たらしい。八つ裂きにしてやりたい。

「久村せくはらあっ　でもはっしー、不潔だあっ」

「若葉さん！　これは違うんだってば！　久村てめーっ　どこか柔らかい表現だ、このヤローっ」

「うーん、たえこさん。ありていに言って、橋月さんの歳であれくらい大きな娘さんを作るには、一体何歳で同衾しなきゃならないと思います？　世界的には、ペルーで最年少五歳の出産記録があるんだけれど」

「白岡くん、そういう真顔でセクハラ表現止めてくれない？　常識でいって無理でしょ」

「ですよねえ」

「もういやあ」

しくしくと滝田が泣き出した。橋月も泣きたかった。巴がしたり顔で、ぽん、とその肩を叩いたのが本当に泣けた。

永劫の四分の一カルパ

生んだ覚えもない娘に、お母様、などと言われて混乱しない婦女子はいないだろう。

ましてこの年で、こんな大きな娘をどうして作れる。生物学的に無理ではないか。

「いや、橋月さん。低年齢出産はまれではあるが、若年層でも妊娠・出産出来ないではないんだ。骨盤が未発達で通常の分娩が難しくても、帝王切開すれば、理論的には不可能ではないよ」

何故か嬉しそうに語り始めた白岡に、橋月は引きつった顔で彼のマッドな笑顔を振り仰いだ。

「ああ、無論母体への負荷はとても大きいし、倫理的な見地から、決して推奨しないけれどね。まあ実例も世界には最年少は五歳七ヶ月から、次に六歳、八歳と報告があるからね」

学内試験首席、全国模試でも常にＴＯＰ１０入りの白岡があっさり橋月の十七年に渡る強固な常識を覆した。

「委員長。それ、私とは関係ない。全然関係ないから。断じて無関係だから」

「ははは、分かっているよ、橋月さん」

――絶対分かってねえ、こいつ。

白岡の涼しげな笑みに、橋月は間違いなくこいつも、久村一味だ、と認識を新たにしたのだった。

「なーそんなんどーでもいいからさー」

散々からかっていた久村がのんびり遮った。彼は愛想よくはひらひらと不真面目に掌を振って、突然現れた未知の生命体に「こんにちはー」などと話しかけていた。

「お姉さんたち、橋月のお友達じゃなくて、娘さん？」

にこにこ愛嬌をふりまいているが、微妙に距離をとっている辺り、彼なりに身の安全をはかる配慮があるのかも……しれない。それより、コンタクトを仕掛けたりして大丈夫なのだろうか、と周囲の緊張感は否応無しに高まる。

切れ長の目をした瓜二つの女たちは、互いに目を合わせて、ゆっくりと頷いた。

「そうでございます。お母様、もはや一刻の猶予もございません。我らがこの地点に出現したこと、蟲どもも感知したことでしょう。すぐにこの場を離れ、我らとともにおいで下さい」

何重にも唱和される印象のある不思議な響きの声は、はっきりと聞き取りやすくなっていた。また、後半は橋月に向けての台詞である。

「ち、違います、思いっきり人違いです！！　それより、蟲がこっちに向かってきているんですか！？」

「はい」

右の娘が答え、続けて左の娘が口を開く。

「人違いなどではありません。どうか我らを再びお導き下さい。まだ我らは未熟なのです。お母様がいなくては、群れは針路を失くして存続することが出来ないのです」

「ですから、お早く、お早くお逃げ下さい。さあ、我らとともに」

まさに白魚の、と表現したい白い手が伸ばされる。ずば抜けて美しい双子の女性に、熱心に掻きくどかれ、ああ、せめてこんな訳の分からない場面でなければ、ぜひお友達になってほしかったと橋月は心で泣いた。

しかしこんなぶっ飛んだお嬢さんは常時でも遠慮したいかもしれない、と更に滂沱の涙である。

「色々意味不明だけど、蟲とは違って、少なくとも敵ではないっぽいし、退路を知っているというなら、ついて行ったらどうだろう」

白岡が全員に聴こえるよう提案した。

「「さんせー」」

久村と若葉が適当に挙手して賛同した。そのまま久村はへらっと笑う。

「いい加減、一箇所に留まっているのもやばいしねー、でも、もう遅いかもー」

え、と硬直したのは橋月だけではあるまい。それはあまりにも静

かだった。
ガラリ、と理科室前方の戸が開いた。まるで次の科学の授業に一番乗りの生徒がやって来たかのようだった。無論、これから授業があるわけもなく、彼は手ぶらだった。

「恩田先輩……」

やや呆然とした白岡の声は、乾いて一点の緊迫感を孕んでいた。

「やあ」

恩田は白々しく挨拶を寄越した。あまりにも普通だった。
普通すぎて異様だった。橋月は咄嗟に、悲鳴を飲み込んだ滝田を庇うよう左手を背後に向けて半歩動いていた。滝田の恐慌は防がなければ。もっとも、彼女が一番まともなのかもしれないが。
橋月だけでなく、それぞれが自衛本能を働かせて間合いを取った中、ああ、と絶望したような悲痛に近い呻きが漏れた。それは、双子の女たちが漏らしたものだった。

「遅かった」

何が、と問うまでもなかっただろう。異形の女たち二人にも、橋月たちにとっても、目の前に現れた恩田の形をしたものは、共通の認識だったのだ。

敵。あるいは。

「『天敵』です」

囁くように、女の一人が橋月に震える声で耳打ちする。もう駄目、

と女は白い顔を真っ青にしていた。

「諸君、これはこれは御揃いで、僕のお出迎えかな？」

恩田会長の言葉は滑らかだった。体育館演説の際に見せた平淡な口調ではない。

「変だな」

久村が口の中で呟く。卑近の橋月には聴こえた。

「連中、『学習』したのか？」

独り言めいた疑問は、続く恩田会長の言葉にかき消された。

「ずいぶん手間取らせてくれました。しかし、苦労すればするほど獲物を手にした時の喜びは格別だと思いませんか？　何しろ、第二世代の『娘＜デーヴァ＞』が二人もおでましだ。一体でも捕食すれば、一神年は大いなる繁殖を約束してくれる『収奪者』、その高位体が二人も！　ああ、素晴らしい高品質にして大量のエネルギィが手に入るでしょう」

恩田会長は静かに興奮しているようで、貼りついた笑みを浮かべたまま、まくし立てた。

「おお、それどころではありませんね。死にかけとはいえ、永劫の四分の一カルパも繁栄をもたらしてくれる『女王』、一番のご馳走だ。これを逃す手はない」

一歩、踏み出した彼に、突然甲高い悲鳴が緊張の糸を断ち切った。

橋月の背後に隠れていた滝田だった。慌てて肩越しに振り返った瞬間、

「こいつでしょう！？」

絶叫が迸った。

滝田の指先が真っ直ぐに、真っ直ぐに橋月を貫く。

指差された橋月は、意図が読めないまま愕然として、滝田に向け半分持ち上がっていた指先は行き場をなくしたまま宙に固まった。唇がめくれ上がり、血走った目は射殺すように睨みつけ、ほつれた髪が汗で頬に張り付いている。こんなに必死の形相、こんなに強い感情で歪んだ人間の顔を橋月はこれまでに見たことがなかった。いや、母親の顔はこんな風だっただろうか。

「『女王』って、こいつなんでしょう！？　だって、言ったわ！この化物の女たちは、こいつが仲間だって、母親だって言ったわ！！！」

「ほお」

恩田会長は微笑んだまま、興味深そうに相槌を打った。

「それで？」

「この化物たちを、あんたたちは化物同士で食べるんでしょう？今言ったじゃない！！　価値があるんでしょう、そうなんでしょう！？　こいつは、更に価値がある『女王』なんでしょう！？　じゃあ勝手にしてよ、もう勝手にしてよ！！　連れてって！　好きにして！！！　私は関係ない！！！！！　目的を果たせたのなら、もういいでしょおっ　早く連れて行って、好きにしてよおおおお！！！！」

「、た」

滝田さん？
うまく呼吸がつげたのか、そもそも吐いた息は言葉になったのか、橋月には分からなかった。ざあっと血の気が下がって、馬鹿馬鹿しいことにこの場で貧血を起こしそうな勢いだった。
「化物同士で決着つけてよ、私を巻き込まないでよ！！　そうしてよっ！！！」
どん、と背面に鈍い衝撃があって、突き飛ばされたのだと分かった。貧血寸前の橋月はさしたる抵抗もなく、踏ん張ることも出来なかった。無様によろけて、そうして。

そうして。
強い力で引き戻された。
腕を掴んでいたのは、久村。袖口を引いたのは若葉。二人同時だった。前方に崩れた体勢が、引き戻された反動で今度は二人の方に倒れかかるのを、彼らはやっぱり受け止めてくれた。
驚いて振り返ると、若葉が彼女にしては珍しくシニカルに口の端を持ち上げていた。
「勝手を言うな」
「そうそう、どーせ俺たち見逃してもらえるわけないし」
久村が追随する。

「そういうことだろうなあ」と白岡。
「あ、でも、取引っていうのは悪い考えじゃないよ、滝田さん」
フォローにならないフォローで、呆然としている滝田を慰める。
一方志田は、あわわわわと後ずさって、更にたえこは静観している。

「まあ、そういう具合なんで、どうせ俺たちを始末しちゃってくれるつもりなら、色々事情を教えて欲しいんだよねえ。ほら、この表現分かるかな、冥土の土産ってやつで」
久村はふざけた口調を崩さなかった。だが、それが高度な駆け引きであることに、橋月はようやく気づいていた。これが彼のやり方なのだ。
恩田会長の姿をしたものが微笑んだ。

「冥土の土産、分かりますよ。僕はこの個体と適合率が高い。僕は彼で、彼は僕だ。情報は共有されている」
「んーと、恩田会長、あ、その姿の人ね、に、とりついちゃってるってことかなー」
右方向に状態ごと、ぐーと首を傾げる久村に、恩田会長は親切な微笑を崩さなかった。彼の口調は途端に砕けた。

「あはは、違う、違う。僕は彼、彼は僕だ。君たちは僕らを『蟲』と呼んでいるようだけれどね、『蟲』になった者は元々『蟲』だ。地球という惑星が一つと思わない方がいい。そうだね、厳密には違うが、平行世界を考えてごらん。僕らはその一つからここに渡って来た。A世界の僕は、このB世界においては、『恩田律』という個体なのさ。僕＝僕だ。君たち人間が全く違う存在になったわけじゃ

ない、『蟲』化したものの平常の形は、たまたま渡ってきた僕らの、こちら側での姿に過ぎない」
「あー、分かったような、分からんような。つまり、俺は、別の地球では、『蟲』かもしれないってことですかね」
「そうだね。渡ってきた僕らのうち、適合者は炭素体を手に入れたということだ」
「余計分からんが、渡ってきたってーのは、『収奪者』とかいう団体さんの『女王』さまを追って来たんですよねえ」
「物分りが早くて助かるね。その通りだよ」
「で、もう見つかったと」
「ああ、彼女の協力で見当もついたし、もし間違っていても何の支障もないよ。非効率だが、君たち全員を捕食すればいいんだからね」

あはは、と恩田会長はさもおかしそうに笑った。

「もうお喋りは十分じゃないかな。せっかく『共生者』がいない好機なんだ、『女王』を頂かねば、渡ってきた我らの膨大なエネルギィは無駄遣いもよいところだよ」

言い終わらない内に、橋月は異変に気がついた。教室の窓。全てが。

「っひ！！」

体育館と同じ現象だった。窓ガラス全面が、赤黒い内臓のように変化していた。不規則に脈打ち、どくどくと生きて動いている。
滝田が絶句してしゃがみ込んだ。嗚咽も出てこない。そんな真っ白な絶望だった。

「『娘＜デーヴァ＞』の力で逃げられては困るからね。チャンネル

を閉鎖させてもらったよ」

笑んだ恩田会長の頭部が見えない手で捻り潰された。陥没したかに見えたそれが、ブラックホールに吸い込まれていくかのように、一点に集約されていく。次の瞬間には爆発的に膨張し、異形の、蟲の形に構成され直して、

「そうは問屋が卸しますかっつーの」

敵が変態している間に攻撃してはならないという、特撮戦隊物の掟はない。

少なくとも、この場においては適用されなかった。

「やれ！！　志田アーンドねーちゃん！」

飛び出した二人が、黄色い安全ピンを抜いた加圧式消火器のレバーを握った。火元ならぬ変態間近の恩田会長に向け、どっとガスに攪拌されたＡＢＣ粉末消火剤が噴出した。

腹腔

二メートル先まで白濁と放出される勢いはほんの一時だけだった。ＡＢＣ消火器の粉末なんて、何分も保つものじゃない。せいぜい十五秒ほどの時間だった。もっとずっと長時間続くものだと思っていた。違った。あれは瞬間的なものなんだな、と橋月の頭はとりとめもないトリビアの泡沫を浮かべては仕舞い込んで途絶えた。勢いはあっという間に小さくなってしまう。

数人用の実験台を巻き込んで、滑らかなクリーム色の床はぐしゃぐしゃの真っ白。

消化対象にされた恩田会長も咄嗟の防御姿勢なのか膝を付いたまま、白い粉末でのっぺらぼうの怪物と成り果てていた。

がらん、と盛大な音と立てて、消火器が床に放り出されるのを確認する暇もなく、

「逃げっぞ！　走れ！」

また逃走の合図。何人かが落雷に打たれたかのようにはっとして、身を翻し咄嗟に駆け出す。一人は机に腰をぶつけたのか、慌しい音とうめき声が聴こえた。更に先導役は引き戸を開こうと手をかける。

一連の動きの中、橋月は自分でも驚くほど『落胆』した。

消火器持ち出したのだって、起死回生ってわけじゃない。単に脱出の隙を作り出すだけだ。その場しのぎの小手先の戦術に過ぎない。

――またかまたかまたなのか。

足に根が生えて動けない。いや、動かない。目の前を横切る誰かの黒い制服が不意に振り返った。

腕をつかまれる。

しびれを切らしたのか、何してんだ、の焦燥感に苛立った声は右の耳から頭蓋骨を通り左耳に抜けて行く。久村だ。

――久村よ。また逃げてどうするんだよ。
ぎりぎりと万力のような強さでつかまれた腕を引かれ、橋月は顔も見ずに思い切りその手を振り払った。ぎょっとした反応が感触として残る。振り向きざま、一瞬、まさかという場面で手痛い裏切りの仕打ちにあったジュリアス・シーザーもかくあらんと合掌だ。
拒絶されて驚愕した久村の顔が焼きついたけれど、知ったことじゃない。もう戸口からすり抜けようとしていた若葉の驚いた表情も、久村姉のさぐるようなけはいも、一抹の申し訳なさとともに不愉快でたまらなかった。
静かに静かに心中に問いかける。
――また団子になって逃げてどうするわけ。
溜め込んで波打つその感情は怒りにも似ていた。
声を大にして叫びたい。この場をしのいでも、その後どうするのだ。何一つ解決しないではないか。
――逃げ回るのは、もうごめん、な、んだっ
仁王立ちして莫迦みたいだろ私はと震える暇もなく、逸らされた視界の隅に、祈るような姿勢で床に膝をついた真っ白お化けの恩田会長の口元がにやりと笑ったように見え、
「きゃあああああああああああぁぁぁあああああああああああ!!!」
悲鳴が幻覚と思いたいそれをしっかり裏付けた。
本当に、一瞬だった。
スローモーションに、一コマ一コマ秒送りどころかコンマ送りで映像が見える。
びゅるん、と白い蔦状のものがしなる鞭のように床を打って、稲妻の速さで滝田を貫いた。
――かに思えた。
何も考えていなかった。真空になった空っぽの頭で、本能的に身

体が動く。
両手を広げて、交差した腕で眼前を庇う滝田の前に身を投げ出していた。
――熱い。
衝撃の瞬間、感じたのは、熱。
自分の中に異物がある異様な感触と高温。
熱した鉄棒か焼き鏝のような熱い固まりが、腹のど真ん中を貫いた。尖った鋭いものが肉を抉るその筆舌を尽くしがたい感触に、橋月の身体は硬直した。
呆然と見下ろした己の腹部に、白い白い異物が突き刺さり、恐らく背中をぶち抜いて貫通していた。
恐る恐る、震える指先が腹の辺りを確かめて、ぬる、と滑った液体に背中を冷たい汗が流れた。
血。
血だ。
探る指先がぬるぬると滑る。まだ実は事態が理解出来ない。誰も声を上げなかった。突然、ワンシーンだけ無声映画になり、時間が止まったようだった。
熱い。痛い。痛い。痛い。痛い。熱い。
「ヒィ……ッ……！！」
背後で、ひきつけを起こしたような喘鳴が聴こえ、ああ、滝田さんは無事だ、良かった、と熱い涙が出た。途端に、時間が動き出す。ごふぉ、と熱い塊が込み上げる。口元を手のひらで覆うと、何度も塊が逆流して来て激しく咳き込んだ。
「ィやあああああああああああああぁぁぁあああああああああああ！！」

女たちの重なる悲鳴が弾ける。あの双子の女たちだろう。着物の袂で唇を抑えて、青白い頬に涙を流し、何度も自分を呼んでいる。
涙と吐血が止まらない。ふと見上げた先に、膝を払って悠然と立ち上げる白い化物の姿があった。のっぺらぼうが、口と思しき場所に亀裂を生じさせた。笑っている。背筋をざあっと寒気が走り、ぞっとする低い声が、

「……腹に、何か、隠しているな」

指摘した。瞬間、腹がねじ切れた。

「橋月ィ――っ――！！！！！！」

無様に倒れこむ中、久村の絶叫は遠く、小さなフェアリアの泣きそうな顔と、逆さになった皆の蒼白の表情が何故かゆっくりと流れ、しかし、どこか人事のようだった。ただ一つ、腹を探る異物が何かを見つけ出してずるりと触手を引き出す感触だけがリアルに感じられる。
視界の隅で、たえこが愕然と

「　　」

唇を動かしたようだが、なんといったのか聴こえなかった。
そして。
唐突に分かった。
久村兄弟も若葉も委員長も志田もフェアリアの友人もどうでもいい。
滝田さんさえ、助かれば。

同時に起こった事

腹を貫通する痛みは身体の中に焼きごてを入れられたかのようだった。

「腹に何か隠しているな」

恩田会長の擬態をした蟲の指摘に、熱で膿んだ頭は何を、と思う。腹に何を隠すというのだ。隠せるものか。開腹手術をして人体に何か隠すようなトンチがききすぎているどころか正気を疑う趣味はもっていない。どれだけ私は変態だ。

そう思う傍ら、引き抜かれる蔓状の何かとともに、いわゆる丸い宝玉のような物体が転がり出た。青白い燐光を内側から放つ、直径5、6センチメートル程の球体で、ピンポン球よりは大きいが、テニスボールより小さい。

こんなものが、腹から出てきた。

驚愕は激痛を凌駕し、いわゆる目から鱗状態に陥る。

「ほう、これは高圧縮エネルギィの塊、」

ぬめる触手の先で球体を掲げ、しげしげと観察しようとした恩田会長は、そこで不自然に言葉を途切れさせた。

一瞬のうちに、触手は熱線でスライスされた。

これまで静観していたたえこが、あからさまに己の人外の力を行使したのだ。

僅かの間に、多くのことが同時に起きた。

蔓を抜かれた橋月がゆっくりと倒れる。若葉や志田が咄嗟に彼を支えようと手を差し出す。
熱戦でスライス切りされた蔓が宙に舞い、青く燐をまき散らす珠が空中に投げ出される。
恩田会長が再び珠を手中にする前に、白い指先がそれを捕らえた。
一体何が起こったのか、正確に理解していたのはたえこ一人であろう。

「笙！　あんた口開けなさい！！」

鬼気迫る表情で飛びかかるたえこに、久村は「へあ！？」と間抜けな声を上げて、床に押し倒された。

「ふが！？」

燐光を吹き零しながら、青い珠はたえこの手で久村の口に無理矢理押し込まれる。その段階ですでに球体は固形を為しておらず、水溶性の物体が空中にほどけて溶ける――むしろとろけるようにして久村にの口径より取り込まれた。
実を言うと、ここでこの一連の怪異となる話は終わりである。
久村が青い珠を“取り戻した”時点で、何もかもが収束した。
“橋月”の出番はなかった。

目が覚めれば、命婦高校敷地内の某双子姉弟の巣に運び込まれ、泥のように睡眠を貪っていた。きっちりお約束の三日間というのだから驚きだ。いつの間にテンプレに目覚めた私の体内。
見知らぬ場所で目覚めた上、事態の飲み込めない以前に前後の記

憶すら曖昧であった橋月はしばらく脳の怠惰に任せ、ぼうっと天井を眺めていた。
寝ているというより、寝かされている。安普請のパイプベッドではなく、重厚な寝台は寝心地も抜群過ぎて、かえって現実味が乏しい。何やら半分夢見心地である。遮光カーテンがひらひらとレースをドレープさせ、冷気を含んだ風が頬を撫でた。
――あー、ここ、どこだ？
茫洋とした頭に、現実の疑問が追いついて来る。頭部の奥が痺れるように重い。鈍重さが身体にまとわりついている。緩慢に片側へと頭を巡らして、周囲の状況を確かめようとした時、
「おや、橋月さん、目が覚めたのかい？」
ちょうどこれもオーク材か何か凄そうな材質の扉を開け、委員長こと白岡が茶器を片手に、室内に足を踏み入れんとしていたところで、ひょいと片方の眉を上げてみせた。
というか、白岡、君は土足なのか。細かいつっこみを入れざるを得ない自分の性質にある意味眩暈を覚えた。
彼のもつ陶器のポットからは熱そうな湯気が細く天井に伸びている。
「ええっと、」
疑義が生じるばかりで何から問いただしたものかすら分からず、とりあえず上半身を起こそうとした橋月を、貧血にも似た症状が襲った。いわゆる立ちくらみだが、寝た状態でも立ちくらみになるのか、というくだらない疑問が脳裏を過ぎる。
「おっと、楽にしていてくれよ。君に何かあると、俺の安全保障に差し障りがある」

にや、と爽やかそうな割にかなり人の悪い笑みは、いかにも久村の一味だと思わせた。白岡はベッドサイドに茶器を置くと、橋月にも起き抜けの一杯を「飲めそうかな？」と勧めて、自身はびろうど張りのこれまた高そうな椅子を引き寄せた。

「うん、俺が思うに、君は現状と記憶の落差に頭が追いつかず、混乱している。違うかな？」

「違わない。私は確か――」

言いかけて、ぎょっとした。腹。どてっ腹に穴が開いていたはずだ。

慌てて腹部の辺りをまさぐり、ぎくりと身をすくませる。滑らかな手触りは、何の傷跡もないかのようで、思わず人目もはばからずに、寝間着の前をはだけた。

「おっと、大胆だな」

白岡は紳士にもあさっての方向を向いての言だが、耳に入らず、腹を見下ろして、なで回しては愕然とする。痴女プレイに興じているわけではない。決して。

「傷が、ない」

何もない。

「――夢？」

「じゃないよ」

間髪入れずに白岡が否定した。弾かれたように面を上げる橋月に、

彼はのんびりとカップに口をつけ、とりわけゆっくりとソーサーにもどした。

「うん、君が腹を蟲に貫通されたのは現実の出来事だ。その後、色んなことが同時に起きてね、一言で言うと、まあぶっちゃけ、元の鞘ってわけだ」

「ごめん、白岡。全然理解できん」

「はは、だろうね。まあとりあえず、君が倒れた辺りから順を追って説明しようか」

あの時、決定的なことが、同時に進行した。

腹部から蔓を抜かれた橋月が倒れた。橋月の腹から珠が転がり出て、恩田会長がそれを手にしたかと思えば、たえこが奪い、久村が彼女に押し倒された。彼の口の中に彼女は無理矢理青い珠を突っ込む。

久村はうぐとかうぐあとか、とてつもない間抜けな声を上げて、それから、むくりと上体を起こした。押し倒していたたえこはすでにのいている。久村は一瞬酷く無表情で周囲を見回し、状況を確認するとしょうもなさそうに上を仰いだ。

「うん、これはかなりカオス的状況だ」

呟き、恩田会長と目を合わせた。途端に、教室の窓という窓に張り付いていた赤黒い異形の物体が黒板消しでざかざか消したように消失し、真っ白などこまでも果てのない空間を映し出した。

「残念です」

恩田会長がそうでもなさそうに肩を竦める。

「随分無防備なポイントだと思っていましたが、裏を返せば、もっとも守護の固いポイントだったわけですね」
「おう、まあ、そういうこった。人の縄張りに土足でずかずか入ってその上あちこち踏み荒らしてくれてどうもありがとうよ。悪いけど、っていうか全然悪いとは思わないけれど、そういうわけだから、“出て行ってくれ”」

それで終わりだった。
恩田会長の蟲の形をした頭部は、まるで仕方ないという風に笑った。笑ったかに思えた。笑い、その場に崩れ落ちる。倒れた彼の頭部は元の恩田会長のものに戻っていた。

「貴方様は――」

瓜二つの女達が、目を見開き、驚きの声を呑み込んだ。

「ああ、俺は、いや、俺達は」

言いかけた久村に、特大羽虫が物凄い勢いでひっついた。

「おさあああああああああああぁぁぁあああああああああああああああああああ！」

フェアリアの巴である。

「うあああああああああああああ、お帰りなさいいいいいいいでもってまさみがあああああああああああああああああああああ」
「いやあ、分かった分かった、とりあえずお前の情熱の程は理解したからどいてくれん？」
「あばば、ずずずずびばぜん！！！」

飛び退く物体に、「何よこれ」と明らかに巴が見えているらしい滝田から放心した声があったが、一同それくらいの怪異は今更であった。
たえこがゆっくりと歩み寄り、感極まったように淡い微笑を浮かべた。

「おかえりなさい、笙」

声をかけられ、久村はバツが悪そうに頭をかいた。

「あー、ただいま。悪い、迷惑かけちまったな」

下唇を噛んで無言で首をふるたえこに、久村はその肩をお疲れ様とでもいうように叩く。
一方、これまで傍観者と化していた白岡は、全員の代弁をするような気持ちで口を開いた。

「そのー、二人の世界を作っているところ申し訳ないんだが、橋月さんは重傷だし、蟲は消えたようだし、外は綺麗さっぱりしたようではたまた異空間だし、察するところ原因らしい君らに、なにがしか説明してもらえれば大変助かるんだがどうだろう」

ノンブレスで畳みかける技は、本来の恩田会長直伝の技であったりするのだが、余談ではある。

「おう、悪い悪い。ちなみに橋月は大丈夫だ。いちばんに“何とかした”からな」
「そうかい。まあ君が言うならそうなんだろう。だが、“石橋を叩いて渡れ”という先人のありがたい言葉もあるので、確認させても

らう。若葉、志田」

声をかけた先、駆けつけて橋月の様子を確かめていた若葉が信じられない、という風に顔を上げた。

「穴、ふさがっちゃってるよう！　何だか分からないけれど、よかったよお」

だろう、とうんうん頷く久村に、白岡は苦笑した。

「ううん、さすがだな。愚考するに、たえこさん、もう“解禁”でいいかな？」

「あら、律儀にありがとう。箝口令は笙が“帰ってきた”時点で解除よ。とりあえず、この場では貴方の推論なりなんなりを展開してくれても問題ないわね」

げえ、たえこ、いいんちょーのこと脅してたのかよ、いつの間に……等と久村が漏らしていたが、たえこは聞く耳をもたないようすだ。

「どうもありがとう。“君達”はこの辺り一帯の“管理者”と理解すればいいかな。拠点はここ、命婦高校だろう？」

久村はたえこと目を見合わせ、破顔した。

「人が呼ぶ名称なんざ知らんがね、まあ言ってみりゃあ“管理者”だよな」

「そうね。私たちはここをずっと護ってきたもの。すでにさわりを説明したとおり、この地は私と笙の二人で守護してきたの。でも間抜けな片割れが記憶も力も失う事故にあってしまって、守りが弱く

なってしまったのよ。そこを、あんな汚らわしい蟲どもに突かれて、こんな無様を許してしまったしだいね」
「たえこー、間抜けって間抜けって」
「間抜けでしょう。あんたね、力の源たる“荒御魂(あらみたま)”を、人間の腹にぶちこむなんて、どこの土地神がそんなへまするってのよ。聞いたことないわよ」
「……すみません。っていうか、事故だー！　あれは事故なんだよー！」
「事故事故と言えば何でも許されると思ったら大間違いよ」
「おいおい、二人とも、痴話げんかはやめてくれって、これは痴話げんかなのか？」

自分のつっこみに脱線を仕掛ける白岡だったが、すぐに態勢を立て直した。

「あー、とりあえず、君達はこの辺りの土地神で、久村は事故で力の源を橋月さんのお腹に？　なんでまた？」
「話せば長くなるんだが……」
「手短に頼むよ、人の身ながら神に指図するなんて僭越だとは思うがね」
「気にするな、いいんちょー。俺とお前の仲じゃないか」
「うん、すでに最初からいい具合に脱線しているから、軌道修正してくれると嬉しいね」
「お前、俺のこと神様と全然思ってないだろう……とにかく、俺は十数年前、紅入(いろいり)海岸で散歩していたんだが、橋月の“前”にいる奴とぶつかって“荒御魂”が飛び出しちまってさ。この“魂”っていうのは、入れ物――例えば肉体に包まれていない剥き出しの状態だと酷く無防備でなあ。その後ふよふよとよろけてたら、多分ぶつかった奴を追っかけて来たらしい橋月の“元”とまたまたぶつかったんだよ。で、そいつに吸収されて混ざっちまったらしいな」

「橋月さんの“前”？“元”？」

「ああ。でもまあ、そのことについては、“本人”にきいてもらった方がはやいかもな」

久村の言葉に、視線の先を追えば、橋月本人が身を起こしたところだった。

「ああ！」

橋月を『お母様』と呼ばわった女たちが咄嗟に口元を押さえた。

「『守護殿』！！」

「そんな……では、まさか！」

何か判明した事実にひたすら驚愕している彼女たちに問う前に、口を開いたのは別の人間だった。身体を支えていた若葉が唖然とし、

「はっしーだいじょぶなの？」

呆然と呟いている。橋月はゆっくりとうなずき、微笑の形に口元を持ち上げた。

「どうもありがとう。大丈夫だ。それから、土地神殿、身体の修復礼を言わせてもらう」

頭を下げた橋月に、久村はひらひら片手をふった。

「ん、気にしないでくれよ。余計なお世話だったかな」

「いや、お気遣い痛み入る」

人が変わったかのような橋月に、若葉も志田も泡食っているが、久村は疑問に思わないようで、こめかみを所在なさげにかいた。

「まー何しろ、ついさっきまでいわゆる一心同体だった仲だしな」

「お互い災難だった。これほど意識が混線・混濁するとは……」

「いやいや、実体なしのエネルギィ体同士でぶつかって、混線くらいですんでよかったよ？　どっちか弾け飛んでもおかしくなかったし、分離可能な形で腹に保管してくれてほんっと助かったぁ」

「おそらく直後に現地調達で肉体を得たせいだろう。ほとんど死に掛けていたが、私と貴殿を綺麗に分断する形で、この肉体が保持してくれた。いや、一度混ざった魂を、この肉体が私と貴殿に分離するよう濾過沈殿させたのかもしれない」

「ああーなるほど。それで最近橋月に気がついたのかあ。混線ノイズで、これまで全然わかんなかったもんなあ」

一人合点している久村に、志田達がさっぱりついていけていないようなので、何となく話の輪郭を理解することのできた白岡は、ひとまず疑義を質してからと問いを重ねた。

「すまないが、橋月さんの“中の人”？　君はさっき彼女らが」

言い置いて、両手を組み震える女達に視線を向ける。

「――彼女らが、『守護殿』と呼んだ人だと理解しても？」

橋月は頷いた。

途端、女達は堰ききったように彼に詰め寄る。

「確かにお母様の匂いがしましたのに！　『守護殿』、いいえ、先

代殿、お母様はいずこに？　我らの群れはまだ母を必要としているのです。お願いです、お母様の場所を教えて！！」

橋月は無言で首をふる。

「どうして！？」

悲痛な叫びを上げる彼女らに、橋月は淡々と教え諭した。

「『女王』はすでに代替わりした。もう群れを率いる力は残っていない」

「そんなことはありません。我らには、まだお母様が必要なのです！！」

「力とは、貴女方を導く意思の力のこと。『女王』にもうその意思はない」

「そんな――我らをお見捨てなさったのか！？」

「違う。貴女方に“託した”のだ」

橋月の言葉に、彼女たちは瞠目し、

「貴女方が群れとともに宇宙を幾重にも渡れば、魂の巡る果てにいずれ見(まみ)える日も来ようか、と」

恐らく伝言であろうそれに、女達はわっと床に泣き伏せた。

沈黙していた志田が額を抑えて、天井を仰いだ。

「うん。わけが分からない」

見事に至言だ、志田君、と密かに白岡は胸中に拍手をおくった。

「大変申し訳ないんだが」

女達の泣き声が落ち着くのを待って、再び白岡の出番である。

「ちょっと整理をしたい。いいかい？」

一同頷く。

「まず、久村姉弟は、この地を管理する“管理者”すなわち“土地神”」

姉も弟もそれぞれＹＥＳの意思表示をする。

「それから、そこのお二人は、蟲の恩田会長やお二人自身の発言を鑑みるに、高エネルギィ体である『女王』を頂点とする『収奪者』の『群れ』の『デーヴァ（娘）』？　言っていて自分でも意味が分からないな」

袖のはしで涙を拭い、女の一人が応じた。

「我々は、惑星（ほし）を、宇宙を、世界を巡り、それぞれの地でエネルギィの余剰を少しずつ喰らうもの。故に、蟲どもは我らを『収奪者』と。蟲はその我らを喰らえば、容易にエネルギィを大量に摂取できるという理由で、界渡りをしてまで追ってくる天敵なのです」

「ああなるほど。それで、特にその頂点である『女王』　を執拗に差し出せと」

「ああ、恐ろしいことです。我らは天敵に対して何の力も持っていません。ですから、我らを護ってくださるよう、共生関係を築いた

一族がいます。彼らは我らにない攻撃力に優れ、また我らと同じ擬態や隠蔽の力によって我らを護ってくださいます。その一族の中でも『女王』付きの『守護殿』がおられるのですわ。」

あからさまに橋月を見やる女達に、白岡はふむふむと納得した。

――擬態ね。

内心ひとりごちる。中々興味深いキーワードだ。おそらく、橋月の“中の人”は『女王』に擬態していたのではないか。『女王』の娘達もまた騙される程に巧妙なそれは、見事に全員を引っかき回した。“中の人”が久村の“荒御魂”と混線して、意識混濁状態だった以上、それはオート（自動）で展開していた可能性がある。橋月自身、状況の展開によって自分が『女王』なのだと思い込まされていたかもしれない。

「さて、『収奪者』の群れを護る一族、中でも女王付きが『守護殿』ね。さっき先代殿と言っていたから、つまり、『女王』の代替わりとともに、『守護殿』も代替わりして、そのまさに先代守護殿が彼の“中の人”だと？」

「はい」

「うん、いくぶんマシに背後関係が分かってきたような気がするよ。君達は、『女王』の代替わりに伴い、群れを自分たちだけで切り盛りするようになったけれど、先代『女王』を母親として慕っていて、自分たちの元を去った彼女を捜しに来たんだね？」

女達は顔面を覆い、震えながら何度も首を上下させた。

彼女たちの望みは、その先代『女王』自身の意思によって叶わなかったのだ。

ところで、ここに来て白岡の中で一つの仮説が浮かんだ。

橋月の“中の人”は、久村の“荒御魂”とぶつかったことで混線

した。その混ざった状態で、橋月の身体に飛び込んだ。二人の思考は混線し、相殺しあって、本来の橋月の意識に押さえ込まれていたのだろう。

この世の者でない他者が一つの肉体に混じり合う不自然な存在は、妖精の隠れ里同様世界からずれ込み、常人に感知されにくい状態となった。また異物は人々に無意識の内に排除された。すなわち、橋月自体、小規模な隠れ里のような存在になってしまった。故に、誰も橋月に気づかない、という妙な現象が起きたのではないか。

だが、不自然な状態は永遠ではない。混じり合った二人のエネルギィは、肉体の異物を排出する浄化作用によって、それぞれに濾過沈殿し、再び分離した。だから、久村は橋月にようよう最近気がついたのではないか。

久村が騒ぎ出した頃が転機だったに違いない。

そして、“中の人”が追っていたという、久村の“荒御魂”をはじき出した本人こそ、『女王』だったのではあるまいか。

橋月は『守護殿』。

では、『女王』は？

蟲は『女王』がここにいることを確信していた。

橋月の“中の人”の擬態に騙されたのか？　だが仮説が正しければ、久村を弾いた『女王』はいるのだ。いるとすれば、どこに？

そこまで考え、ふと思う。しかし、それは重要な問題だろうか。

それより、橋月はどうなるのか。待て。今の橋月＝“中の人”＝『守護殿』だ。

彼女は乗っ取られる際、死に掛けていたという。

さっきまで自分たちとともにいた橋月は、肉体本来の人格なのか？

それとも、『守護殿』と久村の“荒御魂”が混ざった状態での仮人格か？

あるいは、蟲たちのように、A世界では蟲で、B世界では人間だが、全てイコール同一存在という平行世界論の適用なのか。

元の橋月というのは、一体誰なのだろう？
彼女こそ、もっとも正体不明なのではないか？
久村の”荒御魂”でも、『守護殿』でもない、それらを抑え付けて存在していたもの。
『女王』？
いや、違う。『守護殿』＝『女王』では図式が破綻する。
堂々巡りに白岡は頭を抱えた。

同時に起こった事（後書き）

ここまで。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3857u/

今夜町に宇宙生命体がふってきたそうです

2011年7月4日06時40分発行